

竹頭木屑錄

二

昭和四年二月上浣起筆

特別
14
1919
410



竹頭木盾録二

坎廬印存

白雲



貫名菘翁書

松有物
移以松
溪身獨
松有物
松有物
松有物

松溪

菘翁



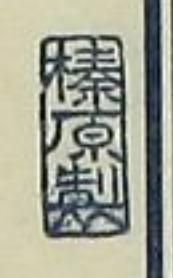
榊瀬日年余の古稀を壽し此印を刻し其勝を
為す今年余の所止の者之を捨りて以て紀
念すべき歎七十の齡を刻し其印を用ふる
に到るに寧ろ余のあまのとする所也昭和四
年二月五日記

○余前是日市井藝術の事を述べし而未だ
此物ももてるも是ふ何と榊瀬日年其の
詠次一二を變く曰く榊を伝ひ名之のなを
了るに瀧町に住む榊悠とある彼人の心は榊の用
材の善くしと名に望まざる彼人の善く榊師の
委棄する材を取らば巧みは味あるものも心算
（心外）刻しは多し木地を以ては其の心算の内



部、何れも物を極むと泰人の習法を傳
はると謂ふと云ふ。彼人の心算將微ありと
するに榊師の仲も、土南苑といふ年杖の
浴衣を伝ふるものあり、又江戸時代の流人
を今も伝ふるものあり、深法一と古法、花の
ある所を、海深を、一程のものも其の
純是、之を以て深法すめ、其の傳丸も可
と云ふ。日年自身能く、大津、後市市
井藝術の一二を知る可き、以上、前記、
此の如く、榊と云ふ、二月五日記
○徳中縣境あり、の岡民新多し、其の
此の如く、榊と云ふ、二月五日記

家の歴史的因事よ也。此の日の大株の根株
 嘉一なり、彼のいふ事業家のちも現い、未だ
 難題を提起し、二万米用の出資を返して
 貴の関係を絶つたといふ。此の難題を返すの
 前提より、彼のいふ難題が常の別文字を来
 して紙上に掲ぐるを帰るを思ひ、終に此の事
 放言するものなる難題の去らざるを得ざる
 所以也。難題を放逐して根株を成すにあ
 るるものなり、後者のいふ米減すといふ難
 題が放逐せんや、米を少き速早く招聘を
 と申出給へ大改命の事と云ふ、難題を遂に
 口説き馳せ奉る事か。



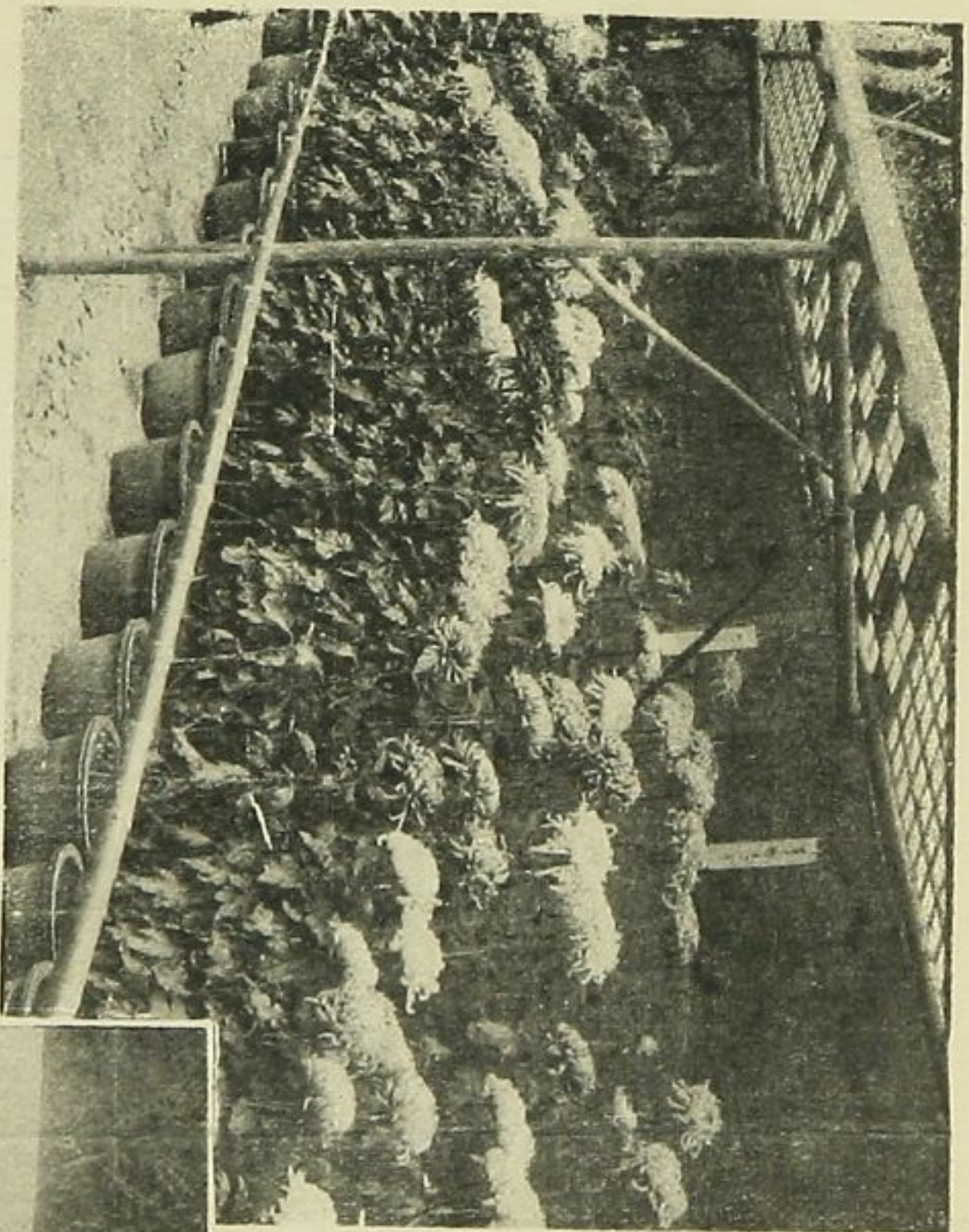
附記主大改命。八道之信額増資
 を与へ、若干米用の事と云ふ之んを少
 きに給ふ者大改命の何條件
 請ふべき又曰く、五万米用の増資に
 此りと、お社の配当の二割と云ふを及
 ぶ内容に信額増資の成り、怪しむる
 事あり、而してお社の此の拂ひを
 以て七更に、此の事なるを、策せんを
 する事

二月五日記

〇一ツ橋大寺時代の同窓山終久しく、酒番
 には思ふべく、此者一割の印刷代を乞ふが
 段、いふ事と、此の、謝辞を乞ふがよし、此

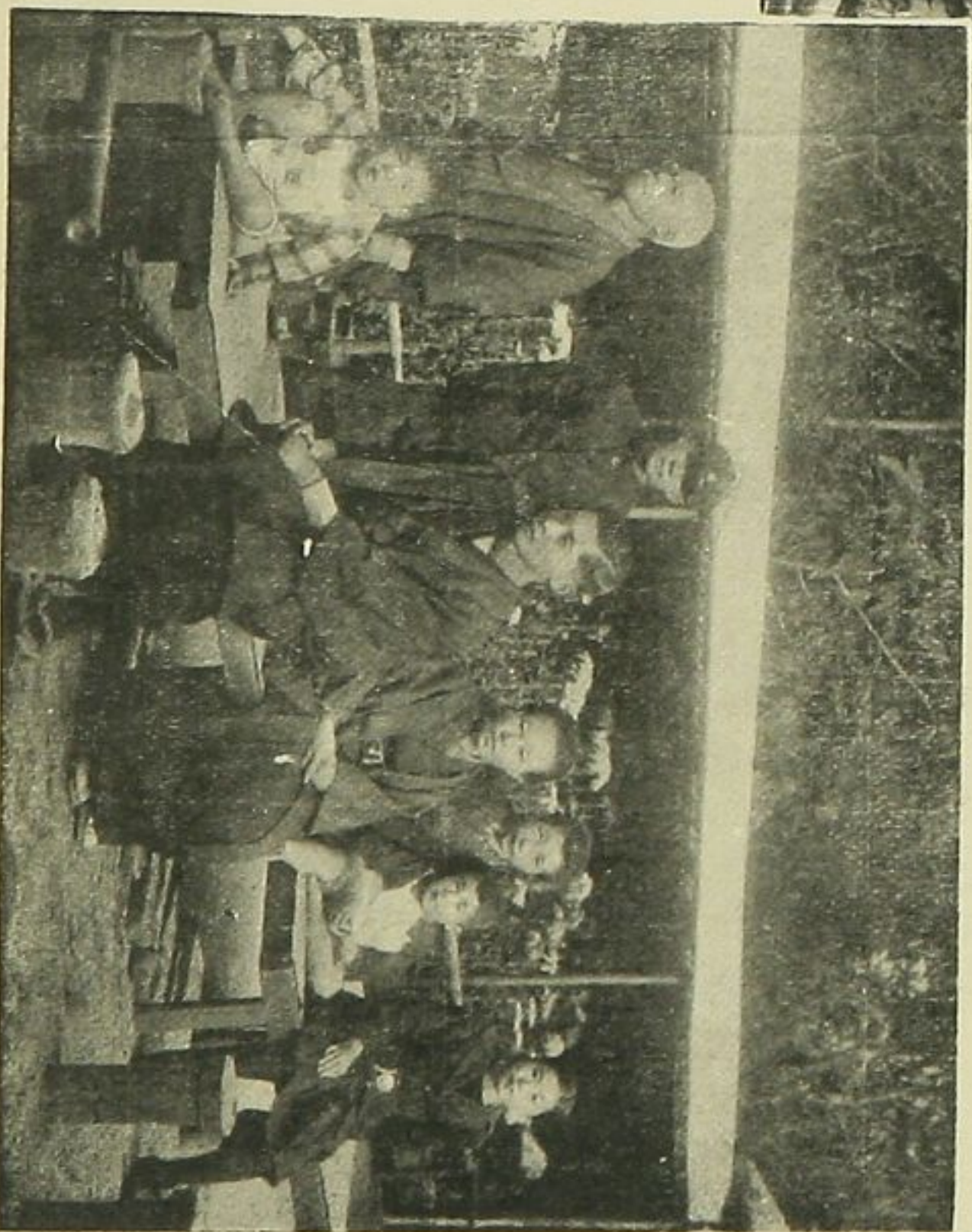
今余と同申なること者、就このかゝるあり、打願を
 とるなり、この女の考妣を収めおと二月七日
 の書付至誠をこゝに日本の辞書を贈る事、今日新
 印刷舎此の考妣する所にて、印刷板を辭の外
 西のゴゴロウ、ガウク、アビ、比して遊覧あるなり、此辞書
 第一とゴゴロウ、アビ、比して遊覧あるなり、此辞書
 人を荒干、特考を伝ふ、余も字もあつた
 こと其一事、則ちこれを不為也、祭に收め給ふ
 と云ふ

同上記



昭和四年二月五日

拜啓 立春之候、愈御清穠可被爲
 在奉大賀候降ラ小生事本日七十
 歳ノ誕生日ヲ迎へ不相變元氣消
 光罷在候間、午憚御休神被下度候
 平素ハ御無沙汰ニ打過キ殊ニ先
 年來ハ年始暑中等ノ御伺等モ一
 切相撥シ失禮ノ段御許被下度候
 歸郷以來、培菊ヲ樂ミ居候ニ付、弊
 園ニ於ル一家團欒ノ寫眞ヲ添付
 シ御笑覽ニ供シ候
 先ハ御見舞旁近狀御報申上度如
 此御座候
 敬具



山 縣 修
山口縣岩國町

今日笑迎稀壽春
 朝來元氣自清新
 惠風吹起岩陽里
 偏覺天恩及此身

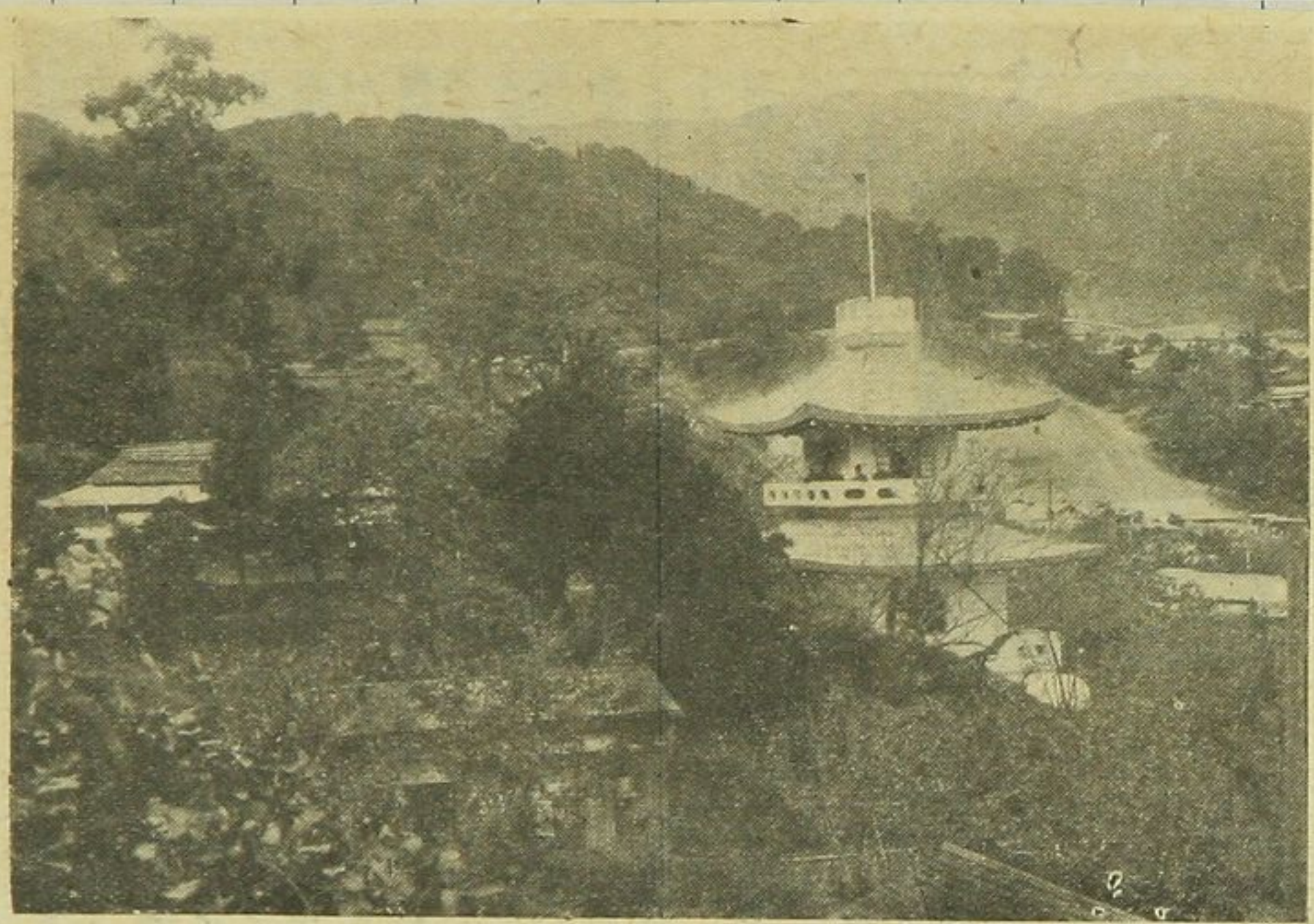
己立春偶成 台秀 老生

寫真人名

山縣 修、植子、四郎、

丹下方里子、正吉、勇、惠三、

今田 芳子



(照会事記頁九二) 堂書士博内坪の築新に海熱

右早稲田の早稲二月節
所載他の随筆の材料
とてこの収めおく

東都の谷打一大印を以て
秋成の稼穡を年賀状
に代へての寄るも亦
に谷打不花と見く
左の収めおく

山村元旦

久堅北

あまの山

道直くまもり

つかさく

秋よろつ代

も雪のしたより

をきのふや出し

鳴や心ありも

みれば、にこ草

なひくたいまより

あし曳の山へ

すも

雨そくけさう

老かくるかに

都には又も出

のしつけさ

文化三年春

易騒子

書

押花

上田秋成

標原製

反歌

久堅のあめなる道のと、の中に立にし春は十日

あまり過にけらしも玉くしけけさふたゝひのあ

ら璞の年迎へすも須賣美麻の神のさためし人の

道直くまもりて大宮の内にも外にもつかへする

つかさく、の珠しかす御庭に裳ひき袖はへて千

秋よろつ代ことほさきまをしたまへは、いつのま

も雪のしたよりふふめりし梅か香薫りたにの戸

をきのふや出し打羽ふき深山鶯木つたひて春と

鳴や心ありもあらずもしらす野邊みれば垣ねを

みれば、にこ草(嫩草)のなよひめくめり山みれば雨雲

なひくたいまより日影うらゝに高てらす今朝は

あし曳の山へをれば鶯の先我にとや初ねきか

すも

雨そくけさうくひすの花かさを我にかさなん

老かくるかに

都には又も出しとおもひなる世に、ぬ春のけさ

のしつけさ

文化三年春

易騒子

書

押花

上田秋成

標原製

反歌

久堅のあめなる道のと、の中に立にし春は十日

あまり過にけらしも玉くしけけさふたゝひのあ

ら璞の年迎へすも須賣美麻の神のさためし人の

道直くまもりて大宮の内にも外にもつかへする

つかさく、の珠しかす御庭に裳ひき袖はへて千

秋よろつ代ことほさきまをしたまへは、いつのま

も雪のしたよりふふめりし梅か香薫りたにの戸

をきのふや出し打羽ふき深山鶯木つたひて春と

鳴や心ありもあらずもしらす野邊みれば垣ねを

みれば、にこ草(嫩草)のなよひめくめり山みれば雨雲

なひくたいまより日影うらゝに高てらす今朝は

あし曳の山へをれば鶯の先我にとや初ねきか

すも

雨そくけさうくひすの花かさを我にかさなん

老かくるかに

都には又も出しとおもひなる世に、ぬ春のけさ

のしつけさ

文化三年春

易騒子

書

押花

上田秋成

標原製

Handwritten notes in various styles, including vertical columns and smaller characters, likely related to the main text or a commentary.

山樂の辯

みづからか

ことし七八月、那須の温泉いそゆに遊びて、暫らく新那須の山樂やまがくといふに滞留し侍りしが、ある日あるじに逢ひて、館の名の由来をたづね侍りけるに、あるじのいふやう、これは松方海東侯の名づけ給へるにて侍り、深き故よしは承り侍らず、但し、さる御方の「樂山」といはねば落ちつかずと仰せられしはさる事の候にやといふ。そはいづれにてもあるべし、西の都には、古、已に狩野山樂といへる天が下の大繪師おほえしのありしにあらすや、東の山國に、今、山樂といふ大旅館のある、何の妨げかあらんなど申し侍りしが、後つれづれのすさびに左の辯をもし侍りぬ。湯に酔へる癡人しれびとが旅の垢をかきすての烏滯うしげわざ、もとより大方の御目をけがすべきものには侍らず、たゞ月草詞宗のうしはき給ふ木敷きき深山の賑はひにもなれかして、枯木の恥姿をさらしたるにて侍り。

戊辰十二月吉日

甲鳥園主人しるす

山樂のあるじの君よ。君が館の名を、聲して讀みたまふことなかれ。人もし樂山やまがくとこそいふべけれ、山樂は格に違へりといはゞ、左候ふかと諾ひて黙もくしたまへ。人もし「山は樂なり」と讀まば破顔して、然り、薪は拾ふに任せ、蕨、木の實は採るに任す、水は鑿たずして清く、風は扇あふがずして涼し。されど飛花落葉、笹の葉の露、枯れ蘆の穂、人の世の哀れを知るに於いて、豈に海の人、市の人に譲らんと答へ給へ。人もし「山樂し」とは面白し、君は山に好き給ふにかと問はゞ、然り、山は土の秀でたるにて、地上の粹を集めたり。春に芽の萌え花の咲きそむるを始として、新緑の錦の美しき、夏の涼しき、秋の紅葉もみぢしたる、冬の雪の清き、いづれか目出度からざらん。況んや此の地權現影向の靈地にして、加ふるに温泉の玉の如きあるをや、と答へ玉へ。人もし「山の樂がくに聴き入りたまふにか」と問はゞ、然り、松の風、草のそよぎ、鳥の聲、虫の音ね、木こりの音、谷川の響、野分、時雨、落葉、木枯、いづれか耳の極樂には侍らざると答へ玉へかし。人若し「山樂やまがく」と讀みて、山悦ぶとはうれしといはゞ、君もしか覺えたまふか。花の笑め

る、緑の萌えたる、紅葉の化粧せる、六つの花の繽紛たる、皆山の包み切れぬ悦びの現れに侍りと答へたまふべし。

それ山は地の秀にして、樂は人の心の趨歸なり。而して已に山といひ、樂といふ此の二字双語の有する音と形と義と味と、皆之を其の中に含ましむるを得む。而して之れを含ましむるの秘訣は、目に字形を見て、之を聲讀せざるにあり。今われ君がために、君が館の名の意義を甚深微妙ならしめんとして、此の策をさぐ。知らず君に之れに隨喜する雅量ありや否や。

山たゞ山樂たゞ樂と目によみて

言はぬを言ふにいやまさらしめ

○田之部を歌後の雪をえり行くとを久方振来訪、五名
と探ゆ某とをむる人なる、まんと根かんと行く也といふ塚
の、後堂ありし由子の家、和名、其の舊名を辨る
住するも、余依つて和名の勤王の家なることと尋る
吾ら森を織石かつて三四月、河地家へ宿し、暮
未織石かつてを多る時、由子の父、在一が同志の一人
りしこと、及び、和名を大いし、劇演する所あり、織石
實は、和名をの、御里に、かき、高と生れ、和名を、山家、の、人
らう、
和名を、詩を、輯め、多し、和名、東、和名、し、和名、帯、和名、
和名、つ、和名、此、和名、余、の、和名、一、和名、を、和名、一、和名、
といふ、和名、中、和名、日、和名、西、和名、后、の、和名、和名、を、和名、後、和名、の、和名、記、和名、

に恐むぬものがある。田舎の地を

支那の新聞紙に據り直隸省の東陵なる清朝歴代の陵墓が發掘されたことの大意は已に承知したが。近頃北平から歸朝した友人今關天彭君に面會し尙ほ詳細の話を聽いて私は更に深く感動したのである。東陵は熱河の附近で北平より凡そ七日の旅程を要する。山嶽重疊。松柏蒼鬱の絶勝の土地である。當時北平より遠く隔たつたる深山幽僻の處に陵地を選定した理由は恐く北平の首府が戰亂の巷と化した場合にも。天子の陵墓は發掘を免かれんとの深慮に出でたものと思はる。之れは恰も我が徳川將軍の廟が江戸を距る數十里の下野日光の山中に置いてあるのと同様の意味であらう。然るに偶ま東陵は直魯軍から國民軍に投降した除源泉と云ふ旅團長と其部下の兵士によつて發掘され

たのである。實に意外千萬の話した。しかも其の發掘は大袈裟に行はれたものらしい。兎に角四千の兵隊が二十日の日數を費して發掘したと云ふことである。世間に此の事實が早く暴露せなかつたのは僻遠の山中に於て行はれたからである。初め西太后を埋葬せる陵寢を發掘したもののらしい。それは西太后の崩御のをり。莫大の寶物を棺中に收められたと云ふことは。已に當時宮庭奉仕の側近者より宮外に漏れ傳はつたのである。守陵の者も亦承知してをつたのである。こんな理由で先以て此陵墓から發掘に着手されたのである。西太后は崩じて已に二十年を経過してゐるにも係らず。棺を開いた時は全く生けるが如き顔であつたと云ふことである。古來支那では貴人埋葬の時に口中に多く玉を含ませる習慣がある。之れは口

東 事 第二集 四二 墓 七

身 事 第十一集 四二 墓 七

熱を去る爲めに含ませたものであると云ふ。杜甫の詩に玉魚蒙葬と云ふ文字があるが。此事を指したのである。西太后の含まれたものは頗る大きなものであつた。そして。此玉は西藏産のもので。一箇四千元もする高價のものであつた。之を口中より取出す爲めに鐵槌で頸骨を碎いたとか云ふことである。更に後の枕頭には翡翠で作つた西瓜が置いてあつた。これは世界の寶物とも稱してよいもので。其の價値は數千萬元もあると取沙汰されてゐる。其他珠履の如きものもあつたが。此等の寶物は悉く盗み取られた。そして西太后の遺骸は一絲をも纏はず今に赤裸にされてあるとかの噂である。何等の暴狀。何等の悲惨事であらう。

棺があり。一一之を開いて劔具寶貴な品を奪取つてしまつた。暴かれた其中に只だ獨り漢人種の美人があつて。殆んど二百年も経過せし今日に於ても。依然其の顔色が生けるが如く。美麗の女であつたとか云ふ事である。而して乾隆の玉棺を開かんとしたら。驟かに壁面から濁水が迸びしつて寢陵中一面に洪水が氾濫したので。兵匪ども恐怖の念に襲はれ。終に中止したそうである。それは思ふに秦始皇帝の陵墓を發掘したときに。水銀の海から金鳧玉雁の泳ぎ出したと言はれてゐるが。恐く乾隆帝の陵墓も萬一の場合を慮かり。穴中の池に水が貯はへられてをつたものと見えた』

其の次ぎに乾隆帝の陵墓を發掘したそうである。帝の陵寢に傍ふて十二の妃嬪の

こゝに収めるべき即ち事也。先角支那に此の種
暴の事あり、變遷を埋掩すること此の種を未
すよと知る。是を捕獲するに如く決して散
掘を始むることある。乾隆帝の墓を發見し
て起つ事、其の如くも支那帝主の墳墓を地
子ある余の如く切らざる也。吾が日本に此の地
の金庫を保護するに此法あり、秘藏の檢を板
心堂如地下室に充満すとか、全徳年此地の
後二小時最微後秘藏とて掘りて地下を掘り
見るとある此事を變へたりしに秘する所
つて、候儀切らざるに如くやくかまを
志す

聖を故に五帝の政年と稱し、五帝の政年
行境進み、漸やく日本詩家の唐末在家に比して
しくぬるあるを感し、美人も日本詩家に取ら
きよの如くと著す、其時五帝の政に如く五帝
類を以て、吾人の之を覺ることも曉し、吾人の之を
是つて煩悶するを、亦して此の煩悶を掘りて
地下に入るとあること、五帝の心事、其の如く
んらしと大概道に通するもの死に就かんとして
の時、其の如くひとり五帝の如くある(二月十三日)
の政、蘇波山浪蕪の詩壇を獨擅し、其の名あり、余前
年浪蕪に冬寓の日原堂、又其時より春、波
山の子をその即ち傳文堂を以てする三、其後

し柳宗敬の書を論じ
ることありき 逸 今見

木蘇岐山君は岐阜縣美濃の人で。従前本願寺の僧籍にあつたが。齡十八九の頃還俗して小川果齋と稱し。尙ほ僧泰と名を署してをられた。詩は京都で江馬天江及び伊勢小湊の二氏から學ばれたのである。明治二十二年頃に上京し神田の金港堂の番頭となつて。餘暇頻りに詩を研究し。専ら教を森槐南先生に受くるに至つたのである。當時槐南先生は麴町の永田町に住まつて居られたので。君は便宜上其の近所の隼町に居を移し。槐南先生が樞密院に出勤さるゝ前に早朝詩稿を携へ。先生を訪問し。其の添削を受くるを例とした。そして添削されたものを清書して翌朝又之れを携へて伺候し。總ての句に圈

東華 第七集

點を貰へるまで幾回も清書して加朱を受け。そして最後の清書を携へて。更に先生より評語の書き入れを受け。滿紙圈點で毫も改削の跡なきものをば同人に誇示して得意滿面であつた。何ぞ料らん槐南先生より委細を聞いた同人は其の稚氣を笑ひ。愛好の癖を憐んだのである。此時君は漁洋の詩を尊崇してをられたので。愛好は師傳であるとし。尊王黨の稱を與へられて居つた。君は其後姓を木蘇名を牧號を岐山と改めて全く別人の如くになつた。それから越中に移居して郷塾を開き。郷先生となつた。而して子弟を薰陶すると同時に。自らも刻苦精勵され。獨學十數年此間に學業大に進み。詩も亦殆んど面目を改むるに至つた。而して詩風は變じて黃山谷陳後山等の江西宗派に屬することゝなつたが。古體を善くし。近

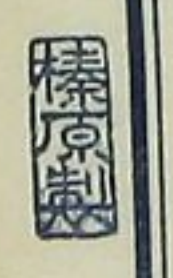
體も亦格律か森嚴で。何れも樸茂蒼古。古人の殘膏剩馥に甘んぜず別に蹊逕を開き。瘦勁の處は高く時流を抜くの概があつた。今日より見れば其の根柢ある詩は或は槐南先生を驚嘆せしめたであらうか君は當時才名を高野竹隱と齊くし。轡を並べて詩壇に驅逐したのであつたが。天分の詩才は竹隱が優れたやうだが。學問に根據があり。作詩の工夫に鍛鍊のあることは君が確かに一頭地を抜いてゐるやうである。君は實に明治詩壇の大家たるに負かない。其の著にも五千卷堂詩話があり。其詩稿も近く上梓さるゝとの話である。人一度其の轍を改むれば路も亦茲に新たに。勉學の効果は顯著なるものであることを私は痛感せずには居られぬ。

〇三意の流るる教の流るるを記す
然るも其の流るる

予も概を得ずしては
其流岐山と云ふも
詩三首あり其の
今田色物名を
を流るる及心
山の倒歴を
下るる努力今日を
しるる人と云ふ

二月十三日記

芝居も不振の爲り、近來芝居界は身者かやか早く
 言ひ立てり、早稲田と種々の點を比較し印刷物
 を必り、そのを相互に配布し、座の改革を策
 して、ある程度其の印刷物が平入つたのを初
 め、具體的不振の状を知ることを得た。芝居は比
 較的材料として挙げられてゐる早稲田の況計其他の
 座況の便のよきである。大体芝居の早稲田と異つて
 座況といふ言葉をもつてゐる。芝居の座況の不足
 を座況の収入の補つてゐるから、或許座況の不足
 甚ださうであるが、それを控除すると収入は控除二
 十五万六千餘円、芝居が少つたか、支出の部
 分は此の五割を減つても、座況費を控除す



して又、芝居に於て收支差引四十四萬六
 千餘円の不足となり、早稲田の六割は千餘円の
 剰餘を爲す大勢の妙く、あるが、尚ほ詳細
 の芝居の印刷物を見るを便とするから、左の如し
 を掲げる。

左の如し、昭和十一年十月

大芝居座長 藤田 研之助 先生 同人

の名を以つて配布し、そのことを

同人の代表者として此の木箱の中

の名を記し、

慶應大學と早稲田大學の現勢一斑

(慶應昭和三年度、早稲田昭和二年度)

項目	慶應	早稲田	両者の差数
(一) 卒業生累計	二六、九五六人	三〇、四五六人	三、六〇〇人
(二) 現在学生数	一一、三三二人	一四、三五九人	三、〇二七人
(三) 教員又在校友	一、二五一人	二九、八四五人	一七、三三四人
(四) 上層貴族院議員	三六人	一人	〇人
(五) 全衆議院議員	一人	六九人	五五人
(六) 圖書館冊数	一四七、八〇五冊	二九二、八九九冊	一四六、〇九四冊
(七) 最近二年演習会	五三、〇七人	一六七、四七八人	一二五、四六一人
(八) 同貸出書冊数	九三、六〇三冊	三〇八、三九八冊	二一四、六九五冊
(九) 社頭又名譽名	〇名	〇名	〇名

(十) 理事	内一人 無名	〇名	七名	内一人 〇名	四名
(十一) 維持会役員	四七名	二五名	〇名	〇名	
(十二) 評議員	四〇名	一五四名	一四四名	〇名	
(十三) 教職員	約七四五名	約八八六名	一四一名	〇名	

茲に約の字を附すは双方共兼任を包含し、其兼任人員は同教員
らぞ、から下す。

(十四) 諸収入金額	一、三三六、五五四	一、五九九、三〇二	二、五七六、七〇四
------------	-----------	-----------	-----------

慶應の收支計算表は現はれず、収入金額高は二七七一、〇一四であるが、其
の内一五、八四八四は「診察料、薬價、入院料其他」と称す、科目にして、
醫學部附属病院の純然たる營業収入方は、之に較ぶる、營業科
目も存せし、早稲田より対照には、此の収入は扣除す、を妥せし、
乃ち前掲数字の如く存、所以である。

(十五) 諸支出金額	一、六九八、六一四	一、五三三、四三三	一、九八、一七九
(十六) 収入過不足金額	不足 四、六〇七、六四	剰余 六、八六九	赤字 一、九八、一七九

度應ノ支出金額高は二、六五七、五六三圓となり、前項収入金ノ却に於て病
 院ノ営業収入を扣除したる、当然ノ相殺として、支出ノ部に於て「病
 院員ノ五七六、五〇六圓を真先に」に扣除し、尚ほ「海外留學費、研究費
 出張補助及旅費」八、一四三、三三〇の約半額四、〇七〇、〇〇〇圓、「諸経費」二、五〇、
 〇〇〇圓と更に「醫學部建設勘定収支不足額補助」九、三四六圓の金額
 迄も、病院員ノが為めに「醫學部」の院備を一層急速に必要とするの
 事情もあつべし、この斟酌よりして、削除して看業したるん拘らず、
 猶且前掲(十六)項数字、如く大不足を弄すべからざる。

(十七) 貸借金差引額	借 六八七、二二四	借 一、九五四	貸 一、二五八、二八六
-------------	-----------	---------	-------------

此項目に於ては前者の貸借勘定中の「諸預金」及「収支金」及「現金」の

右合計と負債勘定中の「諸預金」借入金」及「學校債」の右合計
 との差引額を示すのである。双方共貸借尻に於ては借たふを免
 かれぬと其差引額の大なるは注目に價す。

(十八) 有償証券所有高	六〇七、四三二	五九、八三三	七、九八八
--------------	---------	--------	-------

以上列記十八項目中(九)―(十三)は學校の行政に關する事項で、其行政
 事項中二三の根本的改革の資料にふる供せん為め、本調査を行ふ
 所以なれども、それら就ては既に別に立案書あり、を以て茲には
 言及せずとして、借て前記何れの項目を觀て、議者より「雄
 弁」の教示は、度應が遙かに早稲田の後に瞳若たる收勢を記
 據してねばならぬ、但し幸に度應には病院と云ふ營業業あつて、其
 収支の剰余金を以て一般會計の不足を補充し居る為め、全
 體の収支尻は(十六)に現はしたる赤字の計り、如く四、六〇七

七六四の不正勘定とはならずして、五封ん一三、四五〇四の剰
年勘定となり、早稲田の六、六九四の剰余に比し、年度計算
の成績は遙かに優良なり、は相違ないが、併し同町人（十七）
の示す如く、貸借金の長引尻に於て、慶應は遙かに早稲田より劣
悪なるを見通しとはならず、のちならず、忌憚なく言へば、財
政的に氣息奄々たる学校として、慶應は、繞かぬ病院の筆惠
に依つて其生存を保持し居るの實状であるから、決して健康
状態と看する事とは出来ず、斯く解説するに付し、不都合なり、
不埒なりと叫ぶ愛塾者あらば、其一矢を以て二矢を以て三矢を以
て敵愾せんと欲するの事である。

左れば今後慶應が既設諸学校の完備や拡張や又新設学科
の設置など行はんとするに當り、若し病院の自然増収をきいて
す、が、かきあらば、その姑息の骨頂にして、斯く考へては借金の
の整理も、頗る困難となるべからず、況んや積極的の施
設に於てもおやである、故に慶應は、前途大に發展に意あ
らば、所詮は塾員を中心として、廣く世向に寄附金の大募集を
為すべき要あり、は明々白々である、若し然らずと言ひ得
人あらば、乞ふ所り聞きたらむと云ふ事である。

以上の数字比較、極め公平にありと云ふ所は、
ぬ、尚ほ比較、進歩の大隈、新設を建設
一、比して其の寄附額、其の寄附者、協賛者、
人、以上なるべき事、と校友の熱心なるが、いさゝか
校心のゆゑ、更に、理工學部の新設、互あることなる

附着するを中く吹丸位に取らば物ひらき。私の
志急せしむるを先づ以て糸のやうな鏝を
復た作つて正面と歯を切り左左の鏝のや
うな目を切つて一方の挽きやうな左左の磨
いて行つたものなりと思ひます

またから又一の形らしいの針を入れば孔が
無の、舶来の糸鏝を持つて是れつても糸鏝
の太さが二層あると針の太さが二層出
るけん其糸鏝がスット直とまゐる。美
を換いて来た針の孔丈は歴々と残る
所が協物波の麻の葉香し中心の玉
を換して玉の際も直の四角を換

付けをある。何處から針を入れば分るぬけ
かき入ればさう違ひる。そこがぬけ入る
は、あんな丈の板、鏝の入れば無の。先づ
鏝うも針の研定を第一うも糸二か
鏝うんから先き、千ヨリトからさうさう

すうすう

此流が不昧公の房り、三の組の杯を此の流に、如く
見え、あからややく所がある。此流は、輪廻細く、ぬ
を得てお比といふ、之を仕ふる人並ひ、さうさう
と見へて、杯も固く出来て居るも、歪入る出来て
ある。おまげ、口木、横木、挽上げ、手
際、不昧、心、保、三

此といふ思ひをさういふのも、此泥が蓋を引えつて
手み解ゆる、一ツ出て来れば、更にも手を解ゆる
と亦出て来れば、多んがひつたり、金するともつて三つ
と思ひながら、あつたあつたの、公も金に感せん
れとある。

小井如泥の先祖は、物松本の大工で松平家の先祖が四
坊の時此大工も出て来て、随伴した。如泥の父は、安在二
のといふと、神を扶おを多受け、如泥も二代目安在二
門で、何だか坊主と見えん、如泥の坊主と見えんこと
を破るゝの考の所、此中、如泥と刺つてやつたを傳へ
んといふ、お合お例、侍も為用から、あつたえと
んから十石三入、扶おを戴き、奥布納に掃ぬ御用

御用

掛を御付けん、文化十年十月廿五日

去如泥の汽車が開き、此時、漸く出て来て、集つたお
と、扶おといふ、如泥の記念、今もひらけ、碑もあつた時：
運へるといふ、飛騨の甚事、いふ、あつたあつた、いふ
其の、安在、下、格、あつたあつた、如泥、こゝ、甚事、あつた
いふ、優、あつた、あつた、あつた、あつた。

○雑感「美の圃」が蒐集集をを出すまでのききえんもあき
しい投稿を頼むべきだ。蒐集集といふユレクシヨシ
と説くべきまじく苦心やロマンスを著き集める
の心あらう。自分ちのあつものよを或る程度なすむ
蒐集集といふ経験があるひもあつのが今取らまふ
云ふ事もあつた二三のあつた改定稿をこねめらる。
但し経験上いくと友人の叔味からあるうらまへ
蒐集集の心かくるを不可とするものがある。蒐集
の仕方蒐集の物柄等と執いて心持をなすべし
ともザツト考へてゐると凡そ左の七則とする。

一 放漫の蒐集集はさうさう
又それによし音ステムをえることとそ
芸術

的に蒐集を言はざるは、其の氣任を
何人の歎むも無差おに蒐集することハ
味しよの方法ハ、或る一類二類、備そ
の蒐集に其物柄の如何に拘らぬおある集
つて見れば無味の外に意味を生じてくるハ、
漫の集め方ハ唯に雑然に集むるのみハ、
○蒐集家の愚を表白することもある

一蒐集の人多く味性の物く所を後不譯ハ
自由といふは、有り觸れどもハ、蒐集
の目的より面白くする。有り觸れどもハ、
趣味が興いといふハ、其の妙ナリく手を下せぬ
いくども蒐集するハ、其の集める中、其の

るハ、やうなもので、得易からざるよを集
めてこそ興味がある筈也

一 蒐集は、その物柄を備へる、そのものを
集するもの興味を満足とせるハ、不
南の、或は行の教を空のせよといふこ
も、蒐集家の興いとする所ハ、あるは
その物が、その努力し、一年、一
得るもの、其の御方のよを、蒐集の目的
として興味がある

一 蒐集の、其の金を、その物の蒐集家ハ
大資本を擁する人の為すことハ、極めて
限らば、其の範囲の行ハ、七、七、七

善道は味遊の満足を得んとす。ぬす家
は枯てハ前項御者の物を望まると同じやう
常に困難に接せしむるやう其恨を感
ずし、無味を以てふこととせらるる。元来故
味ハ尤も年一七候の夏下に倒すことのみ
いふも、蒐集の範圍の或る程に於ては廣
ろくろけんとす。

一 蒐集物が頗る豊富なる地とす。終に
ハ里所ハ窮する。蒐集の地ハ其の結果と
其中の數ハ其を考ふる事あるから、大
の倉庫庫中のき地を廣くあつたことのみ
りん、此ハ蒐集ハ減るる合ハ難ハ例ハ

多くの石佛ハ其を考ふる事あるから、大
り歴史の紀念物ハ七利の材木由緒ある
建造物、其の多くハ善道ハ手出しが
未だ、この七八年ハ其力と信ハ制限を
けり、其の多くハ善道ハ蒐集家の目的物と
言ハ得る。

一 蒐集のものを蒐集する。蒐集家ハ可なり
ある、よめハ其の多くハ家族も手
難ハ其の多くハ無論公然陳列ハ其の
ハ一人ハ其の物ハ其の多くハ其の
其の多くハ其の多くハ其の多くハ其の
其の多くハ其の多くハ其の多くハ其の

格を傷みよむあるから、これを菟集の目的
とするに及び得ぬものがある。

一 敢て醜根と云ふてもういかに人々のよからぬ
よを菟集する人があつた例へん古道伝心
を何千是七集ある人のことときい、夙後研究
の資料に供する執意にも知れんが、人多く
のよの菟集といふは難い、尚ほ此種又
此の菟集の扱ふやり方がある。菟集
家の政後其の仕事を及くるも、今も我
々の苦心を葬ることもある。

菟集の百端に菟集家の伝味人格智後等より
百位を定するよがあるから、一概に菟集の

集

目的格を限定すること出来ぬが、大体永久性
のよのや全うする人一個の伝味に限る何人も其の
よの扱ふは、**一**や危途日境を歩むる
菟集の折角菟集に考するよと、**二**私共の
或は未だ何の要するよの目的菟集の伝味界
の問題より難い。

○二月十七日余の夜辰を十七日見余を
館へ迎へて日古格を弄するよの伝味を結ぶ
出席十八名、政後とし結ぶ出席の人四名
あり、未分あり余のつを格のよ、永の余の
配下、事務を承り、よのよ、**一**就族の
す、其の出席の伝味を

原井一 関大印 松木山 松井新次

(以上戦後にも物と来りたり) 阪口献吉

山田清徳 河津嘉波 大江乙彦

石塚三郎 小久江常一 程村宗八

小林望三 奥田雲花 村山祐之助

森崎素樹 伊藤 富田(以上又昆田河原)

如父四五次 山の教誠(以上欠席)

前年余の運慶を壽し等節七合場を多岐

王大抵等出席の人會しり、但し十年分

に没し等前回の出席者ある江都浪夫江田文次

郎の二人あり、當夜余七一坊の挨拶をなし運

慶を祝せんは其後十年の間幸い祝慶するん

運慶

りし等事い違し、閑事を弄し、絶不衣の衣

を掛し等不遇き事、但し十年間あり力を注ぎ

つゝあるに印創の書に凡か一生の印刷に閑

係あり事実を陳ぶ、席上十八名交り起る

余の既往を勉めよく運慶し、終に春城會

を設くることを決議す、余の記念として松葉

松十紙を出席者各に頒り、余の交りしもの氏

おこめあり、唯此日夕交りし一部の親暱家のみ

特に入らざるが、ある持味の跡を流かすことあり

あり等

(二月十九日記)

春城先生紅葉

十七日東京から 魚

越後關保としては市馬春城先生に
 博士號を、内藤栗城翁には少くとも
 男爵を贈すべきであると思つて
 あるのに、その事のないのを遺憾
 としてゐる。もち論兩人とも御本
 人にそんな野心のない事はわかり
 切つてゐる。春城先生自らも自分
 の一生を賭みて四十二年以前以後
 すなはち大恩にかゝられた以後の
 自分としては、何事かを有したや
 うな氣持がされ、といつてをら
 るゝ如くに三、四十年の間は早
 稲田大聖の遺説に、文藝者として
 の文章筆蹟に、なかく盡さるゝ

ところがあつた。なかつた。交際
 方面においては、極めて所かしい
 のがあつて、イツセーがあつた
 といふよりは、純然筆物の著作に、
 少くないものがある。私どもは、政
 治家としての春城先生よりは、ジ
 ャーナリストとしての先生よりは、
 早稲田大聖の建設にも大なるも
 のがあるが、イツセー記者としての
 存在にも優れて大なるものがある
 。ろくすつぱら自分の著書を持た
 ない癖に、博士號の、大きな贈
 をしてあるものが多いこの頃では
 、先生の如きが眞に博士號の所特
 者たるべきであらう。栗城翁にし

たつてその通りだ、かれが一生を
 井戸端に托し、日本石油史を編む
 までに至つた勞苦と、克己と、野
 險と、經營者とは眞に男爵に値す
 る。

その春城先生が本年古稀の壽に達
 したのである。最初はなんとといつ
 ても承諾を與へられなかつたのを
 無理に、門下生、特別の關係者、
 慶應に浴したものの、平素から家
 族同様に扱はれてゐる、どつちかと
 いふと厄介になつたもの、遂に限つ
 て、いつたやうな慶應で、内輪
 だけの祝宴を張る事にしてやつと
 の事でお許しが出て、二月十七日
 先生誕辰の日、芝紅葉館で、春城
 先生のための古稀の宴が、頭取こ
 そ少いが、師弟關係至極の流澤で、大
 々的に、行はれたのであつた。發
 企者は大江乙亥門、石塚三郎、小
 林三、松井龍治、奥田雪藏、坂
 口敏吉の六君。この夜の來會者は
 我輩春城先生の、他十七名で、座の位

置からいふと春城先生を正面ま
 中に、その左が龍井一、右が松木
 弘、松井龍治、伊藤宗八、小久
 江成一、森脇美樹、山田清作、村
 河竹重俊、富田鶴、山田清作、村
 山三郎、奥田雪藏、小林三、石
 塚三郎、大江乙亥門、坂口敏吉
 と左右に居ならんだわけである。

坂口敏吉君から發企者代表で誰か
 にあいさつを述べさせていただけ
 たい。そしてそのもの、指名體は
 自分に與へてもらひたい、と、言つ
 て拍手の賛成を得、頭のかく好と
 霜を見せつてゐる。僅だからいふと
 如何にも、老成化してゐる大江乙
 亥門君を指名する。大江君は雄辯
 した、そして春城先生に心からの
 頌徳表をたてまつつた。これに對
 する春城先生の御あいさつは
 還歴だ、古稀だと稱して祝宴な
 ど張つてくださるのには、私は大
 嫌ひである。が、かく別親しい
 諸君が私のために、こんな催し
 をしてくだつた事は、最高友

の體面と心算して、特に感
 謝を深くする。どちらを見ても
 書行では山田君、文明協會
 保では森脇君、といつた様に何
 れも家族以上の親しみを持つた
 方々ばかりで、中には風雪の中
 を舊國からわざわざ來られた方
 もある位で、私としては感謝に
 堪えない。九年前華甲の辭を
 へた時、その時の祝宴もこの紅
 葉館で開いてもらつたのであつ
 たが、その離れ列なつたもので
 今日その辭を拜する事の出來な
 いものに、江部尊夫、昆田文二
 の兩君がある。これだけは斷腸
 で、感懐の深いものがある。
 こんな意味の事を陳ぜられた。
 フと見ると床の間には、春城先生
 の筆に成つた墨痕あざやかな、筆
 端風を孕んでゐるやうな幅が、か
 けられてゐる。詩に曰く
 桃紅尚含宿雨、柳絲更帶朝烟、
 花落家僮未掃、鶯啼山客猶眠

春城先生紅葉

十七日東京から 魚

春城先生の謝辭があつたところ
 他日とまたか、春城先生につい
 ての隨筆を書かると時は、せひ
 この事を加へてほしい。春城先
 生は高田新助の毛筆として、新
 瀧龍淵の毛筆として、北越文壇
 に偉大の筆を揮はれたばかりか
 政治家としての、實政治運動に
 も超時流で、卓抜奇麗のものが
 あつた。後藤田が、政策をつち
 のけの大同團結といふが如き美
 名の下に、欺瞞的に、地方民を
 愚ぼんとしたその時に、先生の
 みは卓然、時流に拂ひなく、
 どこまでもこれに反對し、さす
 がの後藤田をして指を北越の地

に染めさせなかつた、のなどが
 その一つで、また或る時の如き
 死なれた坂口五峰大人と共に同
 好會の勸誘に、長崎に來られて
 どちらも青年氣鋭の時代、紅松
 線酒のちまた、耽溺され流荒
 亡、天子來れども船に上らずの
 有様で、困らせられたものであ
 つたが、いよく、難物三息魚二
 郎説得のだんになると、みごと
 手玉にとつて摘にした、その後
 敵には同志のものをして、舌を
 まかせたものであつた。
 こんな暴露戰術で、舊時をいふ
 ところが、次で、山田清作、石
 塚三郎、君からも、先生を中心と
 しての思ひ出書き、追憶談があつ

わが春城先生は趣味に徹底せる、
 をして多角性を持つてゐる。大下
 一品の癖がある。大江君などもこ
 の點をそろしく讚美したものであ
 つたが、其、百道樂のうち先生に
 は、未だ辨酒の味を解せざる、こ
 の一つが欠けてをるといふと先生
 は

辨酒の事と思ひ出したが、松平
 不昧公のベントに如泥といふ
 卓拔せる、不思議な癖を持つて
 ゐる職人、今でいふ工藝家があ
 つた。この如泥、大酒飲みであ
 るところから泥の如し、の癖を
 も擱んだのであらうが、毎日酒
 を買ひに行く時に五枚の板を持
 つて行つたものだ。そして先房
 の番公が一升を量つて出すと、
 如泥先生、そこで五枚の板を組
 合はして一升辨をこしらへ、そ
 の中へ酒を入れてもらつて歸る
 が、一滴も洩れたものではない
 とある。その如泥かほつたもの
 が、このうち(紅葉館)にもあ
 る。二階のことかにはめてあ

る點に、おの葉をほつたの
 があるが如何にも精巧細技を凝
 めたものである。なんでも氣の
 如き鋸を用いた上に、やすりま
 でを同時に使つたらしくある、
 とともに、凡工用技のよくなし
 能ふところでない。

杯盤の間でも先生の談話は、こん
 な風に趣味から離るゝ事をしない

それから記さう、縣が行はれ、小
 久江成一、小林三郎のクラン
 カルな演説があり、先生また、記
 念のためとつて揮毫、來會者の
 すべてに大小二葉づゝを贈つた。

この時奥田雪藏君の提議とあつて
 春城會、が組織さるゝ事となり、
 先生誕辰の日二月十七日をもつて
 年々、開催さるゝ事に極まる。最
 後さらに各自の卓上演説が、極め
 て自由の立場で行はれ、散會せる
 時は時間なんか知らざるほどであ
 つた。(寫眞は春城先生の書(終)

(23) 多年憧憬してゐた春城先生
 は、言ひ様もない大きな悦びであつた。而して、仔細に點檢

得境皆安

と實現し得るや否や、郷民は決して
 盲目ではないとの噂は既に公然
 の秘密として、聞かからずして

春城先生紅葉館古稀の宴

十七日東京から

魚

越後關係としては市景春城先生に
 博士號を、内藤栗城翁には少くも
 も男爵を興ふべきであると思つて
 るのに、その事のないのを遺憾
 とし、その事のないのを遺憾と
 してゐる。もち論、人とも御本
 人にそんな野心のない事はわか
 切つてゐる。春城先生自らも自
 分の一生を顧みて四十二年前以
 後のすなはち大恩にかゝられた以後の
 自分としては、阿事かを有したや
 りな氣持がされ、といつてをら
 るゝ如くに三十四年の間は早
 稲田大慶の建設に、交際者として
 の文章報に、なかゝる畫さるゝ

ところがあつた。なかんづく文藝
 方面においては、極めて輝かしい
 ものがあつて、イツセーが、つた
 といふよりは、純然たる著作に、
 少くないものがある。私どもは、政
 治家としての春城先生よりは、シ
 ヤーナリストとしての先生よりは、
 早稲田大慶の建設にも大なるも
 のがあるが、イツセー記者としての
 存在にも優れて大なるものがある
 。ふくすつぽう自分の著書を持
 ない、藤田博士の侯と、大きな
 をしてゐるもの、多いこの頃では
 、先生の如きが眞に博士號の所持
 者たるべきであらう。栗城翁にし

だつてその通りだ、かれが一生を
 井戸端に托し、日本石油史を編む
 までに至つた勞苦と、克己と、野
 險と、經營者としての雄略を値す
 る。

その春城先生が本年古稀の慶に選
 したのである。最初はなんといつ
 ても承諾を與へられなかつたのを
 無理に、門下生、特別の關係者、
 懇願に浴したもので、平素から家
 同様に扱はれてゐる、どつちかと
 いふと厄介になつたもの、遂に限つ
 て、といつたやうな範圍で、内輪
 だけの祝宴を張る事にしてやつと
 の事でお許しが出て、二月十七日
 先生誕生の日、芝紅葉館で、春城
 先生のための古稀の宴が、頭數こ
 そ少いが、前弟關係至極の流儀で大
 々的に、行はれたのであつた。發
 企者は大江乙亥門、石塚三郎、小
 林三郎、松井那治、奥田雪藏、坂
 口敏吉の六君。この夜の來賓者は
 主賓春城先生の側十七名で、座の位

置からいふと春城先生を正座ま
 中に、その左が藤井一、右が松木
 弘、森田治、伊藤宗八、小久
 江成一、森田美樹、山田潔、村
 河重俊、富田彌、山田潔、村
 石塚三郎、大江乙亥門、坂口敏吉
 と左右に居ならんだわけである。

坂口敏吉君から發企者代表で誰か
 にあいさつを述べさせていた大き
 たい。そしてそのもの、指名權は
 自分に與へてもらひたい、と語つ
 て拍手の聲を得、頭のかく好と
 霜を見せつてゐる。藤井一からいふ
 と如何にも、老成化してゐる大江乙
 亥門君を指名する。大江君は雄辯
 した、そして春城先生に心からの
 頌徳表をたてまつた。これに對
 する春城先生の御あいさつは
 還歴だ、古稀だと稱して祝宴な
 と張つてくださったのは、私は大
 嫌ひである。が、かく別懇しい
 諸君が私のために、こんな催し
 をしてくだつた事は、最高友

情の盛澤と心けまして、特に感
 を感ずる。どちらを見ても
 書刊行では山田君、文明協會
 保では森田君、といつた際に何
 れも家族以上の親しみを持った
 方々ばかりで、中には風雲の中
 を奮闘からわざと來られた方
 もある位で、私としては感謝に
 堪えない。九年前華甲の歸を
 へた時、その時の祝宴もこの紅
 葉館で開いてもらつたのであつ
 たが、その際に列なつたもので
 今日その歸を拜する事の出来な
 いものに江部厚夫、昆田文二郎
 の兩君がある。これだけは斷腸
 で、感懐の深いものがある。
 こんな意味の事を感ぜられた。

フと見ると床の間には、春城先生
 の筆に成つた墨痕あざやかな、筆
 端風を孕んでゐるやうな幅が、か
 けられてゐる。詩に曰く
 桃紅尚含宿雨、柳絲更帶朝烟、
 花落家僮未掃、鶯啼山客猶眠

南蠻堂の繪畫

永見徳太郎

南蠻人の渡來初期にあつて、最も我國の人心を刺戟したの
 は、彼等の奉ずる吉利支丹寺である南蠻寺が、京都に建立せ
 られたことであつた。此異教徒寺院に就いての研究は、先輩
 諸氏が、今日まで相當考證を發表されて居るが、未だ完全な
 物が無い。それだけに、是等に關する文献の少なき事や、事
 實を證明し得る繪畫が現存してゐないのである。

當時の状態を寫した繪畫では、何よりも南蠻屏風が、その
 歴史的價値多い物とされ、描寫された南蠻寺院の宏大なる建
 築、支那風の多く加味された點等より見て、京都の南蠻寺とは
 如何も言ひ難い。それは、むしろ九州地方の空に、聳えつた
 たものと考へられる。又、西洋の著書の中にも、不確實な學
 校等はあつても、會堂、禮拜堂の想像畫すら挿入されたのが
 一枚も見當らぬ。その時代の建物は寺と呼ぶよりも、會堂、
 禮拜堂であつたであらう。規模の小なる事より考察して、
 それだけに、南蠻寺の繪畫は、貴重な品に相違ない。偶然、
 多年憧憬してゐた南蠻堂の繪が、昨年、私の手に入つたの
 は、言ひ様もない大きな悦びであつた。而して、仔細に點檢

すると、これぞ我々の最も必要とするものであつたのであ
 る。

扇面は天幅一・六五地幅・六九縦・六五の大きさで、金地に極
 彩色をほきこし、さして廣からぬ南蠻堂が、寫生されてゐる
 のである。中央には、三階造りの建物がぎつしりとして、二
 階には、黒い服と赤い服を身に纏た人達が下を覗き、地上に
 は、七人の吉利支丹風俗の者が立つてゐる。伴天連や伊留滿
 であらう。境内に棕櫚樹が繁れるのも目立つ。靜寂なる境内
 に出入するには、三つの山門があつて、被衣を冠つた貴婦人
 が參詣に行く様子が巧みに表現されてゐる。

會堂の建築様式は、唐風でなく、日本式である。が何處か
 に西洋臭いところが現はれてゐる。門前には、石を置いた板
 葺屋根の小さい店舗が、すつとならび、背後には、梅花の盛
 りを誇る淋しい野道傳ひとなつてゐる。

大道を駆ける馬上の武士、袴姿の人、荷物を擔つて急ぐ者、
 その他が、往來の頻繁を思はせる。

南蠻堂の繪畫
 永見徳太郎

物醫ぐ店の一軒に、つば廣の帽子を、陳列してある事も、泰西の新空気を發散させる南蠻寺門前にふさはしい。

此扇面は、元數十枚一組となつてゐて、何れの裏面にも、假名にて場所を記してあつたのである。南蠻堂には、なんむんと書いてある。而して他のものも全部、京都の神社佛閣を寫した個性の卓越した作品であつた。乃で、此繪畫は、たしかに京都名所圖の一枚と斷言する事が出来る。畫風は、狩野流である。

畫面には、落隸の文字なく、壺形の朱印が残つてゐる。此處に於て私は、その筆者より、南蠻寺の考證に轉じねばならない。

我が畫人傳の中で、最も重き位置を占むる狩野・土佐の系圖は、遺憾ながら明瞭でない。今、此印章にて、筆者を探索して見ると、宗周、宗秀、元季、元秀とが、混同してゐる事に氣附く。

辨玉集には「眞說法橋、宗秀の子永徳甥元季、俗名甚之丞」
狩野系圖の宗周の條には「永徳弟俗名甚六と云、任法眼行年六十一歳」

乃で、扇面の印章より見て、元秀と言ふ事が、出来やう、臆氣乍らも。而して彼は、幼少甚吉、長じて甚之丞と改名したのであらう。

元秀は、宗秀の子、永徳の甥とあるから、天正初年には、年少畫人として存在し、才筆を揮つてゐたのに相違ない、藝術の香り高い此描法には、潑瀾たる氣が横溢して、圓熟したる老年の作とは證し得ないからなんむんとうは、天正時代の製作であつたのである。

永祿三年京都に永祿寺、天正七年安土に大成寺が、建立されてゐたと言ふ一説がある。これ等は南蠻寺興廢記、切支丹來朝由來實記、五月雨抄その他の稗史野乘の述ぶるところで、びつたりとした根據無きもの、後の人が、作りあげた名稱で、記憶しやすく勝手に、渾名したものと見てよい。吉利支丹寺院を指して、伴天連師匠寺とか、京都にあつたので西京寺とは、當時呼んでゐるが、眞實は、洋名の寺號を用ひたに相違あるまい。長崎では、十一の大寺院があつて、洋名に、たとへ訛りはあつたとしても、大體誤られてはゐなかつた。

稗史野乘は、傳說的要素を多分含むのではあるが、あながち一笑に附す可きでもあるまい。殊に南蠻寺關係に至つて

だつてその通りだ、かれが一生を置からいふと春城先生の正面まん
廿八日以來自宅で病氣の地しむ
大郎博士の病氣は外出せし卒倒し
眼の如きは視力を殆ど失はれ
もののがちら／＼して見ゆる位で

眞説元季に「元周嫡子俗名甚之丞と云任法橋行年四十六にて子息左門一所に卒」

狩野系圖にある宗周は、宗秀の間違で、私達は古い文獻である辨玉集の方を信じるがよいと思ふ。であるが、元信の條に此印があるのを、印譜辨妄に「此印は眞説元秀の印なるべし」と誤謬を指摘しある等は、注意をせねばならぬ。

名家全集の宗秀の條に「松榮の子永徳の弟なり名は季信法眼に叙す初通稱甚之丞」また眞説に「宗秀の子名は元季法橋に叙す」と記されてゐる。

摺印補正には、宗秀として、その印がある。古書備考宗秀季信遺言狀には「甚吉儀は、年もまいらぬもの事に御座候へば……若甚吉ふりよの儀も……」とあつて、眞説元季の條に、宗周男、始メ甚之丞、甚吉ト宗秀遺言狀ニ有之、と記し元秀印の下部に元秀と明記してゐる。

萬寶全書等を初め、その以後の出版になるものは、何れを信じてよいか、複雑した誤りだらけである。

要するに、狩野系圖の宗周の子の説は、宗周たる印がなく、却つて宗秀と讀みうべき印影が存するので、これを宗秀と考へるのが正しく、又季と秀との區別は、狩野秀頼の場合にも、秀頼と讀んだ例があるから、秀と讀む説が正しいとも考へられる。辨玉集と、比較的正確と見る可き狩野系圖との兩者を一つとして考ふる事が一番儲な道である。

は、寺號や年代が出鱈目としても、その時代の空氣、地勢等には重大な意義を存してゐると見ねばなるまい。

永祿二年十二月二十八日（一五六〇年一月二十五日）には、六角通室町西へ入る玉藏町に、小屋を借受け、説教して居た宣教師である伴天連があつた。彼は、六角に轉じ、又四條烏丸に移り、四條坊門（現在の蛸薬師室町西へ入る姥柳町）に大家屋を購ひ、將軍の許可を得、寺院及び會堂に當つたのである。彼とは、傳道史上に於て、重要な一人ガスバル・ヴィーラ Gaspar Viela の事で、會堂は眞の教の庵 Dotanna Veradeira であつた。小にして貧弱なる此堂に、天正三年まで過してゐたのであつた。

吉利支丹の教に歸依する者が増加すると共に、佛教僧侶は、激烈なる反抗の叫びをあげたので、松永久秀は、ヴィレラを追つたから、彼は一時、八幡に行き、數日後竊に京都に潜入し、信者の家に隠れてゐるが、後許されて會堂に歸つたのは、永祿三年（一五六〇年）の出來事であつた。

此頃、堺に住む熱心なる吉利支丹信者より、豊後に滞在中のコスメ・デー・トリス Cosme de Torres に宣教師來港を請求したので、トルレスは、ヴィレラに、堺に行くことを命じたのであつた。乃で、彼は、會堂を信者に預け、永祿四年七月（一五六一年八月）都を立去つたのである。

戦國時代の常として、安穩なる時日を過す事は、長くつづかなかつた。ヴァイラが、又入浴した際、騒亂が引起つたので、滞留する事が出来なかつた。永祿七年十一月(一五六一年一月)には、ルイス・フロイス Luis Froes と伊留浦ルイス・ダルメイダ Luis Dalmeida が到着し、將軍足利義輝に拜謁し、一層信用を博し保護をうけるやうになつた。その時、ヴァイラとフロイスの行列は、實に仰々しいものであつたと傳へられる。三好、松永が、南蠻堂に参詣したのも、その頃であつた。

兵亂は又、靜かな美しい都に起つて、騒々しき巷と化してしまつた。三好義重、松永義久は、將軍を殺し、僧徒の歎願を容れて、ヴァイラとフロイスを追放するに決したのは、永祿八年五月四日(一五六五年六月)であつた。兩師は、一時、飯盛に遁れたが、後には堺に引上げたのであつた。此處に駐るは城中に在るが如き氣丈夫さがあつた。全町民が、外國人に好意を寄せてゐたから。

伴天連達は、人肉喰ひと嘲笑され、逃げ行く道は峻しく、山賊の横行、野武士の脅喝に怯え、衣服は破れ、口にする者は慣れざる物を味ひ、庇護してくれる人は稀であつた。戦ひに次ぐに戦ひを持つてした時代の困難に、彼等は、天帝の教へを苦闘し乍ら、布教し擴めたのであつた。

それより以來、都には、會堂も、一人の信者さへも無く、會堂の設計は、二階建であつた。

當時の住宅は、平家であつたから、二階建は相當問題の焦點となつて來た。伴天連達は、諸僧院、住宅に比較して、秀でて建つる事は、一般人に、會堂の存在を認めさせ、且つ京都名所の一つとなり得る事と考へた。それに、建築場が狹隘の地所であつたから、自分等の住居する家屋を建つる餘地がなかつたので、二階住ひすることなきに原因したのであつた。

京都所司代村貞勝は、二階建を承認しなかつた。年寄衆は、自分等の権限を持つて、取り壊す可しといきまき、佛僧は反對の聲をあげた。結局、織田信長に訴へんと目論んだが、有耶無耶に終つたのである。

信長は、天正四年二月より安土に本據を構へ、天下の政權は、彼の威力の下に靡いてゐるのであつた。

で朽ち一本は曲つて居た位、危険で貧弱なものであつた。

高槻城主ダリヨ高山長房、ジョルジ結城彌平治、都に居住せるジュスト・メオサン老人、レアン、老夫人フエリバキタ、若江の城主シメアン池田丹後等は、最も、會堂新築に力をそそいで呉れた人達であつた。

會堂の設計は、二階建であつた。當時の住宅は、平家であつたから、二階建は相當問題の焦點となつて來た。伴天連達は、諸僧院、住宅に比較して、秀でて建つる事は、一般人に、會堂の存在を認めさせ、且つ京都名所の一つとなり得る事と考へた。それに、建築場が狹隘の地所であつたから、自分等の住居する家屋を建つる餘地がなかつたので、二階住ひすることなきに原因したのであつた。

京都所司代村貞勝は、二階建を承認しなかつた。年寄衆は、自分等の権限を持つて、取り壊す可しといきまき、佛僧は反對の聲をあげた。結局、織田信長に訴へんと目論んだが、有耶無耶に終つたのである。

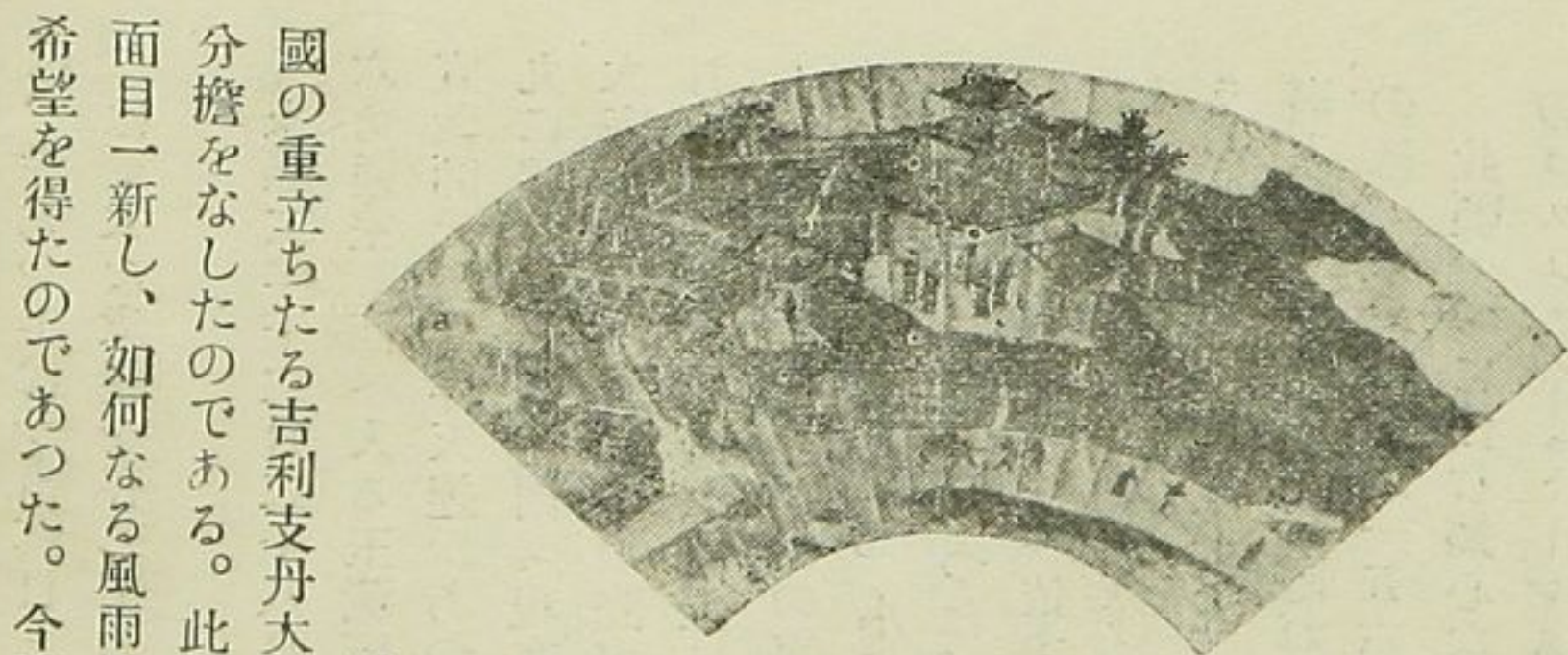
信長は、天正四年二月より安土に本據を構へ、天下の政權は、彼の威力の下に靡いてゐるのであつた。

その年七月十一日を以て、會堂の上棟式があつてより、貞勝の心事も變り、今は反つて、好意をさへ示したので、町の人々の彼等に對する憎しきも薄らぎ、酒、果物を贈る者さへ

異端者と睨まれた人々は、消へてしまつたのであつた。

中央政權は、まるで猫の眼玉の如く變動甚しく、遂に織田信長は、足利義昭を奉じて入京して來た。永祿十二年三月(一五六九年)フロイスは、和田惟政・

佐久間信盛等の旋斡に依つて、なつかしき京都へ入る事を得たのであつた。



天正三年、町は靜謐となり、諸々の建築にも復興の氣分が漂ふたので、フロイスは元龜二年(一五七一年)に來朝したオルガンチノ・ニエツキ Organino Guecchi と共に會堂改築の議を定め、長崎に在りし長老フランシスコ・カブラル Francisco Cabral に、その許しを申出たのであつた。やがて、六百タイス(一タイスは我が銀十匁)の補助を受け、都の信者及び隣接諸國の重立ちたる吉利支丹大名等集まり、製圖を作り、工事の分擔をなしたのである。此處に於て、極度に頽廢せる會堂は、面目一新し、如何なる風雨ありと雖も、安全に神を祭り得る希望を得たのであつた。今迄の會堂内は、四本の柱が三本ま

あつたのである。市内の大工は、何れも信長の建築工事に徴發せられたが、會堂係の大工は、自由に仕事する事を許され、貞勝は、小金二萬を贈つたりした程となつた。

建築材料は、遠方より運ばれ、武士及び一般の人々は、金銀、米その他の品にて約二千クルサド(一クルサドは四八〇レイスに當る。レイスは單位レアルの複數なり)を寄進したのであつた。

會堂は、決して廣い方ではなかつた。が、その精巧なる建築には誰しも舌を捲かぬものはなかつた位、石の細工、木の細工に、見事さがあつたのである。オルガンチノが苦心した工夫が、光彩を放つた事は勿論であつた。

フランシスコ・ザビエル Francisco Xavier は、日本最初の吉利支丹宗門傳道者であつた。ザビエルが、鹿児島に上陸したのは、天文十八年七月二十二日(一五四九年八月五日)で、聖母昇天祭の當日であつた爲、この善き日を祝福する意味に於て、新會堂を、聖母に獻じ、昇天の聖母の會堂 Nossa Senhora da Assumpcao と命名することに定め、天正四年七月二十一日(一五七六年八月十六日)未だ竣工ならざるに先立ち、堂内に於て、壯嚴なる最初の彌撒の儀式を行つたのであつた。

十二日以來自宅で讀書の病を患ひ、眼の加きは視力を殆ど失はれ、先づ大體博士の病氣は外出先で卒倒し、眼の加きは視力を殆ど失はれ、先づ大體博士の病氣は外出先で卒倒し、眼の加きは視力を殆ど失はれ、先づ大體博士の病氣は外出先で卒倒し、

○此年迄米穀の漲落して飛行機の現状を視ると
此等海軍一の飛行部を海軍中の要務と
看かすの文的揚子に於て海軍の要務
ハ二時分、涉り一々者き筆も出来さうだが
ノートもいふ忘つなく要路と書きつけし
る。

飛行機を海陸軍と分つてみる所は米と日と他の
諸國に海陸の区別なき統一してみる米國ハ三層が
達してある民間飛行機ハ四千台今年中ハ八千台
とする英國ハ對佛の防禦主義で一千三百台を
してある佛ハ歐洲統一主義で海軍が統一して
しるのと陸軍統一して。伊ハ一千八百台を
するし

東京

伊ハ對佛の防禦を取つてある伊ハ土地柄を海軍ハ海
軍の色彩をみつつある。獨ハ戰後民間
飛行機を造つたことを禁じてゐるが民間
飛行機に金を費すべからざるやうに保費全
と出つてゐるが、よふとよく有るもの日ハ之れを
使用する處を造る。保し吐き出し軍用
練の出来さうなことであるが此點に於て
趣がある。各國に飛行機に金を投じて
る米ハ七千台、佛ハ三千台、日本ハ僅かに
十四台、英ハ二台、意ハ二台、日ハ僅かに
四台、伊ハ飛行機を國政の中心に
するの如く飛行機の幹部に處するところの
各年

此高心あるつて元氣旺盛である。米國は極端の物兵
主義で三ヶ所の飛行場を築き、毎年三万人の金を
成し、卒業するものも甚多し、此の向から僅くも
万人及ぶ事するべきであらう、英は殊に航空機に力
を入れたる人を三ヶ年、其の成ることを、そのつて
ある。併し日本の飛行人物は、何れの國よりも優
長であること、祝すべし。

飛行機の四進月歩み、あつて、形勢は、飛行機
の中心は、是れ航空機であるから、これを強くする
の工夫が、研究するに、スチールは、窒素を吸
収せしめることも行はれ出した。英と日本は、アル
ミニウムを産し、その材料

機原

を、鉄くから、スチールを代用すること、そのつて
ある。ガソリンを用ひ、代り、重油を用ひ、その
も出来る。我々の用ひ、爆撃機、飛行機の
若くは、飛行機、日本の、一トンの爆撃機、
を、載せること、伊國は、十六トンを
載せ得る機、の、建造中である。戦機は、改
良され、主面、の、**金属**、と、なること、
速力が、強か、ること、操縦が、自在、なること、
と、上昇力が、進人、すること、と、なること、三ヶ年、
メートルを上る、日本の、九分、を、あること、が
四分、三ヶ年、の上り、得る、ま、改良、を、ある
こと、多量の、機、銃、を、一、撃、撃、の、為、め、なる

夏朝よりから、舞合をこころい行きさるゆめり体なをが
少からすまことから、業但負が臨懐の事とせぬん
るくぬ造つておま中の能力をこあするの言ふをゆ
いぬ各むが力を技業者の美合成にほくくの七偽
れんもの。

○米田の自動車王 フォルト七澤いよあひある、彼んの
工体は柱を一時分を四る台を心するの働さかある、彼ん
の親工に勤勉を奨励するといけこ五日主義を唱へて
ある。此の人間は、一週二の日の休養を要する。
日曜は家庭因乗のゆゑ他の一日は精神休養の
為めと、ゆうもすもするせある。親工が勤勉を一日
かを五日間を止上ん一日の休養を要するといふ。

支るい言ひある。初めフォルトこの説を唱へた時
他の大工場の夫つておに位ひあるのが、五日説は彼
二平が印をも上る。彼んて今こい通こフォルトを
習いんとするといふが、せも出でて来る者物なと
いふ。

米田の賃銀の高の四日本より十三倍以上であるが
其他の日本よりも遠かき能率の上であるから、多んこ
比する賃銀は日本よりも低いことである。併し米
田の親工は日本よりも賃銀は倍の貯金も倍
々強くて行く。親工は倍の貯金も倍の貯金も倍
から、労働洋流の記る老練が多い。

米田のやうな四民は、其の神の善及する所である。

産業開拓の爲め先づ共同七ヶ条を出来の如く
物を産物と心得るべきは物の品を簡單化するが
よいと多くと一品の作りやうが五つあり千ありや
あるよきを十合の一に減して簡單にする。個體
あること日本をむかひ容易に行はうとある。産業の
合理化をむかひこと米田の如き事には執行は
る。若くはとうすん心んる利益があることと云ふことか合
得せんことと云ふが手廣く立ち行はんと社会一般に
及ぶといふの。四民の共同精神があるからである。米
禁酒法をむかひ人々を回して米を賣りて入難いのが米
田三行の如きことと云ふの。四民性の然らしむ所である
。世界の大戰は米田と七ヶ条一時大打撃を食ふけれ

が、日本の次は不景氣か長債を以てお男しである
の。四民の奮起 殊に産業界上の大勤勉によるの。米
田三行の如きことと云ふが、日本の次は不景氣か長債を以て
も不景氣の挽回が出来ぬ。政府もどうにか着る
四民の自覚がたう旅が、利権治癒の道にある
いと思ふ
二月二十一日記
○近から伊太利からゆつと米比人がラソリに治下の同
國を打つて居るのを受くる。僅かの間に、顔面が改
めらる。こんな苦難其の附をんてあつた。米田三行の如
こちから五流に耕せんとするの七流めを、四流の如
五流を自動車、道が式條が出来た。いざと云ふ
と、海軍、兵を出し得る用意がある。七と八流の

村光や雲が主任と美術の校の彫刻家の粹を
集めて馬の誰の面新彫の光や雲といふ故に八景
して出来た原型の木と出来たのを玉崎雪麩
の鑄造して此の原型の彫り手は彫り手
の今心(善也)其の心と玉崎雪麩といふ
他を言ひて故に其の心と玉崎雪麩といふ
故に其の心と玉崎雪麩といふ
を言ひて其の心と玉崎雪麩といふ
故に其の心と玉崎雪麩といふ
今心(善也)其の心と玉崎雪麩といふ
故に其の心と玉崎雪麩といふ
を言ひて其の心と玉崎雪麩といふ
故に其の心と玉崎雪麩といふ

玉崎雪麩

か無いと、第一切の人の斯く彫りきつてあるから
注を要する。其の心と玉崎雪麩といふ
大切な事である。其の心と玉崎雪麩といふ
此の心と玉崎雪麩といふ
と云ふ。此の心と玉崎雪麩といふ
此の心と玉崎雪麩といふ
○此の心と玉崎雪麩といふ
其の心と玉崎雪麩といふ
日本人の心を彫るといふ事、而して其の心と玉崎雪麩といふ
事、其の心と玉崎雪麩といふ
詩を得たり、其の心と玉崎雪麩といふ
所謂況平本

るよ三謝詩一冊を附す。花者印を捺す
日芝田清水氏芝田和氣氏段の五卷中後杜州
世の印あり、心人の手澤を託すこと勿ふ
し、此人や友人五卷中の書物余の因縁あり
ありし即ち贈ひ入る。而後此正字中の詩
を取んと記す。此者卷首、林澗の序あり
卷羨湖之を書き内詩の在本也

此又右甲の十七帖を得、頗る佳帖也。卷
首、貞觀十七帖の細字を刻す、即ち貞觀
元年一勅して此一本を刻せしむるとの此帖也
卷尾勅の古字あり、刑子愿、董其昌海
周公外二跋あり、卷首、東江源齋の松



葉源公、其くは、田子候二巻を貼付す。
その文章をえり、源齋此帖を傳りし
物勅し、以りと免し、書中此帖を希世のよ
とす、世に源齋の跋と上げし、十七帖
ありと記帳す、今之んと此教する、由なき
也此帖、世々その本をうん歎、花者松
葉源公未だ何人をも詳かき、あふ大
名をうん、此者帖今古に獲難し、價十
六圓、架中の珠とす、三月二日亦

四日記

○井原西野の往歴、一向のぬ、高し見、支書、其後、大改
の所、入、山、花、五、の、西、野、此、と、記、す、以、人、か、あ、り、ま、え、ん、ま、よ、り

と書きたるは、一廿あるを盲目、其も死す。名はと
 千代に魂も傳ふも、世を自由なくし、行脚
 日持し、頭をわし、年を法を世にせしむる
 ゆくり、甚候格をぬきとありし、其も世に
 入断し、其もぬき、此方を法にせしむる
 くの著せむ、此も江に、其もぬき、
 く、江に、其もぬき、其もぬき、
 心する、其もぬき、其もぬき、
 廿、其もぬき、其もぬき、
 其もぬき、其もぬき、其もぬき、
 〇江戸生流研元二月卯、橋ぬ左の

橋ぬ左の

で改版し、菱河の畫を入れたやうに記してあるのは、全く間違ひで、艶書の『小夜衣』と此書との異なつてをること、既に『好色本録』にも断つてある。序ながら一言しておく。此の外なほ江戸作には、桃林堂や奥村政信があるが、都合に依り本稿はこれで打切ることにする。(終)

御留守居の内情

山下重民

徳川幕府執政時代には、各藩に御留守居といふ役あり、即ち當時の外交官にて、會合打合せ等の爲め常に外出して藩邸に居ること稀なり、藩士には何れの邸にても、門限といふことあり、規定の時刻至れば、其の邸門を鎖して、猥りに出入するを許さざりしが、御留守居に限り此門限なし、外交官たる特典なり、且つ幕府の吏員は勿論他の藩士に接する事多しとて、十分の給與を

受け居れば、交際を爲すには頗る自由なりしは、人の通く知る所なり。

初任の時は、口狀書を以て各藩御留守居の家を回訪し、將來の交誼を依頼するを例とす、其の中十年以上勤続せし者を大先生と稱し、崇敬に至るなく、皆其の指令に服するを以て、御留守居一般の慣例とせり。

會合は順着に其の家に會す、此の會合に三種あり。

- 第一 調會
 - 第二 懇會
 - 第三 内寄合
- 第一の調會といふは、通常の會合にて、朝より始ることあれども、大抵は正午より開くものとす、第二の懇會は所謂懇親會なり、第三の内寄合は秘密會なり。

- 筆記すべき書類を分て三種とす。
- 第一 用事
 - 第二 内用
 - 第三 内々用
- 第一の用事といふは、通例の書類にて、第二の内用は親展の文書、第三の内々用は、

内々用は、他見を禁する秘密書類を指す、右の書類には、幕府殿中の公事は勿論、諸大名等の詩歌並に落首等に至るまで、一切漏すことなく記載しあり、今日の新聞紙も同様にて、政治及び人事世態を知る必要の文書なれば、當時諸藩の先を争て之を知らむとせしは當然の事にして、此は外交官たる御留守居の手より獲られしなり。

さて調會に赴くときは、必らず柳行李の中に懐中硯、卷紙を藏めて之を携ふるが例にて、其の席上には各自机を控へ、其の書類は先づ大先生より回覽す、大先生は大抵自から筆を執ること稀にて、他人代て之を寫す、又席中交際廣き老功者は、回覽の文書終始其の机上に堆を成す、文書の上には必らず文鎮を置き、下より順次寫して他に回すも、新參のもの交際少なきものは、いつも後回しとなりて、容易に之を受取るを得ず、初は黙して差控へ居るも、時間を経るに隨ひ氣のせくま、先生某にも御回し下されたしといへば、先生は傲然と寫し了らば回すべしと答ふ

るのみにて之を與へず、寫すと直ちに別懇のものに渡すをもて寫し取ることを得ず、故に其の人の机上に寂寥として一片の文書なく、實に哀れなる有様なり、されば其の机上の賑はしきと否らざるとを見て、其の人の信用聲價何如を下するを得べしといふ、兎角する中に酒宴となりて、其の日は空しく歸ることあり、明朝に至り、昨日御回覽の文書拜見を願ひたしと、一人の家を訪へば、留守なりといひてはねられ、又其の次の人を訪へば、全くことわることが如きこと往々あり。是に於て當時は別懇と稱し、竊かに先生株の者に、深く頼み込みを爲すの已むを得ざるに至る、頼み込みを爲すには、常に其の家に物を贈り、親ら訪ひて其の家人の御機嫌を候はさるべからず、是れ御留守居役にとりては最も肝要の事にてありしなり。

回状も亦必らず席順に回達するを例とす、故に舊き者ほど、早く當時の事情を知るを得るの便あり、此際別懇のものあれば、其の席順に拘はらず、内

々之を其の家に回す、其の人は之を得て直ちに寫し取り、自己の氏名へは點を掛けず、知らぬ顔して席順の者に回す、されば順達の時は、已に其の事情を承知し居る譯なり、此處にも大に得失ありしといふ。

以上は三十五六年以前、津山敬之翁より開けるまゝ、筆記し置きしものにて、回覽の文書はもと何れより發せしか、御坊主などの手より出しものにて、之を質し置ざりしは遺憾なり。又別藩には大中小あり、御留守居にも夫々組合などの設けありしか、其の邊も聞漏せしは、余若かりし時の手落なり。帆足萬里嘗て此の外交官を罵りて曰く、「諸大名には御留守居といふ役人あり、勤と稱して其の徒相與に青樓に上りて主人の金を使ひ棄るや、其の古参といふ者（前記の所謂大先生）は白衣になりて、妓人の間に偃臥し、新参は頗る大國の臣又は年輩人にも、上下を衣て、次の間に侍坐し酒を飲まぬなり、さて同じ諸侯の臣下なるに、某は

最早上下を免して袴羽織にすべしなど、己が心のまゝに取扱ふ、無禮不法、將軍御膝下に在りて正し給はず、其間合せの御勤と稱するものは、徂徠の政談にいひし如く、箸一本こけたる位のことなり」と右にいへる新参と古参との別は、今の兵營内に於ける初年兵と二年兵との差隔よりも尙ほ嚴格にて、當時は御留守居に限らず、勤役者は何れにても、一般に然ありし風習なれど、時に御留守居の如き人馴れたる外交官、悪くいへばすれつからし輩に在りては、其の弊殊に甚しかりしなり、附合と稱して花柳の巷に入するは常の事にして、今の待合政略と相似たり、而して萬里のいへる如く、次室に御坐せしむるは普通にて、大先生の不埒者に至りては、妓樓にてお金の酒と稱し、自己の陰囊をのべて酒を盛り、新参の者をして之を飲ましめ、笑ひ興じたる者すらありと聞けり、悪戯も此に至て極れりといふべし。

凡そ當時の御留守居役は、幾回かかかる苦境を経ざれば、首尾よく勤め終

ふせさりしとぞ、但正しくいへば、次室の侍坐お金の酒の如き、武士道にあるまじき振舞なるも、尙ほ能く隠忍して怒る色なく、彼の御機嫌を損せず、巧辯を以て體裁よく其の場を切り抜けるの材智あるものこそ、御留守居役の適任者と爲したれ、故に當時は此等の事は、一の試験と見做し、別に理窟をいひて咎め立をするものはなかりしといふ。

幕府にも御留守居といふ官職あり、是は諸大名の御留守居とは、全然別格にて、御留守居年寄衆は、御老中支配にて、芙蓉之間詰、五千石高なり、關所女手形改の爲め、與力十騎、同心五十人宛屬す。御本丸御留守居番は、同じく御老中支配にて、中之間詰布衣千石高なり、與力七騎同心廿五人屬す。二之御丸御留守居は、若年寄支配にて、燒火之間詰布衣七百石高なり。西御丸附御留守居は、同じく若年寄支配にて中之間詰、御役料二千石高なり。

○名家の方幅録す不借と云ふと合するものあり
左の如きハ其の一也也

○葉村初守中擣殘夢、茶鏡影意者大弘燈

○義是正跡由之何曾史也 一云

○深山有寶無心在寶者得之

○抗之則在者云之也抑之則在深淵之下
用則為^中不用則為^界 詞音

○拙之一字免了千累

○良田萬頃食二升大厦千間臥八尺

○平山堂より一蓮の方面日輪も雲をもくもく、須磨
中村御所の物方彼美術演樂部に以て集
まるといふ、中、今折鶴く、その花千のあり



道系く七姓親を得た 茲に無延のふを採
一七問を考す

二月廿五日記

一 玉堂蓮花録字源

一 大雅堂淡彩極細角舟子

一 曰 巾馬越姑

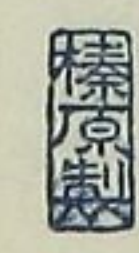
一 大雅堂巾里級 寄書

一 大雅堂赤石画印荷世兵端在聖地便面

賴山陽神戶完修宅書翰 合裝帳

一 賴山陽初米山人山形抄物

癸亥六月初八日訪米山人不遇印紙而置之



机上

澁河西時勢為舟六月通涼傍泊石流
英日主人何處云清風時入後玉樓

一 文晁著名菜根 白河出而質

百姓不可一日有此名士大夫不可一日不知

此味百姓之有此名緣士大夫不知此味

一 軟甲米淡彩兵道朝飯模托

一 曰 青緑山色松聲煮茶

茶托之部

一 賴山陽煮茶澄泥壺形祝

花の葉の表に此中清為花の影

一 雪華遺愛桑村子のき印匠

一 時代本地山陽刺得丸堂

一 龍米子母方燵

一 外木米茶異散

海防傳本部の巻頭と一紙を補記する
一乙字あり

二月十日

○二月十日神田の本店をさき釘印一紙を
 古本のいさぎを恐るく換印をせん書の
 家風柄の馬きとを互ふ或る自合の後歎に用む
 る可、曾てやく御人一茶印を用ゆるを疑せし
 自家書名の下の之印と刻し字を捺し
 と日七人七其の御筆に倣ふ人の御筆を
 し時時後歎の目下捺し自書と記す
 又時々人か古人の御筆を倣し時時書者の名
 の下に書とかくを例とすんども、其の御筆に
 倣りず此印無用ありき也
 村口書店に錦囊印本をみる、余の舊の花に
 四冊も余が附け添へたるよ也一冊に書と
 記す

ふ七と書印しんを其の愛場の也也此印諸極
 めと鮮明なり此方の絶一のものなり
 愛重の御筆に倣し四冊二帖とす

天正天方あり印換刻

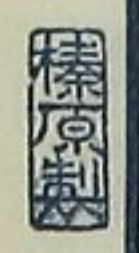


其形をらん此
 とも直を此
 こそ獲りあらず
 公指動き燭の
 ゆる、花柳に
 なる女に合しと連

丸物くこの類か、又天に、是年、田川、政文の
 〇リ、この復本の此を、座をとり、其也、復本の
 切し、この此を、換り、其也、二月十日

んも其の便を少けし萬圓以内と云ふ。あまの多から
おと見へん。

口人を評すること難し、其人存する時評するに難し
而して其人の目前に評する亦難し。評に毀譽
せし其人の中そのうち可なり、死後の人を評
す萬人見所と同じく時之れを高評とを知ら
ず本人果して首肯するや否や、萬人の見所同
しとせし世の中らることあり、其の中とを本
人あると云ふは、其の利害も然り也。或人の一
角を見、或人皮むと見、或特徴を見、或習癖
を見、或全豹の評と云ふ、其の感出り、斯の如く
して其評し、人を首肯せしめ得べきや、或は褒



ふ可らざるを物け、恥す可らざるを恥し、世事を事
以て云む、あはれなりと云ふを漏らし、刺んと
して針に通らば、扶えんとし、刀の傷達せざるもの
偶々評を受くる人の得失、是を信するもの、難
い、別人を評すること、余過敏、書あるに、概めん
席上多年、交りある十数の人、交り起る、余が
経歴、性行、考と就て評するもの、おどろく
余、就聴、皆悉し、と思へり、此後、同人のを
を、余よの一概に、申す、おと云ふ、而か、世に及ぶ
と、心中、然りくと、おどろく、つや、この一も、ある
必し、新し、言説の、拙る、か故、又、あ、余、の、横、ら、さ
この故、あ、余、の、優、する、故、は、あ、と、お、敬

れ、紐の太さに應じて打込むことである。

鈎の座金の形は、普通菱形であるがその人の好みで、棗形の場合もあつて、材料も銀でつくるなど仲々に質澤なものもある。またその外に古いものに丸いものもあり。なほ櫻鈎といつて、座金が櫻花の形に似てゐるが、これは極粗末なもので、大方は『お御影物』乃ち神佛像類の紙表装のものに限り用ひられるのである。打込鈎は十幅分が一袋に入れられてゐるが、櫻鈎は安物ゆへ百幅分以下は賣つてゐない。それから支那の表装に擬してつくる場合に、文人鈎を用ひるが、その形は、楕圓形を半分に切つたやうに眞鍮の針金で造り、二本の足を八雙に打ち込み座金をつけぬのが通例であつて、その時は横紐も黄色の丸紐で、卷紐は白絹のくけ紐を附したもので、何處までも煎茶家の好尚に背かぬことを期するのである。表装用の裂地も白か淺黄の支那綸子を用ひ、軸も香木の長めのものをつけることが殆んどお約束のものであることは、先刻御承知の通りである。

鈎を八雙に打込む位置は、その例を本表具俗に三段表具といふ、風帯をつけてゐる場合には、風帯の外側に接して打ち、その寸法が風帯がない丸表具の時にも應用されるので、これをかけもの、巾二尺と假定して、その巾を三分した六寸六分に一寸位増した寸法を中央とし、残りの二分一乃ち六寸位づゝを左右の中とするといふのが大體において間違ない言ひ現はし方である。横紐へ縦紐を輪になつて自由に引き動かせるやうに、縫ひ附けるのは、座敷の床間の位置の都合で、客の入り来る方に、その紐を打込鈎の際まで引き寄せるのが法則だと聞いてゐる。東京ではその一端を、かけもの、内側へ廻して縫ひ附けるが、京都の方はその反対である。これは一利一害で東京の理屈は表具を手につけて巻く時に、紐の端が外へ出てゐては見にくいといふ上方ではそれは表具に縫ひ附けた紐の重なりが接觸するのでかけものその物の保存上わるいといふので、この團扇はそれ、の工人の所好によつてあげ得るのであらふ。

この條には、八雙の形状に就いて少しかいてみる。古い表装についてゐる八雙の形は、一樣にいへぬが大方は三角形に近い、現今三角形のものは文人物に用ひることを原則としてゐる。京都はその形がふつくりと豊満であるのに對して東京は中

肉ともいふべき形で、とかくお饅頭を半分に切つたやうな形を嫌ふ傾向がある。専門の技工がかけものを一度手に取つて見ると、直に八雙の形を見てこれは京表具か否かを直覺するのである。

順序が前後したが、この八雙といふ名稱を考察するに、古い本には大概八雙とかいてゐる。先年出版された『表具の葉』には、はしの木と記してある、かけもの、上端にあるもので、端の木が轉訛してハツサウとなつたと説明してゐるのが、一應道理であるが、過般彗星會で、幸若の『景清』を輪講した時、その文中に『八さうかぎがね』といふのがあつた、その八さうに就いて、山崎樂堂氏から『八さう金物』といふのは、『さきの二つに岐れてゐる、門扉などによくある矢筈に開いてゐる金物を稱する』と解説されたことから推考して、八雙は八雙金物を取附けたる木部といふのを省略されて、八雙とのみいふやうになつたのであらうふと思はれる。それはかけものは佛畫の表具から發達して來たのは事實であつて、それには必ず上部の木に、樂堂氏のいはれたやうな内側のさきが二つに岐れた袋金物を取りつけるのである。軸もその時は無論鍍金の金物で、唐草の毛彫を施してある。現今でも眞宗の阿彌陀様の表具は、どんな安價な物でも、その八双と軸には金物をつけてゐる、そつといふ所に案外古風を存してゐるのは、此上なく嬉しい氣がしてならない。

かけもの、始まりは、西藏の曼茶羅などに起原して、漸次發達して來たものであらふとは、曾て異畫會の講演會で今泉雄作先生の御話をきいたことがあつた、その後川口慧海師が、西藏から將來した曼茶羅に、何等彫刻を施してゐない金軸をつけたものがあつたのが目について、淵源また遠いかなと感嘆したことを記憶してゐる。

軸は現今では象牙を以て上等とするが、それには無垢の物と、象牙の中眞の孔をふさぐ爲に小口を、別の象牙を箝込んだものとの二種がある。これをガラとも、小口ばめともいふのである。また牛馬の骨を丸めた角軸と稱するもの、小口に象牙をはめ込むのを牙蓋といつてゐる、その外に紫檀、黒檀、鐵刀木等の香木類、桑材や、黒、朱、ウルミ、溜色の漆塗り等がある。さらにそれに蒔繪を施す場合もある。たとへば、雛表具には桃花をと、それ、その表装の内容に因んで、櫻花、紅葉、蟲類、

観世水、早蕨等既成品が用意されてゐる。肖像などにはその人の紋章等特に注文せねばならぬものもある。それ以外清水焼、出雲焼の陶軸や、香木の代用品として花林等が用ひられる、數年前「シャツ軸」と稱して、何かの獸骨がある薬品で煮詰めたと思はるゝものがあつたが、軸木への粘着力が少ないので間もなく廢絶して了つたのもある、梅樹を鐵漿で染めた梅軸といつたもの材料もさまざまであるが、古い紙表具に、樂焼の軸がついてゐたのから、思ひ附いて、曾て根岸の子規庵で、子規居士の遺墨頒布した時に、揉紙の輪補表具に、樂焼の軸を京都に依頼して使用したが、仲々捨て難い持味があつた。

次に軸の形状は、挿畫を必要とするが、こゝでは御免を蒙るとして、その名稱のみをさつと列擧することにする。長軸、短撥、切軸、宗旦、面取、几帳面取、雷紋、その他がある、小口に挽き物で茶釜の蓋の如くにしてあるのを茶蓋といふ。これは象牙にもあり、香木の時は象牙を右の如くせるを籜入してゐる、これを紫檀の茶蓋といふ。また紫檀の長軸の小口に、象牙の小圓點をはめこんだのが星入りといふのも、専門家だけに門外の人々には始んど符牒の如き感じがするであらふ。

軸の出、外部に露出する部分は、切軸にあつては胴返しといひ、徑八分の時は表装の軸附の際より八分出すのをいふのである。長軸の類は大方一分引込ませるのが一般の原則とされてゐる。象牙にありては、その物の長さが、頗る短かく出来てゐるので、これのみは殆んど一ぱいに引込ませるのである。

木は檜材を上乗とし、杉これに次ぐので、先年上總より産出する『さはら』を用ひたことがあつたが、ヤニが吹き出して後日表具を汚損して迷惑した人が尠くなかつた。古來幾星霜故人が研究に研究を積み重ねたあらはれが、日本在來の職人の精粹である、材料に技工に間然する所ないのが我等の誇負すべき所であるのに、新奇を競ひ、舊套を破るが如きは、寔に慨嘆に堪へぬのである。要は従事する者の品性の陶冶であらふ、勞働爭議を以て年中行事の一つと心得てゐる茶ツ葉服の連中と同一視されてはならない、否さうなるべき筋合のものでもない。

(未完)

茶ツ葉服

右三月雅俗集古ノ裁りたる不こゝろぬめ
おく、

○五才大文の筆解く等書者十枚冊坊写者
付らあると見え出し借り来りあり、他めを免り、
極めを旋駁のこゝろあり、や、み、往々、書集七書
つ送交あり、今た、二、三を挿紙す

一川田八之助(通)曰或下筆家樂翁公の人打
 を此筆と此版の流し下人等んが先人とも急方成
 べきおあり然る大名家かあるおありを以て
 及ん相疑ふあるは物と或人等し
 其後年久しく五年比の江戸中取り
 大少ありし書名家の御舎の上下の御共
 打進力と焼くは樂翁公の後三松平隠岐
 守の三田下念翁、御保任名中に御お
 らせし由此二筆と或人先年下筆家の公
 を此筆おせしことの新しきを感せしを



人八之助の何處を信するを以て

一 文化四年丁卯の秋、奥西越の賊、赤松
 の邊に入寇あり。こゝろに先き、柴田、栗山、平
 山、兵原と諍也。いんきりあり。こゝろに先き、松
 中とて、兵原を使三つあり。及んば、此の二兵原
 けり。是も、其の返出を認め、そのの意、故
 十二年、庚申二月、林三右衛門、偶々、赤山の
 心又、今、席上、此、苗の、備、此、柳、友、権、と、四と
 申、御、勘、定、と、勤、め、息、大、田、垣、左、一、守、序



ありて、其の返出を認め、そのの意、故

急に、御、奉、被、付、申、儀、御、奉、被、付、申、儀、
 の、時、向、南、へ、て、之、奉、被、付、申、儀、
 上、の、仕、業、に、御、奉、被、付、申、儀、
 二、乘、り、ま、し、り、と、し、御、奉、被、付、申、儀、
 不、青、御、奉、被、付、申、儀、
 二、及、び、百、中、に、加、馬、を、入、り、ま、し、り、
 又、御、奉、被、付、申、儀、
 右、御、奉、被、付、申、儀、

二月廿三日

平山幸村

柴田、栗山、平山

兵原の假名遣 又まし、然るも昔も入寇の言
 ありしに遊び遊に兵原と合し、今も兵原の歌の
 栗山の歌に「歌く」とある

日本の古語に就いて

黒井 恕 堂

日本は嶋國であるが爲め、古代に漢人や蒙古人が来て居る、又朝鮮とも交通のあつたことは申すまでもない。尙ほ海からはるく印度人が上陸して居ることが判る、それは古事記や書記に現はれて居る古代の言語が多く梵語と一致して居る點が仲々多いので、ますく研究の歩を進めてみると驚くほどある。然るに日本では國學者でも或は考古家でも梵語の知識を持つたものが居ないので少しも説明して居ない。彼の古事記傳でも本居宣長が能く説明して居るけれども全く想像説が多いので雲か霧をへだてて見る感がある。又鳥居龍藏氏の「人類學上より見たる我が上代の文化」は考古界の大家の著作ではあるが全く梵語の知識がないと見えて蒙古説にかたむいて梵語のことは少しもない、次に一二例を擧げて日本の古代の言語がいかに梵語と關係があるか説明して見やう。

日本で注連繩といふことは今日まで意味が判らないのであるが梵語に比べて見ると能く判るのである。即ちシメナハのシメハは印度の古書に依つてみると『或る範圍に限つて境界を立てること』又『ナハは凱旋して喜び勇むこと』である。然ればシメナハは梵語の寫音文字である。次に案山子カシノコのことを山田ヤマノ之會富騰ノチノヒトといふがヤマは道で、ダノは邊のこと、ソホドは『詐欺を巧むもの』といふことが梵語で判るのである。即ち『道のほとりの詐欺者』也、次に八色雷公ヤクシヤノカミといふことは八色は梵語のヤクシヤで靈魂のこと、雷公イカヅチはイカシヤチで景、姿の意味で靈魂の姿といふことである。次に神籬ヒモロキといふことは梵語でヒモロギで寒い茅屋又は洞穴の意味である。

次に鍛冶カナヂといふことは梵語のカーナチで鐵の意味である。次に鐸カナキ之矛は梵語サーナキで鐘の舌、槍等の意味であるからサナキは槍の一種であることが判る。以上發音や意味が一致することは他の言語では出来ない梵語で始めて説明が出来るので古事記や日本書紀には梵語の寫音文字が澤山こぼれて居るのであるが梵語の力のない爲めに少しも氣が付かずに居るのである。故に日本の在來の説明はゆきづまりで根本的に判明して居ないのである。

會つて新村出氏の著作南蠻更紗三二六頁にシエナ鷹のことを

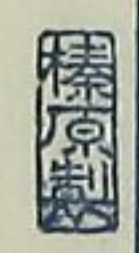
嘶那夜此云鷹
 と翻譯名義集にあるのは那夜ナヤは夜那ヤナの顛倒であらうと申されて居るかシエナは「鷹よ」シエナや「鷹に」といふので顛倒したのではない、鷹を嘶那夜シエナヤといふのは男性名詞の語尾變化で正しいのである、それを顛倒であらうといつたのは梵語に知識の浅いことが判る。

倉クラは梵語でガラ穀倉といふことで枕クラは梵語マカラで頭被ひ、頭飾りから來て居る、更紗は梵語サラサで美麗といふ意味から來て居る。(大正十五年二月十四日記)

○釋の地ははぬ地はぬ、今も古事記に七
 歳の頃の住居を搦んとし記す所ありとありおこ
 かまゝいこときこむる自傳のの前後を印刷し
 おくも方便とあるし流し四十の百位傳載の
 約む、明の先づ二の百ありてその海流を事し

めどう、世伝式、地傳の材料、完のこととらん
か、

○細川有庵を以て家治修言を指し入る、この南
葵文庫の貴重者の一として、原書在世時代一説を
託し、そのまゝ、享保年代活版の木村本云々、修本
原書をよりくし、論語全部部を最体に有する、修
訛謬を正し、聖廟大成版に就し、其のまゝ也、あ
れ、何れを之を珍とせしめ、南紀原が林家元
あを、傷り入る一本を、獲りし家治とせしむるを
七知らる。全部五冊、絹表紙の、北條の、むね
ね、の、おの、世、年、あ、い、ん、北、条、の、あ、を、鐙、銅、る、鐙
め、り、り、其、文、云、云、

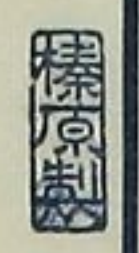


一、家治修言、森修未書之、以、納、聖、廟、予、治
之、林子、而、方、之、且、求、昌、平、塾、上、相、運、之
以、為、家、寶、焉

とあり、お、聖、廟、の、相、材、を、以、つ、て、お、を、存、す、る、こ、と
を、り、く、あ、ら、う、の、北、條、あ、ら、う、と、各、巻、に、あ、る、習、館、の、印、記
と、南、葵、文、庫、の、お、記、を、り、南、葵、文、庫、の、南、四
大、家、に、納、め、り、お、に、北、條、あ、ら、う、の、家、名、を、元、陰、の、さ、き、に、あ
ら、う、こ、の、お、其、内、の、こ、の、お、也、お、也、よ、の、お、く、其、家、に、傳、へ、る、ま
何、の、お、が、お、南、方、陰、を、り、よ、の、お、と、世、に、出、し、を、お、印、を、り
こ、の、お、北、條、を、元、陰、に、元、の、無、量、の、お、或、る、ま、お、結、ひ、が、お
頼、命、を、り、お、お、ら、う、と、る、お、あ、る、自、合、の、お、切、め、り、之、を
を、獲、り、北、條、を、り、不可、あ、ら、う、と、を、お、お、獲、り、お、こ

とくまうり、此書巻尾に森林の坂のふり三輪執事
の坂あり、上は果て深くありて價五千圓也(三
月七日記)

○野宮小宮や玩りの菟集に遊く力を入る散策の好
るの坂(三)を過る田又なるより觸れよ、又か
きのこのが少く、遊るの骨董屋、七道を向は
ることあり、九じんの某骨董屋、時代あり
伏見人形があつたから三個買つた、室のわら
甲架上時代ある人形を一つも買つた、この人形聊
か欠を満した。此方を四角、日出、舟、序、平
山、雀、之字ありて、漁つた、こゝに、骨董の御
紋三平、を金柱をうりて、銀糸が二個又あつたか



ら買求めた。此書、銀糸の、皇室の御儀式に
陸上、この●が相飲した、骨董(三)より、
ある、この、二、三、流石、精進、ある、一個、柳
笠の式、出来し、お、小、器、あり、可、多、目、方、か
ある、他の、一、二、三、鏡、重、の、柄、と、銘、が、刻、せ、ん
て、お、ふ、あ、り、る、物、つ、れ、よ、か、未、詳、か
ある、お、お、中、の、時、代、か、ある、お、お、次、帝、時、代
の、この、と、推、せ、ら、る。架、上、ま、十、教、の、銀、糸、か、あ
る、け、い、ち、骨、董、を、物、の、つ、れ、よ、か、先、者
か、骨、董、者、を、骨、董、仕、し、時、紀、元、節、に、意、法、か、あ
る、せ、え、ん、に、念、に、物、の、つ、れ、山、形、の、葉、子、骨、の、あ
る、外、に、何、も、な、い、架、上、紋、糸、を、感、ず、る、物、柄

北ニ至ルカ見南ツルハ幸ニある也。三月十日記
 〇時〇〇日曜ニ武花の夜の映畫を見れば、ス
 キーの競技文字が、雪國生人の息口を流レ
 流レさせた。流石ニは、此の競技、物々
 の技能がある。高直ニと、元人の中を、行々さま
 ハッスルハ、汗を握らし、四女一國と、その
 競技、乗り、す、競技も、あり、其他初め、見え
 競技の、軌向、い、く、つ、も、あ、う、な、競、技、者、が
 凍地の上、曲、流、を、や、る、の、を、見、て、其、の、技、の、神、入
 の、あ、る、の、を、い、ふ、の、あ、ら、う、な、な、能、者、の、内、に
 ハニニの婦人も、お、れ、こ、い、な、フ、ロ、グ、ラ、ム、の、一、片、を
 ぬ、め、ぬ、ぬ

三月十日



獨乙オリンピック映畫

銀 界 征 服

アーノルド・ファンク監督

時間表

土日 午前一二、三、五午後三、五
 七、二五
 木金月火水 午後二、四〇 七、一〇

一八二八年二月某日、今日は第二回萬國ウインター、スポーツ、オリンピック競技大會の
 開會式の日です、限りないまでも美しい、雪のお伽の國スウキス、サン、モリツツのエンガ
 ーデンの谷は全世界、二十五ヶ國の國民を代表し、我こそ榮冠を得んものと勇み立つ雪に焼
 けた逞しい選手達の勇姿によつて満たされました。
 スウキス大統領代理の出席により、ドイツ、オーストリー、チツエコスロヴァキア、ノル
 ウエー、日本、アメリカ、フランス……等の順に入場式を終り、やがて我等は國民を代表す
 る云々の壯嚴宣誓式が終るや、俄然競技の幕は切つて落されました。五百米、五千米のス
 ケート速力レース、物凄しい五〇軒のスキー長距離走、この競技には参加國が十五ヶ國以上に
 登り、世界有数のスキー家、スウエーデンのヘーデルンド氏、ノールウエーのケエルボート
 氏や遙ろく極東を代表して出場した日本選手の勇ましい姿も見えて居ります。續いて陸軍
 チームの三〇軒長距離スキー競走、それから老人連の呑氣で愉快な、カーリングの競技、そ
 れから素晴らしい鬼人連の起人的スキージャムフ競技、命がけのスケルトン、ホツプスレー競
 技水上の競馬、スキー競技中最も危険だと言はれて居るスキー、ジョーリング等々競技は次
 第に白熱化して行き、やがて大會中の呼びものフィギニア、スケイティングの競技に移り、
 ノルウエーの花形選手、ソーニャベニー嬢が超人的絶妙の美技に滿場の觀衆を唸らせ、最に
 後カナダ對スウイスの水上ホツケー戦にはカナダ軍の大勝利となつて目出度くこの競技大會
 は終ることになりました。
 賞品授與式がすんだ後、ニコルソン氏を初めとし、リユツケルト嬢、クラツコー氏等々フ
 イギニア、スケイティングの職業的一流選手の愉快な大會記念水上祭に移り、ウインター、
 スポーツ、オリムピック競技大會は全く幕を閉ぢました。選手達は皆四年後の來る可き今日
 を約して東西に別れ、エンガーデンの谷には又昔の靜寂が歸つて參りました。

○本日の平山をとりて二の珠をを親る

抱一遺愛の三味線

若者抱一自草

隸者 高山流石

蓋表：一句を越す

三弦 銘 翁

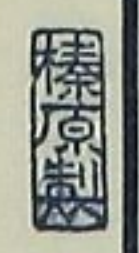
室中の和歌を純全

二刻しなごの一明：装束

外：

光琳の画しな衣類

白羽二重：秋草



多為歌をいふ

黒柿の翁

抱一の方を待せ金言と待く

若の甚四意に抱一の器也

リ

佛の席に武藏山流あり三味線人乃ち武藏の
燗酒をとりて傾き千山也

○自分の玩具棚に五の歌を納めし今も地を存せし
こまをなまろう比。やうな玩具はあか多し玩具
ハ刺せん少くもあか藝術の歌はるあか多
ハから、流石術棚と云ふ方かあかこしといふも玩具
のたふ偏するは甚難ハ自分かあか氣の舞りかしま

支那市販人物

爪哇人形
船の
トイ
ボート

冬世の特
色玩具
の模

多品を
多く採
つて

河内市販物としての銀の人物、河内市販物から見た

流形の銀器、その一類である。日本の模倣品
術と見る料、その集め、その内、ハタタク人
形二基あり、料治制心、為多、中の人物と作り
る、その十基、器給の模倣、セルロイドの鏡、ロー
トウエンのマス、模倣のストリカス等、かまひあ
る。卒然桐を替、一遊、その玩具、雑陳のこと、見
ぬ、その其、実、身、飾、玩具、そのもの、多きをよ
め、玩具と云、養、術、本、位、採、擇、し、以、よ、か、少、き
もの。前、象、二、井、の、細、工、の、鹿、や、虎、を、作、つ、た、よ、い
如、き、人、外、の、及、び、七、つ、の、収、蔵、術、味、か、ある。久、保、の
左、四、の、心、の、玩、具、の、如、き、は、貯、り、る、養、術、品、と、云、ふ、こ、と
か、去、来、る。架、中、の、玩、具、中、冬、世、の、特、徴、と、云、ふ、こ、と



これと云ふ、俗の

多きを、その、考、か、あ、つ、て、甚、集、を、
架、中、の、玩、具、を、陳、列、す、る、迄、に、至、つ、て、ハ、
て、無、意、味、じ、る、の、と、信、ず、る。
その、養、術、品、今、世、の、優、つ、つ、お、お、と、云、ふ、こ、と
か、は、も、ハ、ハ、ト、ウ、オ、ル、ク、が、無、用、じ、あ、る、の、か、お、お、
か、け、た、細、工、の、考、を、云、く、外、四、の、考、を、
その、考、を、名、い、わ、る、と、あ、る、け、ん、を、技、巧、を、
漱、く、く、わ、る、を、愛、する、習、俗、か、ま、く、衣、被、を、
い、ま、甚、飾、の、向、に、用、ひ、る、坊、々、と、云、ふ、こ、と、
か、日、を、む、根、付、や、ア、剣、の、所、名、を、文、房、閣、
係、の、よ、う、に、作、る、の、考、か、あ、る、と、云、ふ、こ、と、
と、板、紙、を、敷、く、と、云、ふ、こ、と、日、を、の、考、を、

説教強盜捕物帳

【3】

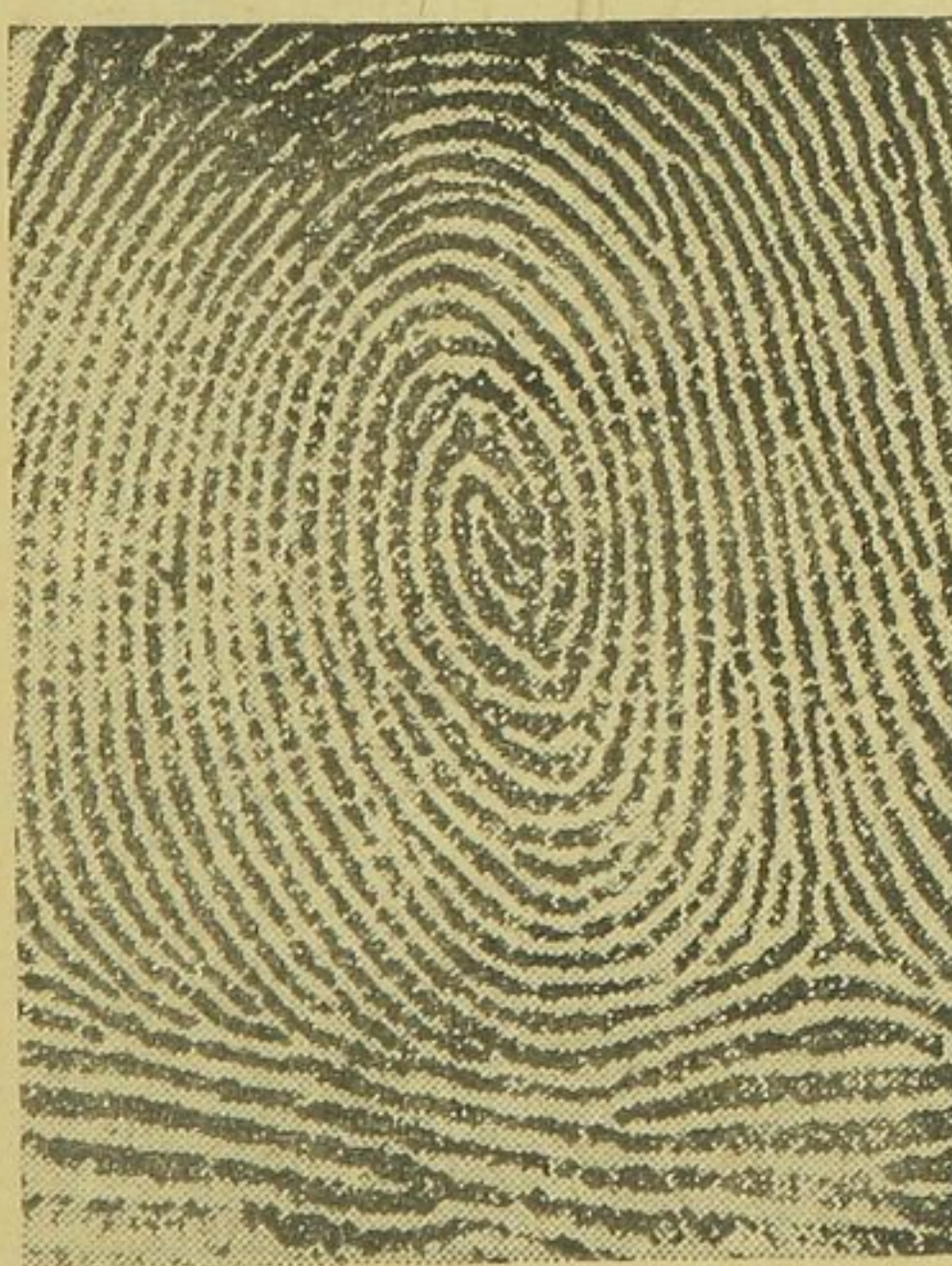
新しき照魔鏡

こればかりは免れぬ『指紋の値』

科學的捜査の恐るべき確實性

近頃の犯罪者は、犯罪手段の研究と進歩を免れようとするにつれて細心の注意を拂つてゐる。それだけ捜査はむづかしくなつてきた。密告や、買り込み材料によつての捜査、贓品を手がかりとしての探偵には往々大きな失敗が起る。そこへ行くと指紋による科學的捜査は、犯人がどんなに強情で罪状を自白しなくても、現場に残された指紋によつて眞犯人なりと斷定することの出来る確實性がある。したがつて指紋で犯人の見當がついたときには「有力な嫌疑者」なんて生ぬるいことをいはず、速捕と同時に「犯人機嫌」とあ

つさり片づけることが出来る。犯罪者にとつて指紋は暗殺で、ある。かれらは指紋を死魔の如く恐れる。説教強盜の松吉が機嫌の端緒となつた板橋町小沼米店へ残した指紋はどんなのであつたかといふと中指の蹄狀紋が一つであつた。この指紋一つを手がかりに八名の指紋係が四十萬の指紋について調査したが遂に見當らず、更に司法省保存の分を調査して、はじめて、説教強盜犯人は妻木松吉であることが斷定された。



指紋はどんなものか—専門的に説明すると非常にむづかしくなる

盗の徒が侵入した時ガラス戸、電燈、茶碗、箸等のひき出し等に手をかけた際、そこに付いた手の跡が唯一の捜査資料となる。強盜松吉の他の犯人に變はれた場合、現場をそのままに保存することの必要はこゝから生れる。

最近指紋によつて犯人が判明した例を挙げると、松坂屋の女店員の機嫌で捕はれた講談強盜、錦町署に檢査されたカフエー荒しの大賊鈴木勇一がある。監視廳鑑識課の陳列室には講談強盜の岡崎が殘してゐた指紋付きの茶碗、茶碗と鈴木勇一の指紋がいくつも付いてゐる。指紋はどのようにして整理保存されるか—松吉の逮捕を機會に極めて概括的な説明をする。

指紋には蹄狀、弓狀、渦狀の三種がある。この三種をさらに0からまでの数字をもつて分類標示する。これを指紋學では「指紋の値」と呼んでゐる。指紋の値を示すと次のやうになる。

1 弓狀紋
2 甲種蹄狀紋
3 乙種蹄狀紋
4 廣義渦狀紋
5 廣義蹄狀紋
6 廣義弓狀紋
7 廣義無紋
8 廣義無紋
9 廣義無紋

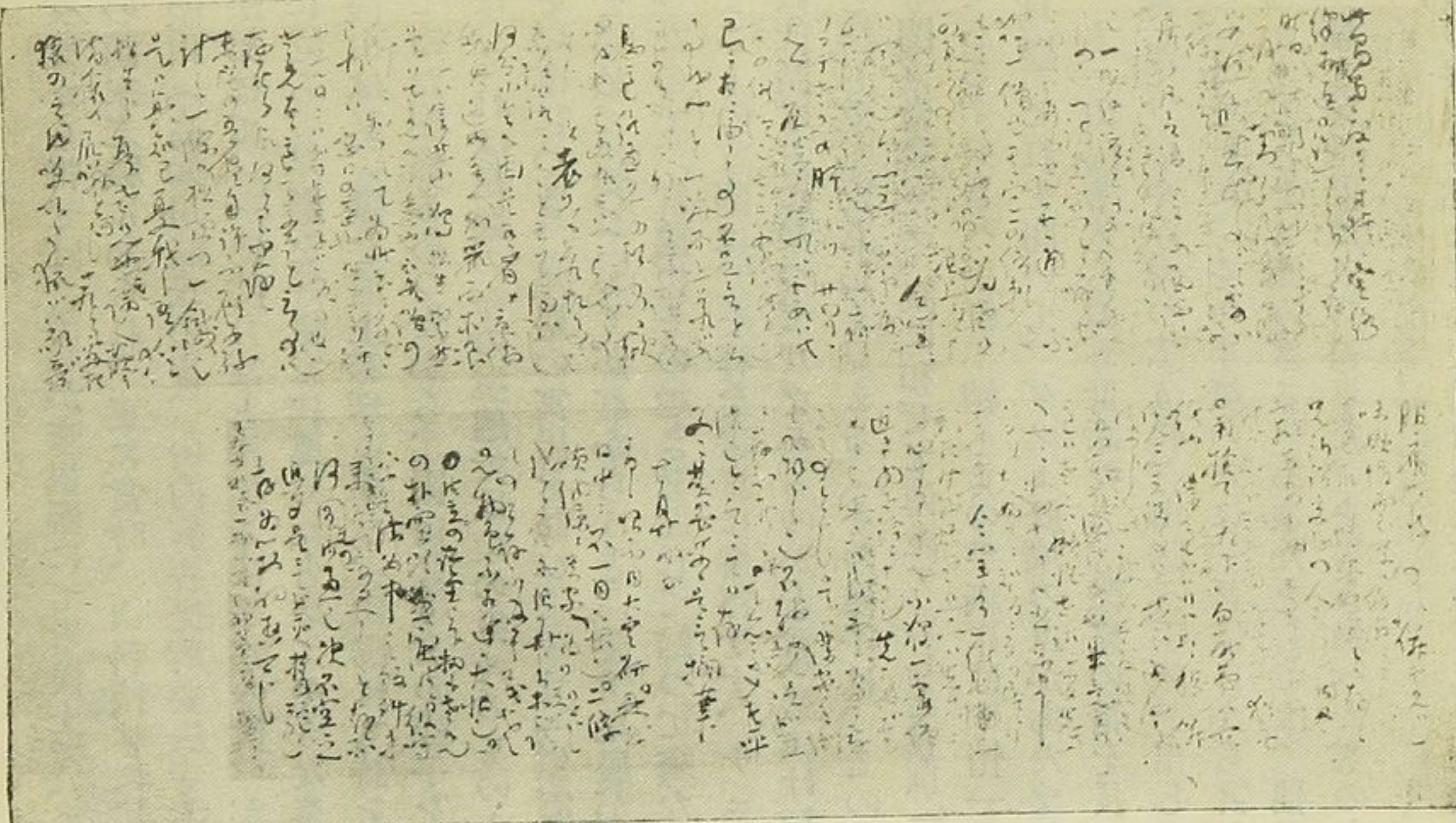
この値を示す指、中指、環指、小指、母指の順で番號をつけてゆく。だから指紋の値は示指が萬位、母指が千位になる。

話は再びもとにもどつて、いよいよ松吉の生ひ立ちへ。(寫眞は擴大した指紋)

頼山陽の梁川星巖宛書翰

此間兩度呈寸楮、以、定絡繹相達、御覽可被下寸存。昨日ハ其方より御出之書、始落手、審別後動履安佳、欣慰此事也。霞山一條ハ、さぞ此通なるべしと、拙も存居。凡、語と云もの、面談ニ濟セバ、彼此直ニ手輕く譯分りもの也、一成一傳語と、何か手重ク聞へいもの也。

一訪貴寓寸存前、聞霞山說、其通でハ不獨此一僧也、其它可倚頼人へも、其通の事ありては、爲老兄可愛事と存より、面上ニ可申寸存處、御留守故、令閨(紅蘭)ニ申置也。令閨之常癖ニテ、和涙傳説アリシ寸存。ソコデ老兄ノ肝ニ、グツトサワリト見へい。面談ニ承れバ、霞(山)ハ此通ノ俗僧也、其の交際ハ此通也(自注)老兄も若キトモ不可言、今の内に身世之計、御定ナケレバ、成ニ如亭寸存愛也。如木俣如小野田、不其歡心、ドウゾ落着を御謀可被成、不貫彦根之籍、而收其祿俸、時々入京、京人と云事、被成置事、無手礙か、先僕ノ爲老兄謀ハ、此通也。已ニ相濟事、不足言と云事を聞と一咲而止、それハそれでよけれど、外の有信誼、有思意、終身可倚頼もの、歡心を失わぬ様には可被成事と申いと、老兄も、しれた事ニても、謹諾々々と云て濟むべし。何分、小生も困是有省。京儒飯見遇田舎人、則聚而求食と云は



(分四寸五各整分四寸八尺一及分五寸一尺二長)

信然也。獨拙生則不然、是ハ老兄も所悉也、霞僧の餌ニ掣れて爲此云々など、被仰いハ、惡口の甚也。拙もコレヲ肝ニサエル日ニハ、グツトサエネバならぬ也。老兄其意でなきと云事ハ存居故、何とも不存。

末尾の吾儘自許、不願子孫計之一條ハ、拙頂門一鍼也。是は眞知已愛我之語、猶拙生之愛老兄也。自傍人觀之、皆猿の尻咬と可申、されども咲た猿の言を、咲れた猿ハ、敬受服膺可致事也。併、老兄は一味懶惰而已、僕ハ倨傲と云大病あり、取人憎怨必深と存。兄所謂交遊門人などの、因是離去もの非少と云事ハ氣が付ズ、亦不知其爲誰某也、猶無御用捨可被仰下、勿厭費卷紙也。僕よりも交る内ハ、ヤハリ(苦言を)申上積也。併向令閨說事ハ、御戒之通、向後仕まじく、不一度、不二度、拙生も眞可謂不知懲惡者也。畢竟、生の意ハ、老兄は懶性、世話ニナツタ先方へ、一々、狀をヤル事ハ出來まじ、ソコヲ夫婦共に(霞山と)知音になり居コソ幸なれ、令閨より一紙被遣、上封だけを煩老兄へば、先方(霞山)ニ得心する事也。不獨一霞僧、近き内、世話ニナリシ先なれば、其通に被成いへバ、往て世話ニナラズ、後來之爲もなる事と(令閨に)申。是は僕家ニ有例事故申也。不聽婦人言ハ、御互ニ存知居、併是亦僕の不左平治也と、今にてハ存也。又々費卷紙ハ、是にて擱筆。

七月廿四日

尙々、恨不日大定解、鼎を日中不一日も恨也。二條積納涼ニ、貴家へ爲御知可申哉と存處、浪華より未被爲歸事と存、不及其義、老兄(積にて)物色不相逢も大恨也。○御立テ(替)の跡金被下、扱も老兄の朴實頭、感涙仕。彼寫字生滯留中之飯料未來、大事ナケレ、其約ナレバ、それなるべしと存所、何圖、兄の御惠也、決不空之近夕是にて、ドウゾへ携駝(梨影夫人)一遊、爲對酌想可申也。兄好甘物ト云、(この)一物(菓子)非囉ひ物也、買たる也、故此ナガラ上。

(山陽)

(梁川星巖宛)

尙々、甌北詩評、此間申上、如何。ドウシテモ、蔣心餘(藏園)、ヨキ様ニ存。 (趙)甌北も、倉山(袁隨園)ヨリハマシナリ。

骨重神寒ト云事アリ、此輩の病、皆坐不重不寒也。雖今此間(日本詩人)可下此四字者、除兄之詩外、僕未之觀也、自愛々々。

(外封ニ「覽後丙丁、慎獨觀之」の朱書あり。)

この書翰、天保二年七月廿四日附にて、山陽(五十二歳)より、在京中の星巖(四十三歳)に送りしもの。星巖は、この前、京都に留寓し、文政十二年三月、妻紅蘭とも、一旦美濃に歸り、やがて又々夫婦放浪の旅に上り、天保元年二月、伊勢方面より入京して、彦根に行き、大坂に遊び、この書翰を送られし時には、大坂より歸京したる直後であ

つた。

この文意から推せば、星巖が彦根藩にて木俣土佐、小野田小一郎の兩家老職に知られ、更に當時、山科檀林に居りし土佐の霞山（高知川崎氏の出、山内家菩提所要法寺主日源上人の法弟にて、一地院月性と稱する法華宗の僧）が、双方の間に立ち、星巖を井伊家に薦めたといふやうな事情もあり、霞山は又、晝を浦上春琴に學び、山陽にも詩を見てもらうてゐた關係もあつたから、霞山より右の様子を聞いた山陽は、これは星巖の今の境遇では策の得たるものと考へ、早速その事につき、星巖の寓居を訪ひ、一寸一筆霞山宛に禮狀を認めて送つておくが好からうと、生憎星巖が外出中であつたので、紅蘭にその趣きを話して歸つて來たが、元來男まさりの紅蘭は、それを善意に解釋せず、ナニ坊主の入らぬ世話などになつてたまるものかと、星巖にけしかけ、滔々と辯じ立てたらしく見える。その様子は、この手紙にも「令閨之常癖ニテ、涙に和せて傳説アリしと存い」とある通りである。只さへ手紙不精（この手紙には懶惰一味とある）の星巖、これを聞いて、グツト肝癢の虫があたまを持ち上げ、ナニ山陽も入らぬ世話だと、激怒の情を長々と巻紙を費して、いやみたつぷりに、山陽へ手紙を出したのであらう。おまけに、その手紙の末に「吾儘自から許し、子孫のはかりごとをも顧みざる」あなたとしては、拙者に對して左様な世話は入らぬ事だ、と書き加へたものと見える。

星巖の客氣に燃えてゐた時分としては、これ位な言葉は

吐きさうにも思へるが、それを柳に風と受け流して、星巖同様、グツト肝癢を起しさうな山陽は、「倨傲」といふ評判の高かつたにも似ず、事實世渡りに細心にして、何事にも友人の爲に謀つて忠なる山陽は、どこまでも星巖の激怒に觸れぬやう、理をつくし情をつくして、この返書をした、めてゐる。その主意は、何も膝を屈して、彦根の家來になるのではなく、京都に腰をすえて俸祿だけ受けてゐればよいではないか、いつまでも放浪生活をつゞけてゐたら、柏木如亭のやうな身の上になつてしまふ、それを考へて、彦根の方を取にがさぬやうに一筆霞山よろこぶやうな手紙を出した方がよからう、それも面倒なら、令閨に代筆させて、上封だけ足下の手で書いておいても差支はなからうといふのである。

山陽が、かく迄親切に星巖の身の上を思つたのも、一つは彼の詩才に感じ、後輩であらうと門人であらうと、一つの長技ある者は獨り星巖に限らず、幾多肩を入れて引立てたところに、山陽の一人としての山陽の眞實を見ねばならぬ。この手紙の追書にも、詩にも「骨重く神寒し」といふ妙處がなければならぬ、趙甌北にしる、蔣藏園にしる、乃至袁隨園にしたところで、近代清朝の名家ではあるが、決して「骨重神寒」の四字は許されぬ、今の日本詩人で、この四字評を受くるに足るべきは、足下一人であると推獎してゐる通り、山陽は、この大詩人の身のをさまりを、どこまでも心配したのである。星巖たるもの、必ずやこの手紙に對して、後日大に悟つた所があつたであらうと思はれ

る。果然、彼は、その後、彦根の客分として、重きをなし、翌天保三年五月、山陽が彦根に遊んだ時には、星巖の取持ち方は非常なもので、木俣・小野田からも手厚き待遇を受けたのであつた。星巖は、その年九月、彦根を辭して、山陽の病牀を見舞うた上、江戸へ向うたが、途中、遠州掛川宿にて、二十三日、山陽の歿したことを聞き、驚悼措かず、七律三首を作つてこれを弔し、又、天保四年夏、山陽の男聿庵が江戸を去るとき、更に七律を贖し、萬斛の涙をそいでゐる。

彼が山陽の病牀にて吟じた訣別の詩に「翻つて恐る郵亭孤枕の夢、屋梁落月に夫君を見ん。」といひ、東海道中の旅の夜に、あなたのおもかげを夢みるのがつらい」と悲んだが、これが虫の知らせでもあらう、掛川の宿にて、その訃に接した心持は、思ひやられて襟を沾はしむるを覺ゆる。

筆者は、昨年、『頼山陽書翰集』の編纂にたづさはつた當時、大方校正の手ばなれ間に、窪田卜了軒主人から、この手紙を示され、いろ／＼差繰りの上、辛うじて最後の頁に掲載することを得たのであつたが、さういふ都合でその説明を加ふるに及ばなかつたのである。今、貴誌上に、この眞蹟の掲げらるゝを聞き、一言を添ふる所以である。

木崎好尙

上り下りとも思ふるが、こゝど卵て風と受ナ流して、是後

下り上り
雛人形の
所も

青達しと紐を為すものも出来れば例へば大長行列を
人形が他つと比ぶる其の一例があるが紐を為すもの
若しいよの雛はあらう。母恐らく重三の即ち
雛を飾る習慣かすむもの人形を他日の基
をさし比ぶるあらう。今日のはり大さき雛を飾る
いか目算の家は在つた一組の雛は尺許のよか
雛壇の井戸邊一杯を占めぬ。昔し交通不便
の時代よりよくもコンナ山道はつたものも京都
から張繰く運人比ぶる多分和の家は其の法
運業と云ふんはみ比から、他の家もも運搬
便利があつたはあらう。表家の五月の節句
幅の大を以つて誇りとしと曰はる雛の大を

七つと書かざるを御つれと見へる。

三月十五日記

亡友菊池の遺著「裸人形」の趣味があるとして百數十
點蒐集し、此一冊を撰んで一説し、此が、さうく
多行多岐の、世時代の古のいふよしの扱ひの
つら。

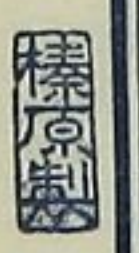
自分の曾つと幸右五つ心のあつた内、おむの
布衣を所おし、此ことかある、人形、幸右五つ
つ、日名、おの、いふ、ある、其、幸右五つ
といふ、おむの、人、お、定、在、の、人、お、あ、い、と、合、つ、れ、
あ、あ、い、心、お、清、い、と、さ、さ、く、さ、さ、く、床、お、置、い、い、
七、醜、い、い、よ、お、無、つ、れ、
吉田、幸、三、と、い、ふ、印、人、も、自、分、か、保、護、し、れ、こ



とがある、其、お、の、京、都、の、出、で、
つ、れ、毎、年、二、つ、三、つ、の、重、三、の、印、人、買、つ、れ、や
つ、れ、こと、お、ある、可、さ、う、上、手、お、あ、つ、れ、か、其、の、お
ハ、今、つ、教、授、し、れ、お、い、
自、分、か、お、あ、い、家、を、持、い、し、兒、女、の、為、お、一、つ、お、
り、難、を、持、く、し、毎、年、一、つ、お、お、お、飾、つ、れ、か、
家、を、改、造、し、し、時、お、全、部、お、お、印、し、れ、お、
此、二、三、と、お、め、れ、一、つ、お、お、お、一、つ、お、お、お、
裏、快、一、つ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
御、印、住、の、御、お、お、お、お、お、お、お、
一、つ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、

とがある、其、お、の、京、都、の、出、で、
つ、れ、毎、年、二、つ、三、つ、の、重、三、の、印、人、買、つ、れ、や
つ、れ、こと、お、ある、可、さ、う、上、手、お、あ、つ、れ、か、其、の、お
ハ、今、つ、教、授、し、れ、お、い、
自、分、か、お、あ、い、家、を、持、い、し、兒、女、の、為、お、一、つ、お、
り、難、を、持、く、し、毎、年、一、つ、お、お、お、飾、つ、れ、か、
家、を、改、造、し、し、時、お、全、部、お、お、印、し、れ、お、
此、二、三、と、お、め、れ、一、つ、お、お、お、一、つ、お、お、お、
裏、快、一、つ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
御、印、住、の、御、お、お、お、お、お、お、お、
一、つ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、

嬉しいこといふふ柵の保伝とんてあつる。
 自分の初こ人かゝる免屋強一栗原ハ先に
 大善時庵の横上ニ在る書り難の板列
 をやつた。さうして物れを一読しきこふたがその
 目ハ左の如く心也合多板がある。種類が
 此の目録の如く多いといふけしきさういふ所の
 心也入基ついで防手ある名をわけたのこハ
 あつた。志かしし書道の多板があることハ
 争ひ難い。
 清め時風ハ各地各代の誰や玩を多く
 物として味家におと嗜さんか今ハ人
 とさうた自分力當つては家をもたぬと云



室町 鎌倉 平安 藤原 泰皇朝 天平 推古 天兒 埴輪 農神 海神 山神 神話 元 神代
 狂言 謡 能樂 御隱居 御茶入 小世 乾也 是真 大雅堂 光琳 歌麻呂 奇子屋 甚五郎 又平
 千代 初音 八幡 春日 御清 大江 真心 芝山 御神樂 柳太郎 廣重 鳳凰 万歳 日月
 二

木古彫
 今變り雛

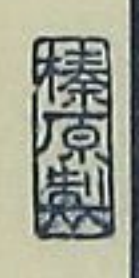
桃山 離
 慶長 離
 寛永 離
 元禄 離
 享保 離
 一休 離
 小町 離
 和歌 離
 豊年 離
 宇治 離
 津馬 離
 園白 離
 福人 離
 天草 離
 出雲 離
 宮嶋 離
 住吉 離
 神宮 離
 長唄 離
 其角 離
 歌舞伎 離
 淨瑠璃 離
 鶴亀 離
 高砂 離
 大原女 離
 助六 離
 山科 離
 源氏 離
 朝妻 離
 末鷹 離
 七夕 離
 羽衣 離
 相生 離
 秘茶齋 離
 八丈 離
 座彈 離
 時浦 離
 島 離
 暫 離
 芝又 離
 甲子 離
 壺收 離
 了人又 離
 名港 離
 大島 離
 大漁 離
 平和 離
 大藏 離
 馬卷 離
 双六 離
 文樂 離
 夕立 離
 越つみ 離

別を一説し、まから起る、るうたの、
 粟原を
 と、姉妹の流を、汲んてゐる、
 此、
 冊、
 今、
 流、
 一、
 土、
 所、
 有、
 也、
 法、
 信、
 橋、
 岳、
 の、
 子、
 息、
 実、
 月、
 の、
 玩、
 具、
 味、
 が、
 あ、
 っ、
 た、
 ら、
 ば、
 何、
 の、
 も、
 や、
 向、
 付、
 け、
 ら、
 れ、
 ば、
 折、
 り、
 づ、
 く、
 の、
 存、
 品、
 も、
 示、
 へ、
 ら、
 れ、
 ば、
 自、
 言、
 の、
 世、
 界、
 の、
 玩、
 具、
 故、
 り、
 枚、
 の、
 言、
 き、
 も、
 ぬ、
 が、
 甚、
 だ、
 手、
 を、
 展、
 開、
 し、
 何、
 う、
 い、
 た、
 こ、
 と、
 が、
 あ、
 る、
 地、
 人、
 も、
 既、
 に、
 奥、
 籍、
 に、
 入、
 っ、
 た、
 自、
 分、
 の、
 就、
 放、
 金、
 津、
 八、
 が、
 甚、
 だ、
 玩、
 具、
 に、
 一

自分、
 の、
 就、
 放、
 金、
 津、
 八、
 が、
 甚、
 だ、
 玩、
 具、
 に、
 一

家と元すむじ多敷であつた。今津ハ玩具ニ
 性懸紫柄も因縁公あることを主本也
 一 確定也。比。博。い。こと。の。私。の。別。在
 ニ移る時ハ大念自孝或。何。え。つ。め。て。早
 大出收神の念身。納。の。受。ま。い。れ。の。か
 出。の。の。為。の。あ。を。受。け。て。皆。渡。物。と。す
 べし。

の前ハ小島欄。重天。今。玩。具。ニ。あ。る。品。目。を。採。し
 多。の。尚。他。ハ。海。列。欄。に。重。き。に。き。骨。骨。毛。毛。類
 干。あ。り。海。列。欄。を。必。す。ハ。谷。易。と。ん。も。ま。ん。と。見
 く。所。今。ハ。工。風。の。か。た。他。の。心。の。た。る。時。の。受。え。る。



不。在。骨。董。の。白。ま。ん。に。重。あ。ん。と。す。この。と。

- 一 銀龍頭舟杓
- 一 銀光玉茶杓ニ
- 一 紫柄光玉茶匙
- 一 糸谷梨形舟杓
- 一 酒色華山木像
- 一 南都七輪國里王指板
- 一 仁何作心市代舟杓
- 一 木彫牡丹舟杓
- 一 木彫卷舟杓
- 一 木彫心舟の香合

田原徹之助

一 蘇山の雀の香合

唐代の銀耳

一 銅研

一 七銅塗金仕向

一 モール塔形香炉

一 織成刺繍香刺小盒

一 香炉塗金小器

一 松の刺研の柶

吳淞の唐三層

一 錦山心香炉

一 土塔七基

一 明黒鶴一双

唐代

一 梵

八五元包物也

一 芭蕉木像

一 砂時計

英國製

一 鏝おし中着

八條柄染香炉

一 木末杯

一 古銅香

一 自然石小皿豆物 六 八五元

一 天台山小皿石

一 寸碧 日上 春装香炉

一 秀衛杯 三

一 和田杯

一 古磁塔杯 大隈系唐造杯

一 井根急須 日中系唐造杯

一 羅漢鈕内印十六 吉田中造也

七代倭鏡

物象眼奈と云

叔父遺物

同 葉洞

同上

都府横瓦研

井根方形香合

長川茂研

千鳥香合

履形研

おん若文夫人遺物

アイ又ハ金二

アイ又ハ刀外三

アイ又ハ漆五

赤画二

ラデン社里酒造店遺物



正倉院遺物横編鏡

金葉旗奉

唐物金カラ華不夜二

鈴

柄つき

高は他他もあふびし。地帯二十巨許の物もハ
島桐つぎきつる。この比さんハ形や、大なるもの多し
又あからさうよあふびし。何んハ器具造し、若
と離しかたきものあり。法則桐を心にとらんハ、
ヤ、大なるものもあふびす。

○日本物系美濃守部の聯合書林の長五郎が
りつろくと逸んよ更々。日念心よあふびし
偉かハ二三も辨を伺ふ。
三月十一日

一 中江氏稿を

一冊

中江氏稿、明治初の文星の一行とあるを
とゆへし、余も一面の誤あり、此者、例の三
研人任論詞表式、方き、第一、第二、第三の
考、好ま、い、ま、い、何の若、亦、此、を、詳
か、り、ま、る、の、由、に、す。

一 日本に考ふる佛國使節の日本記行記

千八百五十七年支那及び日本に送るに
佛國使節、グロワ男爵と共に、地
伴、一、等、書記、及、の、筆、し、等、二、年、分、の



此の中、佛、日本、の、新、を、約、し、る、もの、也
津、着、の、丁、名、在、七、と、あり、未、此、何、人、等、を
詳、か、り、せ、ず、界、紙、の、概、心、に、廣、告、司、の、二
名、を、列、し、る、を、用、ひ、し、り、此、使、節、の、天
津、條、約、兼、に、安、政、五、年、の、江、戶、條、約、を
併、結、し、る、人、と、す。

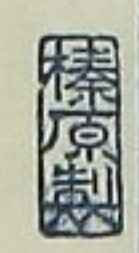
一 報知新支那外二枚

明治六年、秋、政、上、の、件、に、つ、き、井、上、海、軍、の
支、隊、部、任、に、つ、き、政、府、に、送、附、し、る、其
の、全、文、を、載、す、他、の、一、枚、は、大、隈、春、湖、の
秋、政、書、を、載、す、此、頃、の、報、知、新

文の和化を考へたりて而して流俗を以て印刷しあり未だ其式様を重んずる所ののこりしを大に件に因す
了如に懸念あり

一 見文奇談 一二三編 三冊

この流俗成底流俗を以て出版する馬
羽伏見教多記より、保存する人
挿画の移転あり、汚らざるを美観
のよしの流俗考論行の抄録あり
家の跡とすまふ不也、懐の目也



一 台湾軍記 四冊

明治七年刊行、その内容は、
記のよきものあり、世に知らるるものあり
前の巻の流俗の如き、小説を以て味しむるものあり

一 豊城石行 三冊

一 丹波國全圖 寛政年間刊

一 修多羅流俗考卷の圖

豊城石行の先河、是を以て生の文集
也、此刊行する自今も其あり、且刊費の
多き、四門生に對し、募金をして、
七あり、余の花方中、久く流俗のこ

よらうなる、支那國考卷印の印物
れを以て今増ふて補充するもの
丹波地團の全が家祖の記うなる本
也一本とある

○右の日本が初めて来た外人の眼に如何に映し出ると
知ること、**○**誰れも意味のたふることひある。あ
政條約の爲の日本も来た佛共蘭西の使節が口
男爵ハ日本も来た前に支那に主客あり所謂の
天津條約を締結した。そこが随行員の手で
書かれた化行のいろいろの点に日支の比較があ
つて、市街の文化のちがひの榮む日本ハ支那に



優つてあることを云ふのである。下田に着くと其のあ
らうの風光を激賞してゐるのもある。むある。あ
ぬ五年の一家定作申が荒い、亦南列刺唐の
流行人の怪力なものを際、佛の使節が来た大光
ハ井伊掃部助があつた。米田伝説のハ、タウンセント
ハ、リスギあつた。

くるを、此の使節の日本滞りの際の短時日記
つきの判本の親密の大体正物をゆゑである。
○今日の幻術社後家の懐煌出玉六相字経を疑
ふ。此経は十誦比丘尼波羅提木又戒本とい
大正十三年大谷光演が大谷大蔵の同書後
家をもつ三十巻中の一巻を首親の巻尾
に比丘尼元暉所供養経とある外年月を
せきんとする六相時代の言経とすること
を疑ふ。此戒本の一切経中、攝論と
を以つて殊に珍とせらる。此の上梓する大谷大
蔵の同書後家の西本龍山刻若解説を以り
校大する一冊を附し、此の復日委しく

(原本見本)

大正藏經二十三卷律部二(四七六頁上段)參照 縮刷藏經、張帙、七(十行已下)參照

若比丘及請食、前食後行至餘家波夜提 若比丘
 及剎利王水澆頭夜未曉未履寶若門、善、過過波
 夜提除大因緣 若比丘及說戒時如是言我今始知
 是法入戒經中半月半月戒經中說諸比丘及實知是此
 比丘乃至若二若說戒經中坐何況多是比丘不以不知
 故得脫隨所犯罪如法於治應呵令癡善也世未死利
 世不善也說戒時不敬說戒不作是念實有是事不貴
 重不着心中不一心攝耳聽法後是事過波夜提

若比丘及若骨若齒若角作針箭者波夜提

若比丘及作坐林若臥林足應高八指除入陸若過波
 夜提 若比丘及見羅綿罽罽若人使罽罽波夜提

若比丘及佛衣等量作衣過佛衣波夜提是中佛衣量

長九指也他條平量六指也他條平是名佛衣量

若比丘及剎處毛波夜提 若比丘及以指著女根中

過指二前波夜提除洗 若比丘及噉生若熟蒜波

ず、吃は僅に一部の面目をこぼす、
 異体、又その多し、
 一特徴と見らる

七一八

屬	唯	娃	僮	欲
呪	着	晝	若	較
蕪	辟	寔	燃	熱
密	箭	陸	皁	罽
刺	藝	況	癡	攝
聚	數	脩	量	亂
暖	奮	草	腹	截

(本見字文體異なるけ於に中本戒)

昭和四年 三月十六日 本入札

介紹 大阪 池田宗三郎 井上熊太郎 春海七郎 太田平兵衛 植田佐衛 山田嘉助 兒島助 阪田金吉 淺田猪三郎 北岡山田 伊藤喜兵衛 橫山商店 米田商店 山田商店 山田商店 清水辰三郎 內山乙次郎

Table with 4 columns: Item Name (品名), High Value (高値), Item Name (品名), High Value (高値). Lists various items like paintings, books, and tea with their respective prices.



備考 表中記載ノ高値ハ壹百圓以上トス

○左城後柏崎未だの人里に法化を以て熾眉山下
橋標三つを以て一河と名をよめる中、形多の切ぬき
七あり、自分かたつて此の橋標に意味を感して
何分書かしたこともあらず、私を以て所存したことも
あらずしか、今も毎し、椎谷峯か此の橋標を所
持すること、尚時江戸に在りて評判とせし、大橋
の諸君も、心か一説を致し、大勢の儀をつらに
往訪することもある、此の橋の椎谷峯の代
勢の橋待に因り果て、後又の○出用張と
方針を改の、親説を印ふ法を、梅の
侯も、橋標をつり、以て、載を運、ハセ、
この送、法も有りとある、是の橋標、いつしか

橋標

轉聽し、今、村山、後、勢、の、又、初、國、の、
あ、と、い、い、良、寛、と、交、り、あ、る、傳、勸、勵、か、つ、て
私、を、以、つ、つ、こ、こ、と、い、せ、の、記、さ、す、に、如、め、し、私、を

高橋宗権の許りに、
高橋宗権の許りに、往在青柳上より流六來りしと傳ふる勸諭師を本尊とし、數日歩の登道の岬進に觀望ありて常に觀望婦女の絶に問なし。境内松風、松風松風に知音を底に聞く、山樂水明の景勝傳ればとて新にせむとす。文人觀客併して識あるの者、此の企てを置たり。此の本師長寸の浦に、交政八西の年神無の月日、見なれぬ奇材打ち上りたり。木頭に、巨眼高鼻、併して著稱せる巨人の宮を刻せり。手法雄勁、其體魁猛にし、且、觀眺する如し。木身に彫屠川下橋と筆力勁健、古雅なる五大字の四列あり。漁人集ひ寄りて語るに、従は一尺圓は二尺九寸、長八尺七寸餘りあり、此の事人より人に里より里に、郡より郡に及び見る者日に入つて市をなせりと。時に亦文人觀客の話題に上り、集ひ來りて、亦文人觀客の話題に上り、集ひ來りて、郷の評人は、選言となし、詩趣を張りし者、亦妙ならずと。然る時文化の末、頭よりあびきの山上の山、嘉禰古木、乙子の畔りにて之宮の森の木下にわれ居ればぬ、ゆらぐも上人來たるらしと我々の身をかこち、懶らくも獅子庵せる良寛となむ呼ぶ聖り、ひと目しやしけん杖を曳き、之宮

高橋宗権の許りに、往在青柳上より流六來りしと傳ふる勸諭師を本尊とし、數日歩の登道の岬進に觀望ありて常に觀望婦女の絶に問なし。境内松風、松風松風に知音を底に聞く、山樂水明の景勝傳ればとて新にせむとす。文人觀客併して識あるの者、此の企てを置たり。此の本師長寸の浦に、交政八西の年神無の月日、見なれぬ奇材打ち上りたり。木頭に、巨眼高鼻、併して著稱せる巨人の宮を刻せり。手法雄勁、其體魁猛にし、且、觀眺する如し。木身に彫屠川下橋と筆力勁健、古雅なる五大字の四列あり。漁人集ひ寄りて語るに、従は一尺圓は二尺九寸、長八尺七寸餘りあり、此の事人より人に里より里に、郡より郡に及び見る者日に入つて市をなせりと。時に亦文人觀客の話題に上り、集ひ來りて、亦文人觀客の話題に上り、集ひ來りて、郷の評人は、選言となし、詩趣を張りし者、亦妙ならずと。然る時文化の末、頭よりあびきの山上の山、嘉禰古木、乙子の畔りにて之宮の森の木下にわれ居ればぬ、ゆらぐも上人來たるらしと我々の身をかこち、懶らくも獅子庵せる良寛となむ呼ぶ聖り、ひと目しやしけん杖を曳き、之宮

熾眉山下橋標之記 (三)

附 良寛禪師の書法 岡 策

高橋宗権の許りに、往在青柳上より流六來りしと傳ふる勸諭師を本尊とし、數日歩の登道の岬進に觀望ありて常に觀望婦女の絶に問なし。境内松風、松風松風に知音を底に聞く、山樂水明の景勝傳ればとて新にせむとす。文人觀客併して識あるの者、此の企てを置たり。此の本師長寸の浦に、交政八西の年神無の月日、見なれぬ奇材打ち上りたり。木頭に、巨眼高鼻、併して著稱せる巨人の宮を刻せり。手法雄勁、其體魁猛にし、且、觀眺する如し。木身に彫屠川下橋と筆力勁健、古雅なる五大字の四列あり。漁人集ひ寄りて語るに、従は一尺圓は二尺九寸、長八尺七寸餘りあり、此の事人より人に里より里に、郡より郡に及び見る者日に入つて市をなせりと。時に亦文人觀客の話題に上り、集ひ來りて、亦文人觀客の話題に上り、集ひ來りて、郷の評人は、選言となし、詩趣を張りし者、亦妙ならずと。然る時文化の末、頭よりあびきの山上の山、嘉禰古木、乙子の畔りにて之宮の森の木下にわれ居ればぬ、ゆらぐも上人來たるらしと我々の身をかこち、懶らくも獅子庵せる良寛となむ呼ぶ聖り、ひと目しやしけん杖を曳き、之宮

と目しやしけん杖を曳き、之宮

娥眉山下橋標之記 (七)

附 良寛禪師の書法 黒岡 栢策

此の書法は、良寛禪師の書法である。...

娥眉山下橋標之記 (十)

附 良寛禪師の書法 黒岡 栢策

北南史蹟巡り (一) 龍光寺の山門をめぐり...

娥眉山下橋標之記 (三)

附 良寛禪師の書法 黒岡 栢策

後山房の空欄、向つて右に建つ...

娥眉山下橋標之記 (八)

附 良寛禪師の書法 黒岡 栢策

この水は、遠く、水を通り、水が...

娥眉山下橋標之記 (十二)

附 良寛禪師の書法 黒岡 栢策

此の書法は、良寛禪師の書法である。...

娥眉山下橋標之記 (四)

附 良寛禪師の書法 黒岡 栢策

娥眉山下橋標之記 (四) の本文...

娥眉山下橋標之記 (九)

附 良寛禪師の書法 黒岡 栢策

この東北の界にあり、橋、橋...

娥眉山下橋標之記 (十一)

附 良寛禪師の書法 黒岡 栢策

この日味の間には、特に子の...

娥眉山下橋標之記 (五)

附 良寛禪師の書法 黒岡 栢策

私此の橋を断して寄る原因...



○并に啓書印し終つてある物の若残り出版の
の公衆を以てしつて年毎に及ぶ此の家には
十巻の物と小巻物を個を元り只け
ハ其印し其の得たるものに湯を以て
茶子の圓者を捕ひぬきおを家にて
七換する事、中々三冊の者物あり
時書作し其の得たるものと
寶曆六年の書留他の一冊は
をも共に文字と書を組合せ
しものを許し、散り三を
奇叙し之をへし、
に存すといふ

三月廿の記

三

—刀劍—

▼名物
三日月宗近太刀

長 二尺六寸四分五厘

銘 三條

作者

山城國三條宗近(小鍛冶と號せり)永延(九百四十三年前)頃

傳來

初め權大納言日野内光の佩刀なり、内光桂川に戰死せしより畠山ト山是れが追福の爲め高野山に納めしが、後ち豊臣秀吉の北政所高臺院の藏する所となり、遺物として將軍徳川秀忠に贈られたり、古名を五阿彌切と謂ふ。

備考

天下出群の名刀五振の一なり、三日月の如き「ウチノケ」見ゆ

▼名物
紅雪左文字太刀

長 二尺五寸八分

銘 筑州住左

作者

筑前國左 元應(六百十一年前)頃

傳來

北條氏直に仕へし岡紅雪齋の所持なり、徳川家康得て佩刀となせしが、後ち南龍院頼宣に與へたり。

備考

拵の打刀は家康佩用の儘なり。

▼眞守太刀

長 二尺五寸三分

銘 眞守造

作者

伯耆國大原眞守 承和(千〇九十六年前)頃

傳來

新羅三郎源義光の佩刀にして子孫武田累代の寶なりしが、勝頼滅びて徳川家康に歸し、武田萬千代、徳川頼房を経て松平讃岐守頼重に傳へられたり、元祿中柳澤吉保是れに執心し紛擾を醸せしことあり。

備考

既に千有餘年を経たれど作品恰も新たなるが如し。

▼正恒太刀

長 二尺六寸〇五厘

銘 正恒

作者 備前國正恒 永延(九百四十三年前)頃

傳來 小笠原家の重代なり。

備考 正恒中の最も優秀なるもの。

▽行平太刀

長 二尺六寸四分五厘

銘 豊後國行平

作者 豊後國行平 元暦(七百四十六年前)頃

傳來 元と細川家の重代なり、關ヶ原の役、幽齋玄旨、田邊城に籠りしが落城の迫るを見、人をして古今の傳授の卷と俱に烏丸光廣に贈らしめたり。

備考 古へより同作中の白眉として著る。

▽稻葉郷刀

長 二尺三寸四分二厘

無銘

作者 象眼銘表所持稻葉勘右衛門尉裏天正十三年十二月日 江本阿彌磨上之花押

傳來 越中國郷義弘(郷は江にも作る) 元應(六百十一年前)頃

稲葉勘右衛門重通の所持なりしが徳川家康乞ふて譲り受け、後ち關ヶ原の役

小山に於て秀康に與へたり。 富田郷と俱に天下に二つの郷と稱せらる。

▽珥加里貞次大脇指

長 一尺九寸九分

無銘

作者 象眼銘 羽柴五郎左衛門尉長(以下切れたり) 備中國青江貞次 元暦(七百四十六年前)頃

傳來 足利氏の頃駒丹後守の所佩にして妖女のニツコリと笑ふて來れるを切りしと

▼不動行光短刀

備考

云ふ。柴田勝家に傳はり、子於國丸賤ヶ岳の戦に佩びたりしが軍敗れて丹波五郎左衛門長秀の有となれり、次で豊臣秀吉に召上げられ、ニツカリと名付けられ、秀頼の時參議京極若狭守高次に與へられたり。元と刃長二尺五寸ありたれど磨上げて今に至れり。

長 八寸五分
銘 行光

作者 相摸國行光 弘安(六百五十二年)頃
傳來 織田信長の遺愛にして、子内大臣信雄に傳へ、信雄より小笠原右近大夫忠真に贈れり。

備考 不動の像を彫りたり。

▼順慶左文字刀

長 二尺三寸五分五厘

無銘 象眼銘表左裏筒井順慶磨上

作者 筑前國左 元應(六百十一年)頃
傳來 筒井順慶の所持なり、淺野但馬守長晟に傳はり、長晟後ち徳川家康に贈れり。

大阪冬の陣、蜂須賀阿波守至鎮戦功に由り秀忠より賞賜せられたり。

▼大俱梨伽羅廣光刀

長 二尺二寸三分

無銘

作者 相模國廣光 觀應(五百八十年)頃
傳來 伊達美作守忠宗、江戸城修築の功に由り、將軍徳川秀忠より賞賜せられたり

備考 大なる俱梨伽羅龍を彫れり。

▼太鼓鐘貞宗短刀

長 八寸三分五厘

無銘

作者 相模國貞宗 建武(五百九十六年前)頃

傳來 太鼓鐘と號せし堺の豪商所持せり、將軍徳川秀忠の女、姫姫、伊達政宗の子

美作守忠宗に婚嫁の節秀忠より贈る所なり。

▽面の薙刀

長 一尺八寸一分

銘 義光

作者 備前國長船義光 元亨(六百〇九年前)頃

傳來 細川忠興、宮津城中に一色義定を殺せし時、此れを以て一色の家臣日置小左

衛門を切るに顔能面の如くに削ぎ落ちたり。

の内は是利代の高徳や純金の産やまの何れも
 送るおもしろいけいも此方而のこのを二類
 として見ると物走ふのやうに感はれ給ふ也
 麻巾や指物はいろくの坊を二説を述べ
 思はるゝものも交つておれは、いつの坊をいふも
 擇一の行届くもの根のあるは此種の屋敷
 合に免のいふことにある。自分かめ、意味
 を感はれ、刀剣のあつた。刀剣も無上の
 寶と云ふと云くは、建武時代の征勝に
 戦利品の中一は名物の刀剣であつて、その

戦跡あるの勝なりき試さすん美か少好と
侍くらん或は武功と書くする最大の勲一帝す
として授興せんて大切な侍りのためふ其の来
歴を又ると、特に感興に培くさるゝものがある。
中より世伝をまねくも、若木又右二つの刀を
ともあつたか、花物として交こえ比とのも出陣
せん、抜身び出陣せんておれ方の、殊と嬉し
く思ひんた。刀剣に関する解説はけい物
に著すおめとおく。尚ほ北原説合の合
切中へ今一回往説を勧してある、重ん
じ記することもあるしある。

再應往説持に名るとは感くをいふ



其他を録す、

作記の途品の初めを記すを得たりと云ふ
不可なり。一は杉平頼壽伯の平頼朝春
春日賦の詩考を、いふは左近衛頼朝
作記と云ふは名を問ふす也、此より頼朝
也、徳氏也、他の一は杉江の杉平家のもの
るは頼朝と稱する清見の首歌
旅士」とあるは其の体ゆゑし、

伊達政宗の書に、何れも金糸花弁を
描きたる原風を、散々書し、其
書の流弊を、いふ。別に伊達
家より出陣の徒然と題する文

宗自方の逸筆一卷あり、初巻七帖
綴てん此人、凡流をえりぬ
也

貫之の書野切と稱するこよ、断裁を
て各好む家の手は合符せり、土佐の山内
家に存せしこよ、古今集巻二十
全部をて高野切中し、豊後ゆのこよと感
し、今、山内家蔵の行成初孫集に
亦存せり、是子をも名物と為ること
をいへ

次の萬曆帝が豊公に定めてたお冊文
も出陣せん、こい、なり、えり、こと、も、あ



るが、北朝冊をよむせり、隆我武將に其
へ、る、衣冠の内上格、家柄に其つゝ、字、あ
米屋上格家、花をえん、は、り、陣、列、を
あるを初め、えり、こい、る、巻、文、も、添
へ、り

画幅の内、最、七、目、を、惹、き、や、る、は、子、日、印
の、内、湖、の、り、り、小、あ、る、ん、よ、あ、り、作、を
受、よ、こい、り、利、義、満、貴、二、交、十、三
幅、の、一、と、傳、小、左、も、あ、る、べし、御、試、し、他
の、も、花、也

春牛家の金の茶器を再換する、家
康大政陣の後、豊公の金の大法馬

鎌つやしと此の茶屋を修むる為と此で
 刀剣部と暫く心算(心算)大大刀一振あり長
 七丈五寸六分備前古船家盛彦
 永年問ふ心算とこころと紙後夏彦
 城主志田三三守之重の所用と
 我も時代物あり之を以て威座せ
 しか後定重之れを弥彦神社に納
 め郷おのりきんと見よは娘の也此
 刀ありを女を刻す志の情大甚
 花裏もる摩利支天云々とあり
 春成進記

報心り又紙後所載



怪傑前原一誠が
養子に望む(一)

早大名譽理事

市島清吉

『私の幼少時代は、その環境は
 仲々平凡處ではなかつたが、私
 は極く平凡な子供だつた』
 大大隈侯を擁けて、早稲田の學
 園を経営する事四十年、今日の隆
 昌に盛立てた學界の功績者であり
 先覺者である、吾が市島謙吉氏は
 實に越後水原が生んだ天下の名士
 である、氏はその幼少時代を追想
 しながら、先づかう口を切つて一
 語とその眼を輝かすのであつた。

一郷の學風を盛んにしたといふ
 隠れたる大學者藤文、借海堂を近
 き先祖とし、千石船四十隻からを
 動かして海運の事業を営み年々四
 百萬兩からの収益をあげた一代の
 先覺者三會翁(藤文の子)を曾祖父
 とし更に祖父に學者次郎吉を持ち
 急進黨の政客として派手に振る舞
 ひ、郷黨のために狂奔した、雙名
 して次郎吉を父に持つた氏は學者
 と、事業家、政治家の血を滿身に
 受け繼いでいたのである。



『私は極く平凡な子供だつた』

といふのは全くの謙遜に過ぎない
 事勿論だ、經營の才を有する一面
 に、學者である事は決して偶然で
 はないのである。

しかも、その環境に至つては、
 生地水原に水原府廳(縣廳ではな
 く府廳であつた)のおかれた關係
 からその幼少時代に、かの秋の亂
 で有名な前原一誠を始め、奥平謙
 輔、名和鏡、西園寺公望などみな
 さうした中に育つた彼が平凡で
 なかつた事は、前原一誠に養子に
 と望まれた事、その血筋、更に
 今日の日を見る事によつても想像
 に難くない、たと英雄豪傑傳や偉
 人傳に見るやうなその幼年時代手
 におへぬ腕白小僧でもなければ眼
 から鼻へ抜けるやうな神童、怪童
 でもなかつた、一口にいへば温順
 な、しかしさとい子供だつたので
 ある、先祖代々の長所のみを持つ
 て生れたのであつた(寫眞は市島
 謙吉氏)



名を改めてから 達者な身體 (二)

早大名譽理事

市島勲吉

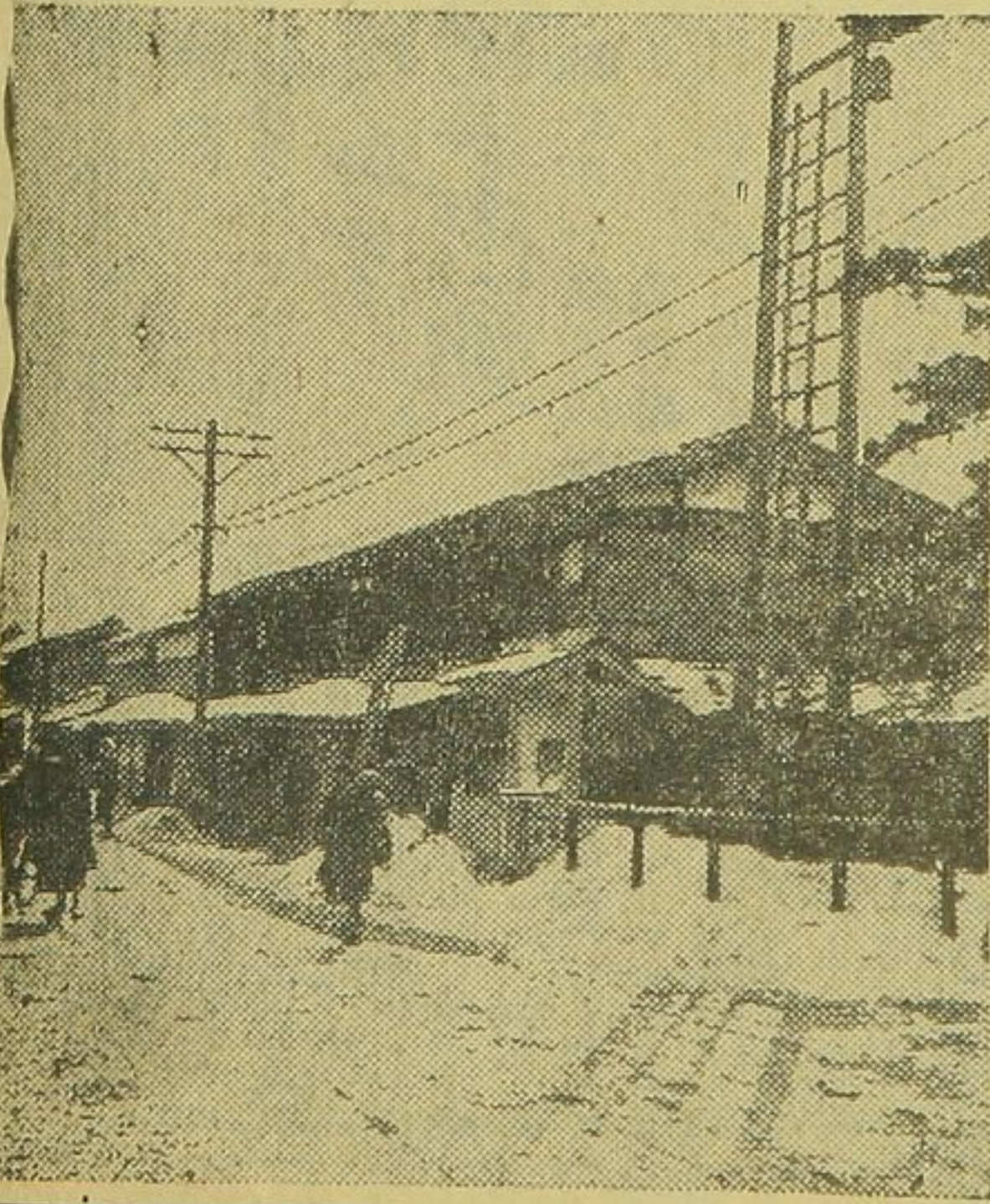
彼は今年七十、萬延元年二月十七日の生れである、水戸の志士たちによつて櫻田門外の雪を紅に染めたのは誰も知らず、この年の三月三日である、彼がこの世に出て十幾日しか経つてゐない時であつた。

『さうだ、どういふ名前に取りかへたものだらう』
と考へるまでもなくふと次郎吉の頭に浮かんだのは吾が越後の詩りとして吾等が神の如く故まう一世の英傑上杉謙信の名であつた、
『さうだ、謙の一字を取つて謙吉としよう、これならいかな病魔も退散するに違ひない。』
そして早速、謙之助は謙吉と改められた、こんな事は勿論謙信に過ぎぬかも知れないがしかし、不思議にも、いままでの病魔な謙之助はいつとはなしに達者になつて元氣な謙吉と變つて行つた。

これはすつと後の話であるが、彼が三十歳の頃、高田新聞を創刊するに當つて山田真南(尊之助)が彼に號を春城とつけた、高田の

附近に謙信が構へた春日山の城跡がある、この城跡から取つたものだから、既に名前に謙の一字を取り更に春日山にちなんで春城の號を持つた事は英傑謙信を一人占めにした感である。

かくて彼は益々身心共に健全なる發達を遂げ今日の大成をなしたのだから地下の謙信もさぞかし満足されてゐるに違ひない(寫眞は出生地跡)
正誤 前回四百萬兩とあるは四萬兩、また三會翁とあるは三條翁の誤り



彼は幼名を謙之助といつた、謙は英雄にちなんだ字であるかどういふものか、彼は一年中病氣ばかりしてゐた、初めて出来た吾が子の病弱を、父も母もどんなに心細く思つた事が、蓄くせるだけの手を盡くして各醫にも見せたが、依然として達者にならなかつた、豪放快活な、そして理性にも富んだ彼の父ながら吾が子のためにはやはり普通人のやう、あゝもし、か

幼ない心にも

映つた戦禍 (三)

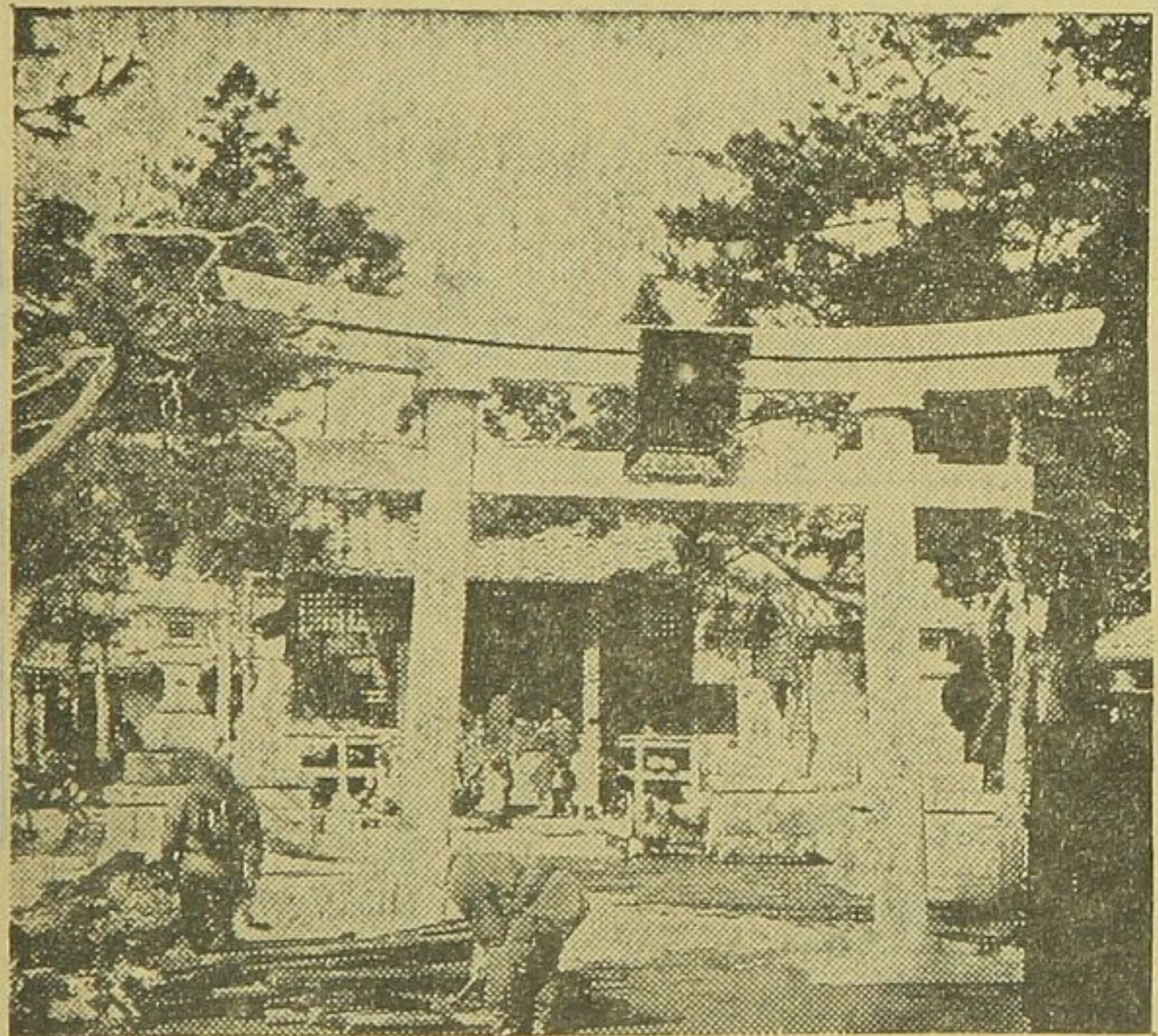
早大名譽理事

市島勲吉

彼の生地水原は、今日でこそ新發田へ行く途中の邊びな町、水原驛のある處だが幕府時代の天領の地で富豪の多い處だつた、中でも七人衆と呼ばれた大富豪に至つては他の地に一寸見られぬ、いまだいふ最高多額納税者であつた、徳川時代に代官の競うてこの地に來たのも、同地が幕府の大切な金函だつたからである。

明治戊辰の役に吾が新發田五萬石は奥羽各藩と共に會津に味方して勤王に抗したのであつた、その結果官軍の攻め寄するに當つてこの一帯は當然戦亂の巷と化し、新發田に程遠からぬ水原も勢ひその渦中にあつたのであつた。

押し寄せた官軍は、水原を手中に収めるや、先づ、彼の宗家の家を焼いた、宗家は町の裏の田圃の



中に、遙かに城の如く築かれ丘陵、會津の兵の據る事にもなつたら、の如くになつてゐたので、こゝに味方に大變不利益だといふ關係か

らだつた、町の村の裏の田圃を焼いたが、その頃の街の混雑、騒ぎは一通りではなかつた。

まだ七つ、八つの子供であつた彼は街の人々のうろたへ騒ぐのを見て戦争は嫌なものだとしみじく思つた、この地に、すぐれて大きな彼の家は、官兵にとつて持つて來いの屯所であつた、何百人といふ軍兵が彼の家を營舎として、たむろし、臨時の牢舎さへ構へて不心得者、敵の間諜といつた者を引つ捕らへ來つてはこゝに押しこめ

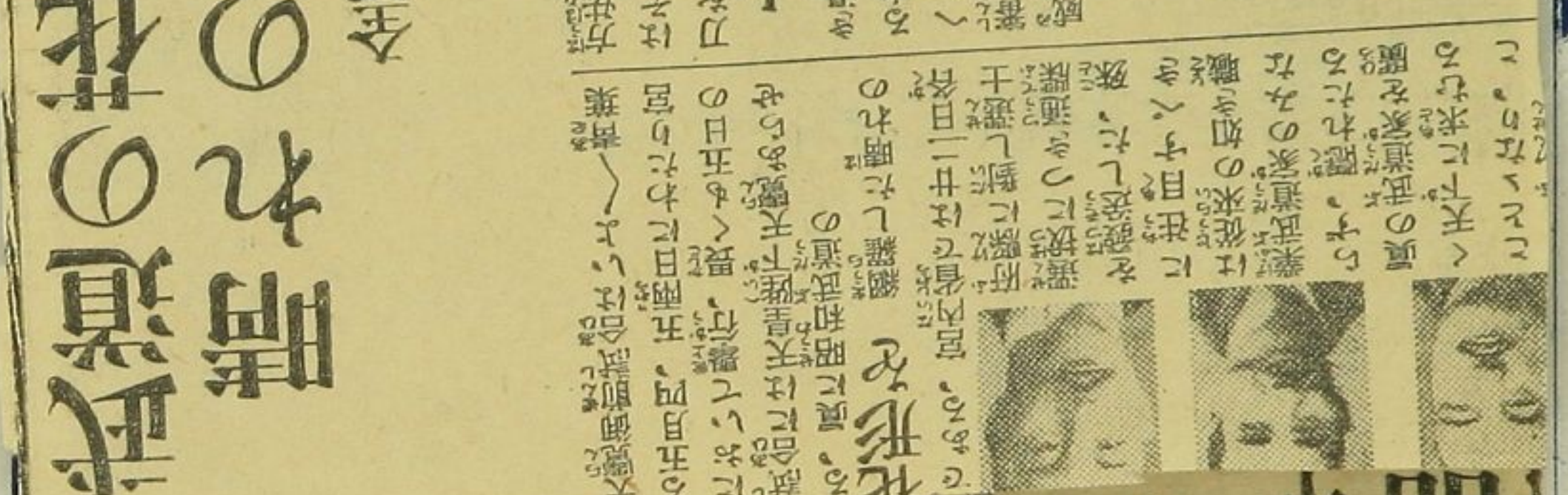
官軍といつても、中にはてんから佐幕も、勤王も、判つてゐない雜兵が澤山ゐた事とて、そこからから、鶏などを取つて來て、彼の家の茶室で料理して食べた、お蔭で代々大事にして來た茶室は、さういふに荒されてしまつた。

銃聲は夜となく晝となく臨時隨所に鳴り響いた、かん聲は揚る、いつ會津兵の押し寄せ來つて、戦亂の巷と化さうも知れない、不安は女子供ばかりではない、この町の一帯を包んで氣味悪い日は續いた。(寫眞は思出多き諏訪神社)

市島詢吉 (四) 明けた水の一夜

明けた水の一夜 (四)

市島詢吉



明けた水の一夜 (四)

市島詢吉

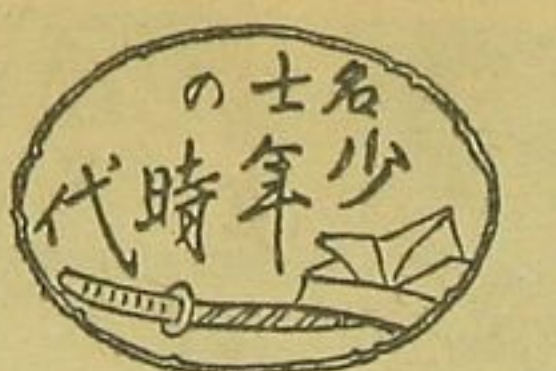
川の堤外で、この年の事ながら、母と一緒である事だけが、せめてもの心強さとして夢中で一ト夜を過ごしたのである。

かくて非常に長く思はれた夜は明けて漸く曉は来た、見渡す限りの泥海の中に、舟ほどことも知れぬ一本の大きな木につながれていたのである、家が流れて来る、薬と根をつけたまゝの大木も、それから木材、家財道具、その外色々のものが流れて行くのを見た、彼が暗の中に大蛇ではないか、大ガマではないか、いやもつと恐ろしい怪物ではないかと見て身の毛をよだしたのがこの家や木だつたのだ。聰明な彼はそれを思つて一人うなづいてゐた。

夜は全く明け離れてゐた、いまだ気がつかずにゐたが、ふと自分等が乗つてゐる小舟をつなぐ大木を見上げて彼は飛び上る程にびっくりした、枝には六七疋の蛇がゐるのである、頭の上にあるやつが、いまにも落ちて来さうに思はれてならないので、彼は母の膝にかかりついてしまつた、大木といつても三分の二は水中にひたしてゐるので蛇は直ぐ頭の上、手の届くやうな處にゐたのだつた。

「あの一は、いまに忘れられないよ、何しろ冒険小説を地で行つたやうなものだつたから、流れて来る家を怪物と見た時など冷水を浴びせられたやうだつたよ。」

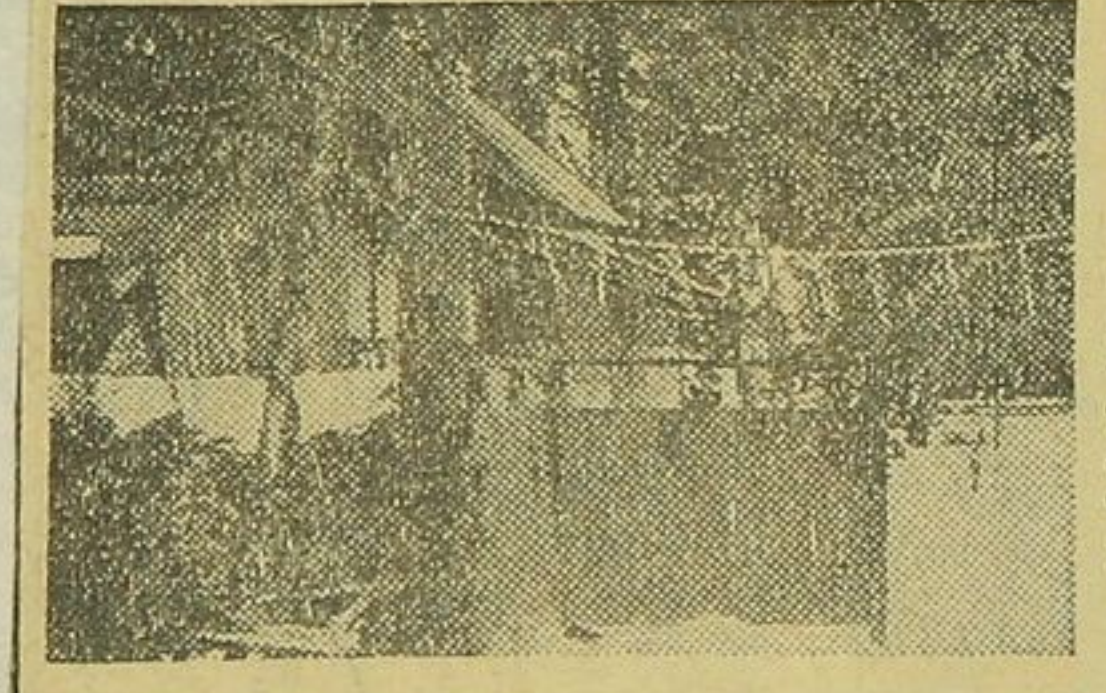
といつてゐる、八つや九つの子供であつて見ればどんな臆小白僧だつても臆をつぶして驚いたことであらう。(寫眞は信濃川堤防が大洪水で決壊して以來出来た吉田部落附近の中の口川)



いまでも残る
名文『養老の孝子』(五)
早大名誉理事 市島詢吉

こゝなら安心と避難して来た吉田新田も未曾有の大洪水に見舞はれて家は水に没し、彼自身としては生れて全く初めての恐ろしい経験をした場所となつて、一家は更に母の實家なる中條町西條の丹後家に避難した、丹後家はこの地方切つての素封家で、今は康平氏が當主となつてゐる。

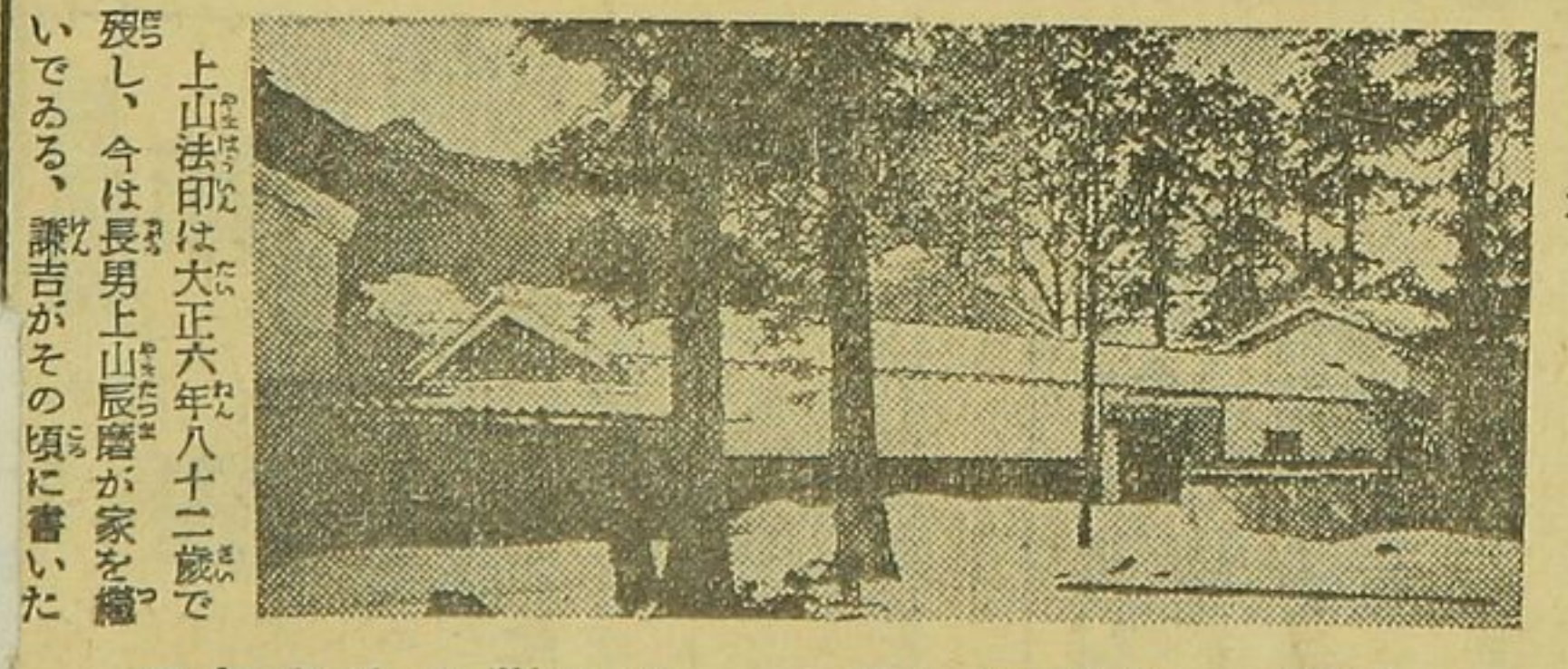
處がこの西條地方も、間もなく交戦地帯となり、そこ、こゝに銃聲を聞くやうになつた、彼の生地水原程ではなかつたが、不安このあたりをついで街の平和は破られ、非常な混雑は来た、彼と母と祖



母は、更にそこから赤川といふ處に避難する事になつたのである。

戦ひは済んだ、母も父も祖母もみんな水原の家を引き上げた、たゞ一人彼だけは丹後家に残つてそこから寺子屋に通つた、彼が九つの年であつた。

寺子屋は丹後家から七八町離れた鷲ノ尾神社で社司の上山南陽法印が主として漢籍を教へてゐたのである、彼は六つの頃から學問の人であつた叔父に學んで相當に出てゐた上、温順しくて品のあるそして聰明たつた彼を非常に愛して、とても熱心に教へてくれた、だから彼がこゝの寺子屋における



ピカ一として断然一頭地を抜いてゐたのだつた。

彼は丹後家に居る事一年足らずで水原の父母のもとへ歸つた、丹後の家の祖父母たちは彼を眼の中へでも入れたい程に可愛がつてゐたので、手離すのを大變惜んだのだつたが、師の上山法印は吾が子にでも別れるやうに悲しがつたといふ。彼は恵まれるべく出来てゐた子供だつたのである。

水原の父母のもとに歸つた彼はその町に寺子屋を営む鶴田法印のもとに通つた、法印は諏訪神社の社司で大魂と號し一風變つた人だつた、學問があつた上に詩才に長じ、氣概に富んだ並大抵の修驗者や坊さんとはその選を異にしてゐた、彼はこゝで大いに勉強したのである。(寫眞は(上)中條町の上山法印の寺子屋(下)同町母の實家丹後康平氏宅)



寺小屋の秀才は

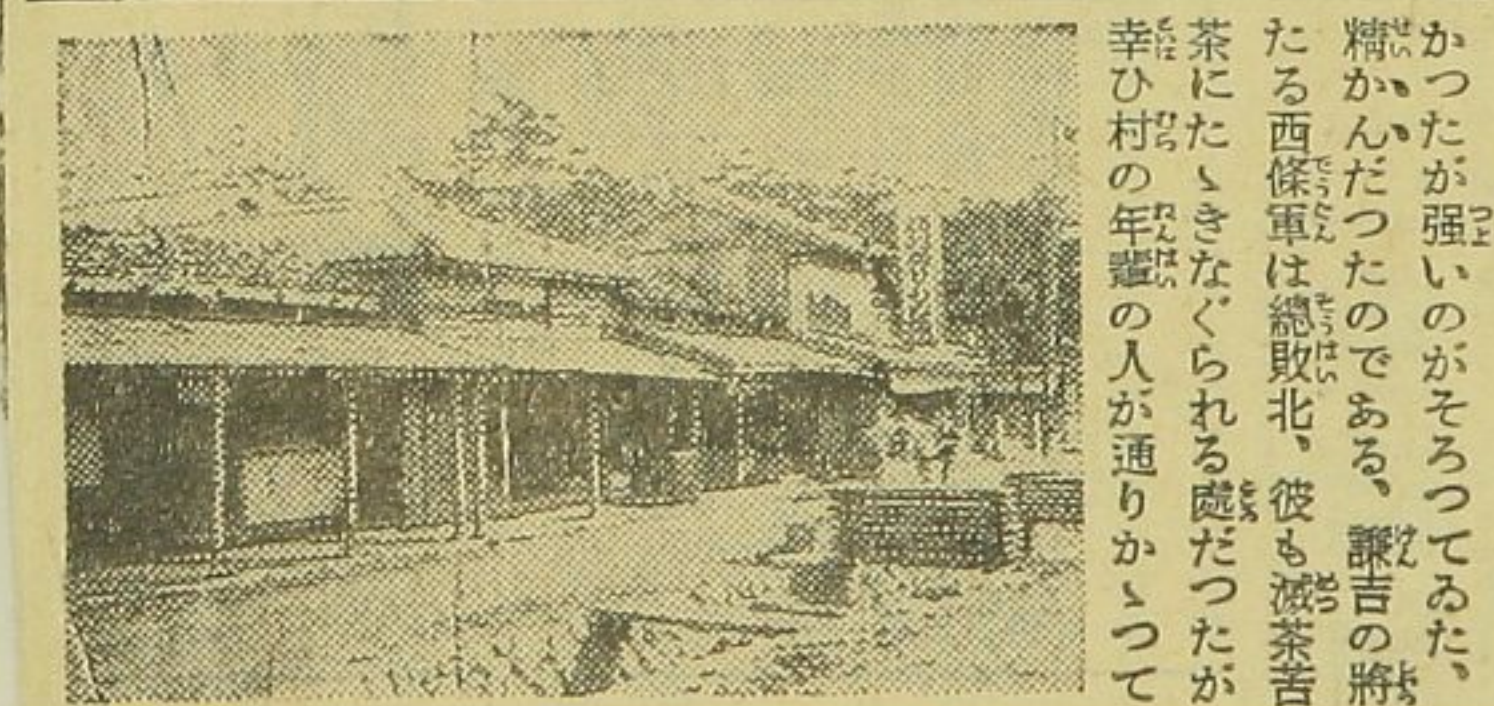
腕白でも權威 (六)

早大名譽理事

市島物吉

師の鶴田法印は他の子供たちとは別に、謙吉一人を社殿の方で教へた、彼が有力者の息子だからといふのではない、彼は既に相當の基礎學問が出来てゐる上、他の子供等の倍、三倍の早さで教へを進めて行つてもどしどし呑み込んで行く能力を持つてゐたから法印は彼に深い興味を感じてかく遮二無二教へ込んだのであつた。

これはまだ彼が母の里の丹後家に居残つて上山法印の寺小屋に通つてゐる頃であつた、子供等は、戦争の後を受けて、盛んに軍ごつこをやつたものだらう、軍ごつこといつても、村の子供同志でやる場合は戦ひの眞似をやるに過ぎなかつたが、他の村の子供との軍ごつこはまるで石合戦のやうに怪我人を出す喧嘩であつた、彼はさうした時いつも一方の大將として、他村の子供等にあまりひけを取らなかつた。



かつたが強いのがそつてゐた、精かんだつたのである、謙吉の將たる西條軍は總敗北、彼も滅茶苦茶にたゞきなくられる處だつたが幸ひ村の年輩の人が通りかゝつて彼は寺小屋においても、他の子供に負けずいたづらをした、そして眼中富者も權者もない師の法印にシノロの葉で出来たハイ取りでなぐりつけられた事もしばしばあつた、法印は彼を可愛がる事も一入だつたが、また彼に對し嚴格である事も一倍であつた。

致つてくれたのであつた。

水原に歸つてからも、軍ごつこは盛んにやつた、彼は官軍の大將にもなればつと昔の義経にもなつた、さうした時、彼は家から立派な金だらひを持ち出し、それを打鳴らして滅茶々にした事もあつた、大事な刀の鞘を持ち出して泥まみれにした事もあつた。

彼は幼い頃からこの一六の家に遊びに出かけたが、その娘が細い手に筆や刷毛を揮つて英雄、豪傑の繪を書き上げるのをしきりに感心したものであつた。

(寫眞は鶴田法印居宅跡)



叔父さんの感化で

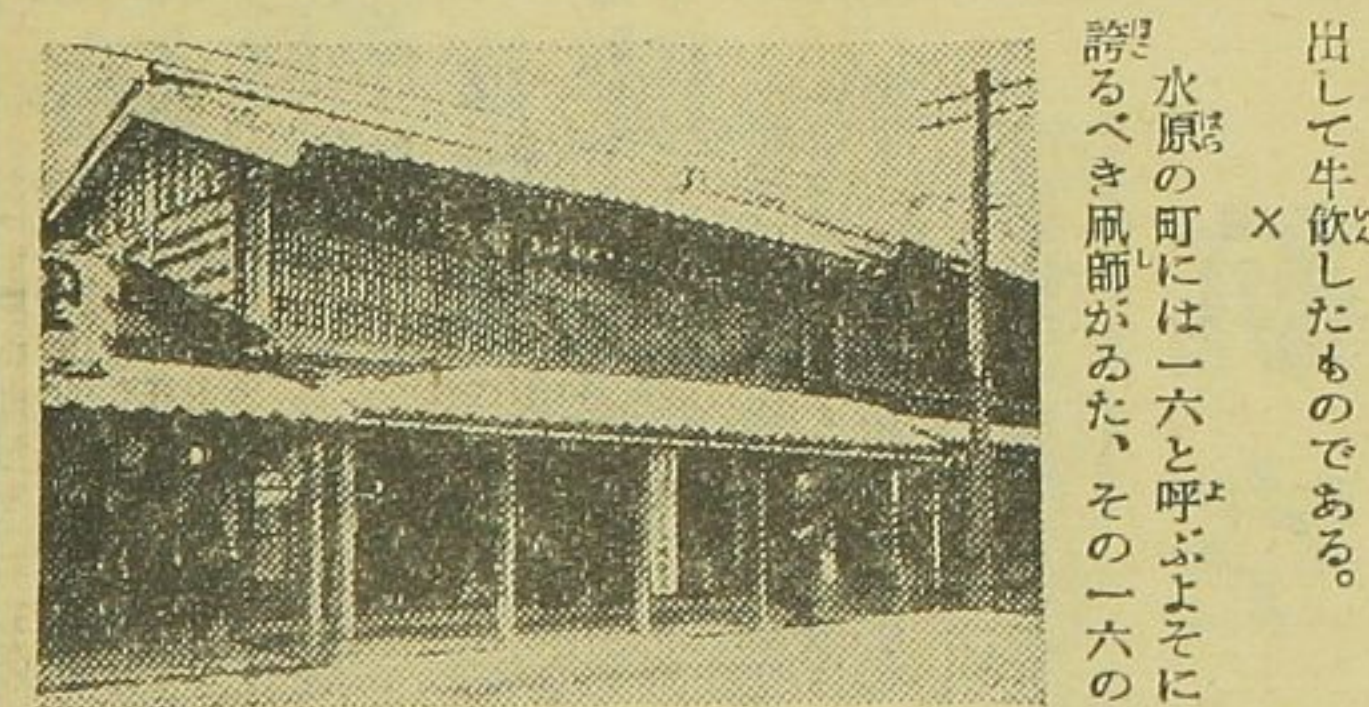
凧揚げに熱中 (七)

早大名譽理事

市島物吉

越後地方は昔から一體に凧揚の盛んな處だが、わけてもこの水原は盛んだつた、大きな凧を持つ事が豪家の誇りといつた譯で彼の家にも百枚張りの大凧があつた、方形で大谷地と稱する強じんな紙で張つたもので凧の心となる竹竿は直徑三寸もあるのだから全體の目方はかなりの重量であつた。

如何にこの地方だからつて大凧は毎日揚る譯ではなく平常は子供一人で揚られるやうな一枚張りから若者でも三十枚張りといふのは大きい方だつた、謙吉は叔父なる人の凧好きの感化を受けてだんだん凧揚に熱中するやうになつた、十や十一でもう卅枚張りの凧を五つ六つも持つてゐる程であつた。



出して牛飲したものである。水原の町には一六と呼ぶよそに誇るべき凧師があつた、その一六の家は若い、二十歳の娘があつて、これがとても、武者繪の名人であつた、越後では白根といふ町が凧合戦で名高いが、そこでは合戦用の凧は出来たが、一六の家では大小何でも出来た、しかも、その繪に至つては實に越後隨一だつた。

明治二年、水原に新しく學校が建てられた、後帝大教授になつた文學博士星野恒が、鹽谷岩陰の許に學んで、郷里白根へ歸つたのを先生として迎へたのである、學校は弘業館と呼び町の富豪、有志によつて出来たものであつた。

明治三年、彼十一歳の時こゝへ入學し寄宿舎に入つて約二年間といふものみつちり勉強した、前漢書、後漢書、史記などを讀んだのである。(寫眞は凧師一六の跡)

かうした大凧を揚る時は若者が幾人もかゝつて、ろくろ仕掛で揚るのだが、ある時それが町の真ん中に落ちて商家の屋根瓦敷を打ちこはし苦情を持ち込まれた事もあつた。

凧合戦—それは二組に分れて空中で凧のかみ合をさせる誠に壯快な遊びで、彼はさういふ時いつも一方の大將に推されたものだらう、大將といつても事實は若者同士の戦ひで、勝つた方はその戦勝を祝するため、大樽を郊外に持ち



詩作の天分に

大人も舌を巻く (八)

早大名譽理事

市島物吉

弘業館における寄宿生の胸ひは實に質素なものであつた。全くと、一汁、一菜で食堂などはなく先生の書齋の次で十数人、先生を首席にして食事をしたものであるが先生の給仕には最年少の故を以て彼が當つたものだった。

謙吉は叔父の教へ、鶴田大塊の教化にもよるのだったが、その頃既に詩作の天分を露呈し往々大人を凌ぐものさへあつた。それに従は年少の割合に非常に進んでゐたので先生は彼の叔父なる人に

「謙吉は將來有望な子供だ」と、いつては賞讃したものだった。先生が彼を一人倍愛したためもあるが、彼が師の恩を忘れず師の鬼籍に入るまでうれしきにつけて悲しいにつけて、おとづれてはそれを告げたものだった。

十三歳の時、家計の都合で弘業館をやめて家に歸つた。當時、家は母方の居村西條に引越してゐたのだった。謙吉はそこから一里ばかり離れた桑地村に肥田野竹場といふ儒者の家塾があつたので毎日

そこへ通學する事になつた。竹場の家にはかなり學力の進んだ二人の書生が寄宿してゐた。共に彼より七つ八つ年長であつた。彼は二人と共に論議をやらされたものである。無點の資治通鑑を讀んだのはこの頃で、日本外史も思ひ半分に讀み、詩もしきりに作つた。

竹場先生は、星野先生とは全く異なつた性質の豪放らしい落で、ある時彼の母の家母後家に二泊した事があつた。先生は晩年の謙吉たち四五名の書生を相手に星野

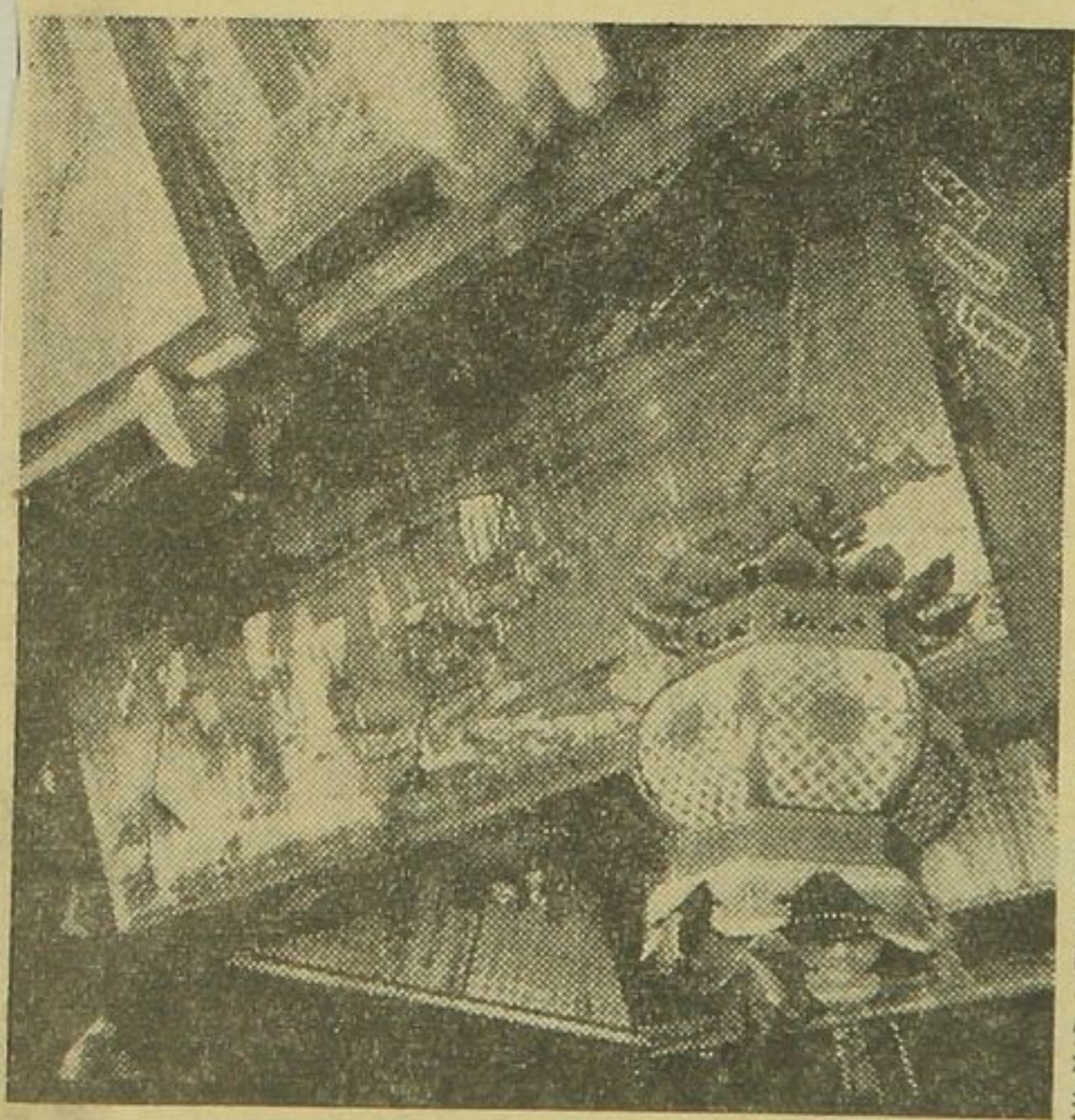
物置りを始め、一人々々奥座敷の床の間に線香を立てる事になつた。奥座敷までは三つばかりの部屋があつて眞つ暗である。これはこぼれ線香を持つて行くと、先生は化物に扮して座敷中をはいくわいし驚かすといふ趣向だつた。勿論その趣向は秘密だつたのだが。

いざ、一人が出かけようとした時である。突然暗の中がうろくろくとたゞ事ならぬ物音に手燭を持

つて皆が駆けつけると先生は大きな腰刀を身にまとうて突つ立つてゐる。足元には丹後家の祖父愛用の茶器がこぼれて散らしてゐた。夜具の袖が棚の茶器を入れた箱に落ちて落ちたのである。さすがに豪放な竹場もすつかりし上げて陳謝したのだつた。

私が卅歳の頃、新設田において政治上の關係からさる人の僞書でさそひ出され來つた車と共に清水谷の邊にはふり込まれた事があつた。その際警察から私の首傷を檢察に伴つて來た醫師が肥田野の塾の同志で長谷川松溪といふ人だつた。十幾年振りで會つたのであるから首傷檢察などさつちのけで往事を語つたものだ。この人も六七年前肥野に入つていまはほとんど知らない。

といつてゐる(寫眞は市島次郎吉氏奉納の白山神社大願)



新潟學校では

常に首席を争ふ (九)

早大名譽理事

市島物吉

水原縣が廢されて新潟縣がおかれ後に衆議院議長となつた楠本正隆が知事として盛んにハイカラな政治を行つたものである。たしか明治六年であつた、新潟に縣費で新潟學校が出來て長岡と新設田に分校がおかれた。

知事は先づ斷髮を勵行し、相當の家の子弟は新潟學校に入るやう強ひられた。謙吉やその弟なども強ひられた。謙吉はその弟など

を断つてこゝに入學したのであつた。この學校は今日の中學に該

當するもので、初めから外國教師を聘し、課程は英米の中學制度にのつたものであつた。

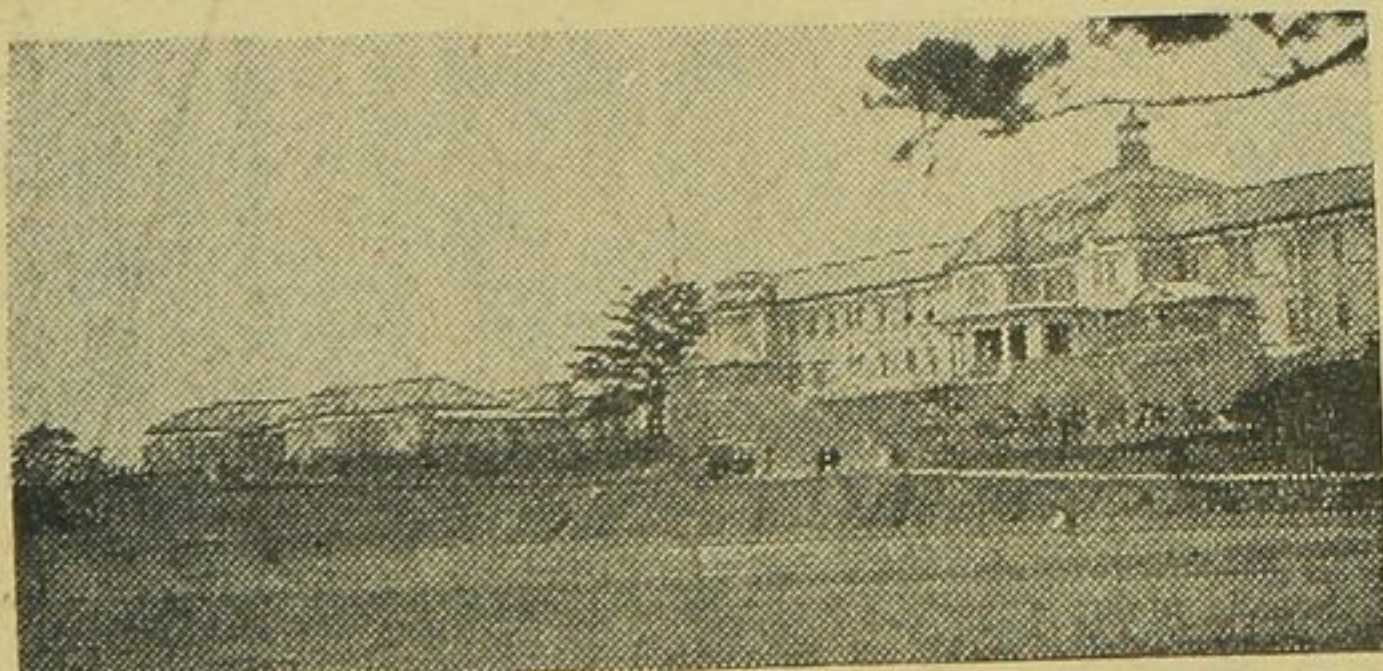
謙吉の漢學の力はこの頃もうかなりの程度に進んでゐた。それが手傳つたのであるが性來頭のよかつた彼は群を抜いてよく出來た

彼の級に秀才が二人ゐた。後宮内省の侍醫となつた桂秀馬と吉田鏡三(共に故人となつた)の二人で彼はこの二人と三つ巴となつて首席を争ひ、幾回か勝ちを制したので

つた。その時の外國人の教師は英人エドワード・モズといふて習字が巧みで書簡を盛んに奨励した。漢學仕込みの彼は常に一等賞を得たものだった。

彼の漢學の役立つたのはそればかりではなかつた。彼は嚴格にも大學生と外字新聞の翻譯を擔當させられ、翻譯したものには敬頭梅浦精一が筆を入れて新潟の新聞に寄せるのを例とした。子供心に己れの筆に成つたものが新聞紙に掲載

される事をこの上なく名譽に心得ともうれしくなつたものだった。大竹貞一、内藤久寛等はこの新潟



明治八年、彼十六の時、彼が望んだ東京の機會が來た。さしもの大富豪であつた彼の家もこの頃不如意となつたので彼の學費は叔父の養家和泉家から世話になる事になつた。いよく、出京の時母方の祖父が東京見物に出かけるといふので同行する事となり會津道中を七日間腰栗毛したのであつた。勿論その頃は汽車も人力車もなかつた。途中の宿屋の設備と來たら全く話しの外で往還に風呂桶をすすめて浴した事もあつた。

『古河から船で兩國橋に着いた時は朝だったが話しに聞く東京を實際に見た時の氣持ちは何ともいへないものだった。いひあらはず事が出來ないが今までも決して后れない』といつてゐる(寫眞は新潟學校の



行くところまで揮ふ

縦横の鬼才 (十)

早大名譽理事

市島清吉

東京に出て来た謙吉は間もなく親戚に當る熊倉美雅といふ人の處へ身を寄せた、熊倉は當時工部省に奉職し番町學校の隣に住んでゐた、家には五六人の子弟がゐた、その學校に通つてゐた、彼はそこから英語學校へ入學したのである

この學校は當時一つ橋通りの舊高田藩主榊原の邸にあつた、舊邸をそのまゝ多少の手入れをしたもので新舊學校に比べるとその設備は甚だしく見劣りはしたが、學科目はずつと進んでゐた、新舊の秀才も、勝手が違つたから最初はかなり骨が折れたらしかつた。

しかし、頭もよく賢けず嫌ひの彼のこと、間もなく首席を占めるやうになつた、こゝに入つてから二年目、彼は大學準備門(いまの高等學校)の試験を受けた、もう一年経たなくては受験資格がないのを受験間際に同校を退學し、只の書生として受けたのである(中學二年では受験出来なかつたが只の書生なら出来た)處が受験者七八十人の中の二人の一人として見事パスしたのである。

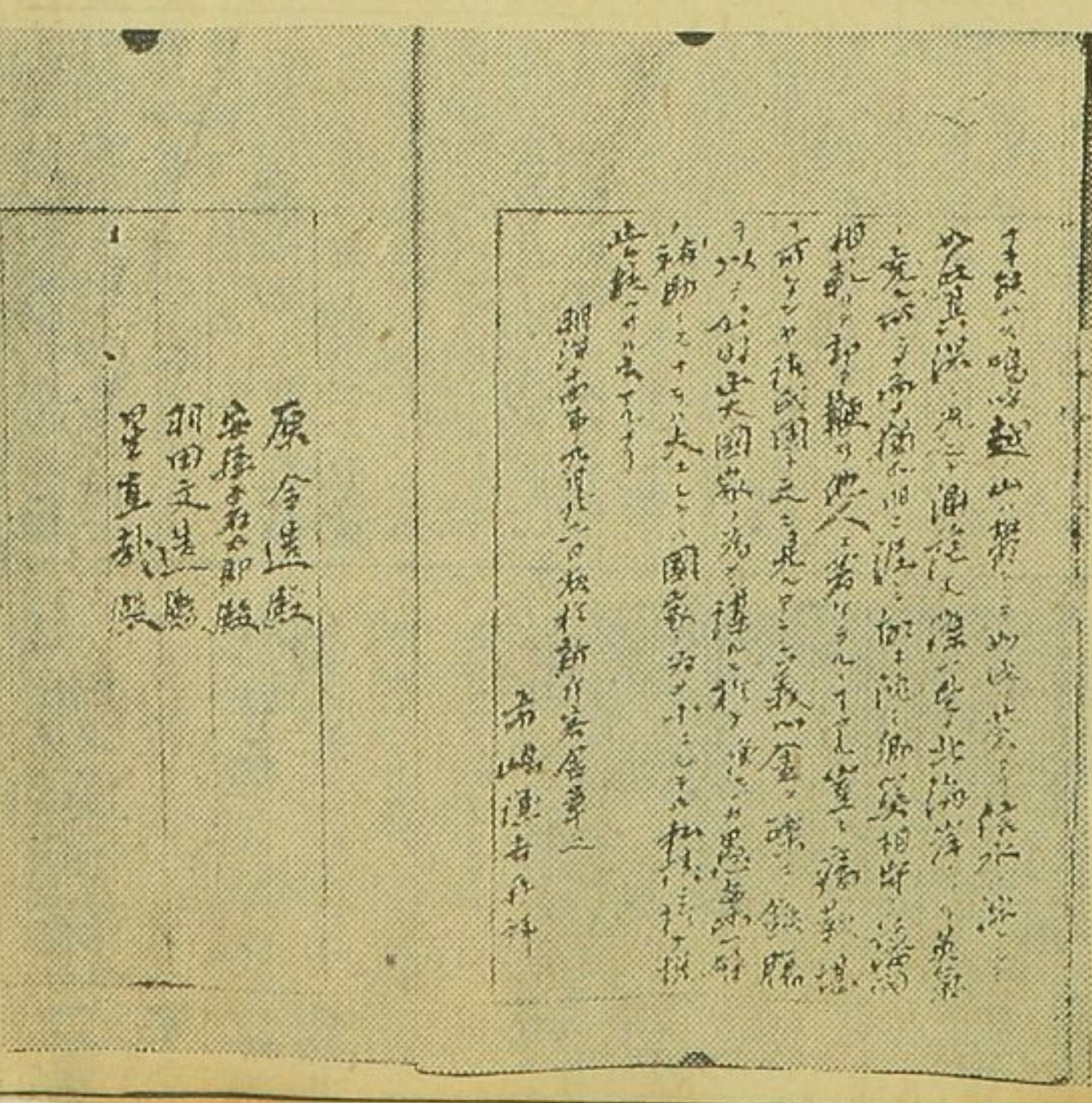
彼が東京に來てからの勉強振りは大したものだった、幾何學の如き大部分獨學でやつたものだ、晝は子供を見てやり夜深更まで勉強

その頃大學には給費制度があつて彼も給費生となつたので大して不自由もしなかつたが、それにしても、彼のこの質素振りは、數年間進學塾の生活に慣れてゐたためもあつたらしい。

帝大文學部を卒業後、小野梓等と立憲改進黨組織に參畫し、政治家として立ち上つたのも、高田新聞、新潟新聞等と共に、讀賣新聞の主筆と編輯界に身を投じたのも、彼が學者と、事業家と政治家

の血筋を兩身に受けつたといふと、いへよう、そして早大を經營する事四十年、いまその名譽理事であり、日清印刷社長である事も血筋といへようか

彼の青年時代、東京から故郷水原の友人に送つた『政治論』なる書簡が、いま新發田上町の書店藤治吉の家に所蔵してあるが、美濃紙三枚に滔々政黨の必要を論じたもので實に彼は十八、九にして政黨の必要を叫んだ先覺者だつたのである(寫眞は政治論の末尾)



原今進 藤治吉 市島清吉 早大文學部



印象に深き

早大名譽理事

市島清吉

早大名譽理事

筆を擱くに當つて前原一誠との關係を記さう

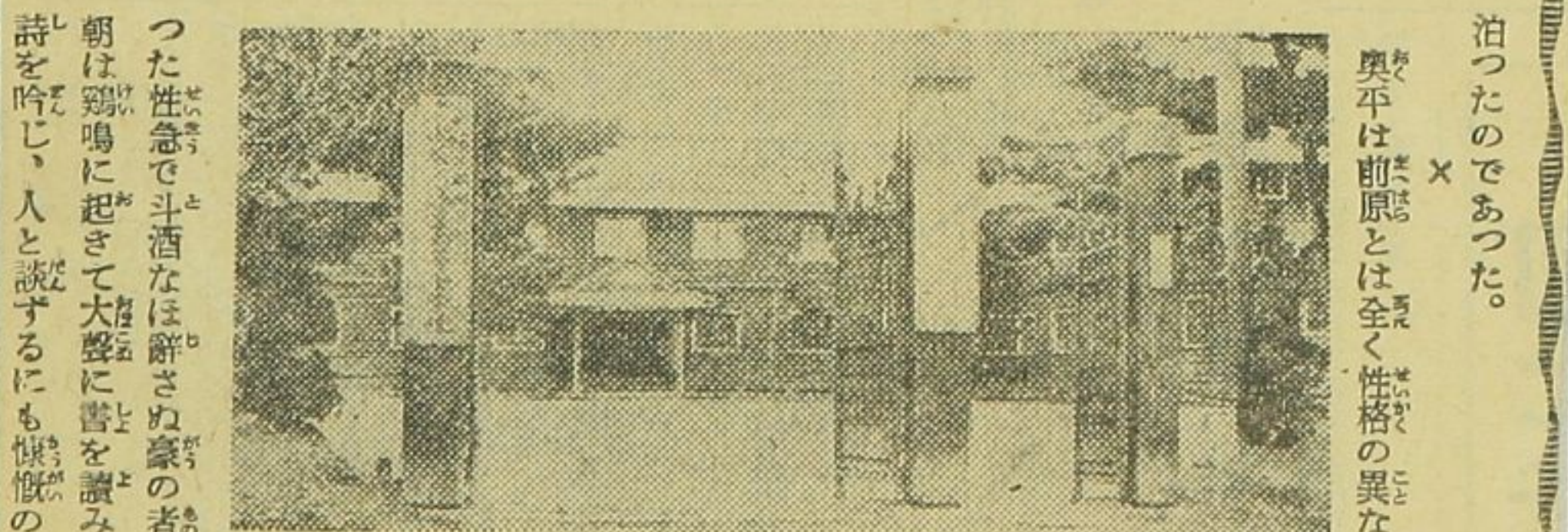
前原一誠は參議格の人、一度は參議となつた當時の大官であつたので彼の家でもそれを光榮とし隠宅を提供したのであつた、前原は書生三人と共に起居してゐたがその書生等は頭髮を切り下げにして紫の紐で結つてゐたのだつた。

前原は顔面に有痕のある物に無頓着な至極應揚の人であつた、金銭などには極めて淡泊で毎月の俸給など奉書紙に包んだまゝそこへ放り込んで手も觸れぬといふ態度だつた、しかもその奉書紙の俵

給はいつとはなしに無くなつてゐた、といふのは前原を取り巻く有志たちが色々無心をいふて捲き上げてしまつたのである、そんな譯で前原が水原府廳を去る時など旅費さへなく彼の家からそれを提供した程だつた。

ある日の事、裏門からづか／＼と入つて來た壯士風の男があつた、羽織も袴もつけず兵兒帯に大刀を打ち込んで、色飽くまで黒く眼光炯々として如何にも恐ろしい面魂に門番が誰かすると

「前原はるかッ」といふのみで名も明かさず、すか



泊つたのであつた。

奥平は前原とは全く性格の異なる

この二人は珍らしい子供好きであつた、謙吉兄弟はよくこゝに呼び込まれて何時間かを遊んだものである、この時奥平は謙吉に『敵愾』の二字を書いてくれた、前原は『忠孝節義』の四字を書いた、双方共にいまも彼の處に所蔵されてゐる。

前原が退後を去るに當つて謙吉を養子にと望んだのであつたが父母が彼を離さなかつた、彼が若しこの時養子になつてゐたら彼の『秋の亂』は彼の十七歳の時であつたから多分前原に殉死してゐた事であらう。終り(寫眞は元弘業福源現水原小学校)

次 日本鋼管副社長 白石元治郎氏

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

標原表

以下
5 丁
白紙

侯爵井上勝之助氏所藏

美而生乎原南
滿地风光潤
遠一天秋雷年

井上勝之助

戰迹留餘憤
更使呼起行人亭
暗秋

此詩は伊藤公薨去の前日（十月二十五日）哈爾濱に向ふ車中の作にして隨行室田義文氏が持ち歸りて故井上馨侯に贈れる絶筆である。



梅原製

